

孫文・梅屋庄吉と
明治大正長崎事情 I



長崎伝習所

孫文・梅屋庄吉と明治大正長崎事情塾

孫文・梅屋庄吉と
明治大正長崎事情 I

目 次

塾長あいさつ	1
平成23年度活動報告	2
孫文と梅屋庄吉	
長崎における梅屋庄吉の考察	4
孫文・梅屋庄吉が初めて出会った頃の長崎	8
孫文の略歴と長崎寄港の背景	10
梅屋トク	13
孫文や革命を支援した人々	
宮崎滔天	17
渡邊元	21
鈴木天眼	25
西郷四郎	30
金玉均と長崎	37
長崎を愛した外国人	
ドロ神父	43
ロング	48
ラッセル女史	51
長崎の基盤産業に関係した人 岩崎弥之助	56
長崎の水道騒動に関わった政治家とそのほかの人たち	
西道仙	63
日下義雄と鄭濱子	67
日本初のダム式水道建設（日下など）	70

長崎の中の会津 北原雅長と日下義雄	80
長崎の福祉事業家 安永半三郎	85
長崎の味をつくった人 陳平順	90
長崎を訪れた文化人と長崎の文化人たち	
栗原玉葉	94
北原白秋	96
吉井勇	102
永井荷風	107
斎藤茂吉	112
永見徳太郎	116
五足の靴（与謝野寛、北原白秋 木下柰太郎、吉井勇、平野久保）	122
おわりに	126
三ヶ島正彦さんを悼む	128
調査報告書に登場した人物	129
塾生名簿	133

孫文・梅屋庄吉と明治大正長崎事情塾

塾長 村崎 春樹



江戸時代、海外への窓口として独特の文化と海外からの色々な情報を受入れてきた長崎。西洋そして中国、東南アジアとの貿易で栄えた国際貿易都市長崎。でも、今日多くの人たちは長崎は、幕末の神戸、横浜などの開港によって、その役目を終り、衰退していったと思っている。では、なぜ中国辛亥革命で活躍した孫文を始めとして多くの人たちが長崎を訪れたのでしょうか。

特に孫文は9回も長崎に寄港、訪問した。さらに蒋介石を始めに多くの中国、朝鮮半島、ロシアからの亡命者が長崎を訪れた。

当時の長崎は、上海およびウラジオストック経由で、国際電信が開通し、また多くの国内外の船舶が行き来し、中国大陆、東南アジア、朝鮮半島、そして欧米の事情、そして人が交差していた時代であり。

中国大陆とは国と国との関係に影響されない絆が生れていた。

その長崎の雰囲気の中で梅屋庄吉も多感な青年期を過したことも、庄吉の生き方に影響したのかも。

このような、明治大正の長崎を再発見し、埋もれている事象、場所を掘り起こして、多くの長崎の人たち、また長崎への興味を持っている方々への事情発信を行うため、私たちは、「孫文・梅屋庄吉と明治大正事情塾」に集い活動してきました。

その結果を、小冊子としてまとめ皆様にお届けいたします。

この小冊子発行については、原田博二先生、宮川雅一先生のご指導、長崎伝習所事務局、長崎市さるく観光課の方々のご協力に厚く感謝いたします。

平成23年度 孫文・梅屋庄吉と明治大正長崎事情塾 活動報告

平成23年

- * 5月13日 長崎伝習所開所式及び第1回塾定例会
(勤労福祉会館)
- * 5月27日 第2回塾定例会 アマランス第1研修室
今後のスケジュール説明
- * 6月10日 第3回塾定例会 アマランス第1研修室
グループ編成
- * 6月24日 第4回塾定例会 アマランス第1研修室
講話「孫文と長崎について」宮川雅一氏
- * 7月8日 第5回塾定例会 アマランス第1研修室
調査テーマについて
- * 7月9日 研修旅行福岡県柳川方面
- * 7月22日 第6回塾定例会 アマランス第1研修室
昭和6年長崎市街地地区について
- * 8月12日 第7回塾定例会 アマランス第1研修室
長崎国際観光コンベンション協会との連携
孫文関連コース企画協力
- * 8月26日 第8回塾定例会 アマランス第1研修室
鈴木天眼(カ)住居の位置について
西郷四郎妻チカ実家料亭「萬年喜」について
西川屋旅館の位置について
鈴木天眼の墓、五島に在ることについての紹介

- * 9月8日 第9回塾定例会 アマランス第1研修室
調査結果報告書(小冊子)編集について
- * 9月16日 第10回塾定例会 アマランス第1研修室
九州創生塾参加報告
- * 10月14日 第11回塾定例会 アマランス第1研修室
鈴木天眼子孫訪問調査報告
- * 10月28日 第12回定例会 アマランス第1研修室
調査レポート原稿について
- * 11月11日 第13回塾定例会 アマランス第1研修室
伝習所まつりと実行委員選出の件
- * 11月25日 第14回塾定例会 アマランス第1研修室
伝習所まつり3月20日開催
- * 12月9日 第15回塾定例会 アマランス第1研修室
調査レポート原稿締切りと提出状況について
- * 12月16日 第16回塾定例会 アマランス第1研修室
調査レポート原稿最終締切り日

平成24年

- * 1月13日 第17回塾定例会 アマランス第1研修室
原稿監修結果と見直し
- * 1月27日 第18回塾定例会 アマランス第1研修室
- * 2月10日 第19回塾定例会 アマランス第1研修室
- * 2月24日 第20回塾定例会 アマランス第1研修室
- * 3月9日 第21回塾定例会 アマランス第1研修室
- * 3月16日 第22回塾定例会 市民会館7階
- * 3月20日 長崎伝習所まつり 観光通り

◎ 長崎における梅屋庄吉の考察

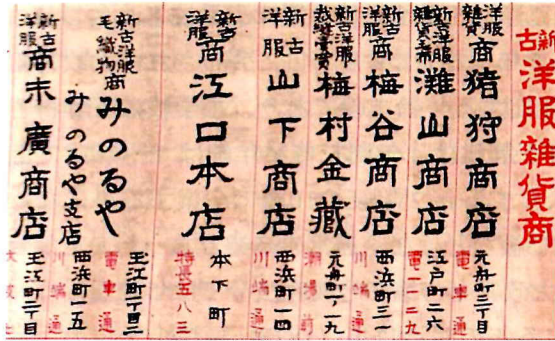
梅屋庄吉は、長崎出身の実業家であり辛亥革命の指導者孫文、フィリピン独立運動指導者アギナルド將軍を支援し、さらに中国、シンガポールなどで写真館経営。またシンガポールでの映画興業の成功を経て日本へ帰国、日本国内で映画製作・映画興業を興し、映画会社「日活」創立に関与。後年は日中関係改善のため尽力するが病のため昭和9年（1934）11月23日死去享年65歳。

庄吉誕生から養子へ

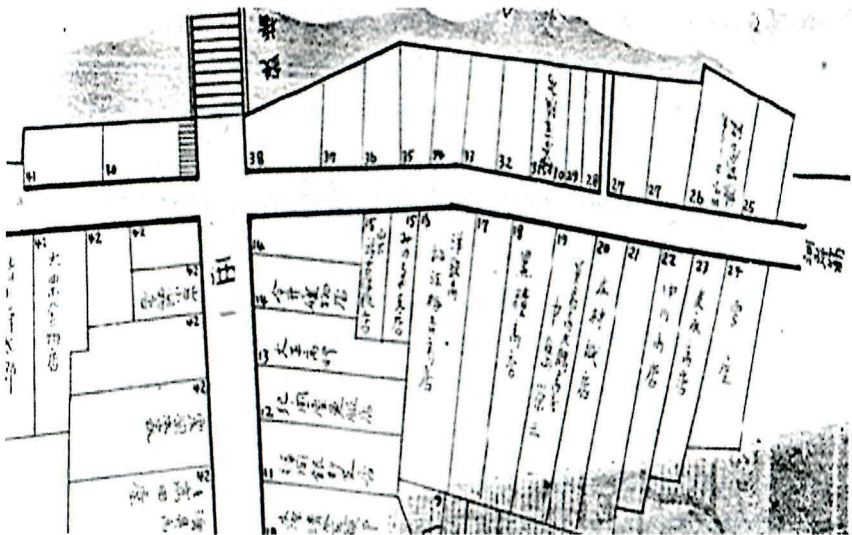
庄吉は、明治元年（1868）11月26日長崎在住の本田松五郎と妻ノイの間に生まれるが、詳細な時期は不明であるが誕生から5歳までの間に、幕末から明治にかけて長崎の西浜町川端通り31番戸で貿易商と精米業を営む梅屋吉五郎と妻ノブの養子となる。その経緯については不明である。梅屋商店については、長崎歴史文化博物館蔵の「外務諸書留」に収録されている「明治元年改めの崎陽商人名前」に売込商人並びに買請商人として『西浜町梅屋吉五郎』の記載がある。明治25年（1892）長崎米穀市場開業に伴う仲次人の組頭の一人に選出され、同年11月20日付の鎮西日報の広告に『仲次人組長梅谷吉五郎』の名前がある。また明治27年（1894）6月16日養父吉五郎が76歳で死去した後、養母ノブ名で梅屋商店は営業を続け、長崎歴史文化博物館蔵の明治33年（1900）発行の「長崎県一圓富豪家一覧表」に『西濱 梅屋ノブ』が記載されている、その年間所得金は310円以上とされている。養母ノブは明治36年（1903）3月23日他界、享年74歳であった。養母の面倒を見ていた庄吉の妻トクは、後を番頭夫婦にまかせ、庄吉のいる香港へ移る。

梅屋商店の位置

梅屋商店は、時代は変わるが長崎県立図書館蔵の「大正8年7月鎮西精図社発行の長崎市地番入分割図」の西浜町地図に『梅谷洋服店』



と新古洋服雑貨商の欄に『梅谷商店西浜町三一 川端通』とある。このことは、明治36年迄は梅屋ノブ、実質的には庄吉の妻トクが切り盛りし、その後は番頭夫



婦が経営したものと考えられる。この場所には、現在の浜町アーケード入口鉄橋から中島川の川上榎津橋方向へ川岸に沿って10軒の商家が軒を並べ川へ降る小路を挟んでさらに4軒があった。現在の路面電車軌道より東側の車道分が当時の川端通りで、この通りの東側には12軒の商家があった。梅屋商店は、川沿の鉄橋から上流へ8軒目にあった。

庄吉と小学校

庄吉は、明治6年(1873)に出来鍛冶屋町八番地にあった私塾佐藤塾に入り習字を習う。明治8年(1875)2月東古川町にあった舊川小学校に入学するが同校は榎津町5番地に移り榎津小学校と改名した。当時の学校制度は、明治5年(1872)9月5日に公布された太政官布告214号にて在学年齢を規定する年齢主義であり、小学校は下等科と上等科に分かれ、小学校下等科は4年制で修業年齢は6～10歳であった。庄吉は8歳の時入学すると2年後の10歳で卒業する事になる。この事から庄吉には、飛び級などはなく通常の卒業であった。ただ明治12年(1879)9月29日太政官布告第40号教育法令では年齢規定は廃止された。庄吉が卒業する年の明治11年(1878)榎津小学校の児童304人により同小学校へ旗竿台とその築造費及び旗2流の寄付が行なわれた時の記録「学務課報告掛記録簿」(長崎歴史文化博物館蔵)に梅屋庄吉の名前が残されている事から同校の卒業は同年であると推定出来る。梅屋庄吉と梅谷正人について庄吉を含め、当時の資料には「梅屋」または「梅谷」の表記が数多く見られるが、どれも「うめや」であり、江戸期を含め明治期までは表記について厳密なものではなくても通用していたものと考察される。例えば明治25年(1892)の鎮西日報の米穀市場仲次人広告には「梅谷吉五郎」であり、大正8年(1919)の長崎市地番入分割図の新古洋服雑貨商の欄には「梅谷商店」とある。さらに庄吉自身についても明治24年(1891)農商務大臣陸奥宗光あてに提出された鉱山試掘願には願人として『長崎県長崎市西浜町参捨壺番戸 平民 梅谷正人』の名がある。また明治36年(1903)に真珠採取の日本人漁師西田重助以下6名が金二千円を無利子でオーストラリアへの渡航費用として借りた思借証の宛名は『梅谷正人様』とある。これらの事から、庄吉は30歳後半まで正人の名を使っていた。これらの事から正人の名は、実父である本田松五郎と実母ノイが付た名前と考えられる。

梅屋庄吉自伝「わが影」について

庄吉は、大正15年（1926）1月18日「M・パティ―倶楽部」の発会記念パーティで自伝『わが影』を配布した。同自伝には庄吉が幼少時に岩崎弥太郎に背負ってもらった話、自宅の裏から中島川に落ち仮死状態から蘇生した話、小学校卒業後多額の現金を持って家出した話などや金比羅山騒動などがあるが、岩崎弥太郎との話は、弥太郎は明治元年から明治2年にかけて長崎・土佐商会在閉鎖され、大阪・土佐商会へ移っており庄吉は、まだ乳児であることから無理があると云わざるを得ない。またその他の話も庄吉が記述しているのみで、当時の新聞記事などには無く検証は不可能である。ただ長崎以外の事は、各種資料によって検証出来る。

まとめ

梅屋庄吉は、長崎での逸話には後日談が多く、庄吉が他人から聞書したものもあり、とくに岩崎弥太郎との逸話は、家人より聞いた話、さらに中島川転落事件なども同様と考察される。孫文との友情と辛亥革命に対する支援は、義侠心の強い庄吉の性格と果敢な行動力、卓越した商才によってもたらされたものである。一方「梅屋」存続を願う庄吉を養子とした養父吉五郎並びに養母ノブの思いに対して庄吉は、どのような思いを持っていたのか、庄吉は日本帰国後、養父養母の墓参りなどの記録はない。また両者の墓の存在も未だ梅屋庄吉の子孫からも明らかにされていない。

（村崎春樹）

参考資料

国父孫文と梅屋庄吉

車田譲治

六興出版

革命をプロデュースした日本人

小坂文乃

講談社

◎ 孫文・梅屋庄吉の初めての出会いとその頃の長崎

彼らが出会ったのは、明治28年（1895）3月13日のことであった。時に梅屋庄吉が27歳、孫文29歳である。場所は、梅屋庄吉が明治27年（1894）に香港の目抜き通り、セントラル・ロードに開業した写真館「梅屋照相館」のお客であり、孫文の恩師でもあった、医学博士のジェームス・カントリーが2人を引き合わせた。年齢が近く若い2人は、梅屋照相館の2階で語りあった。孫文は中国の自由平等を求め、民主主義を目指し、革命活動をしている思いを梅屋に熱く語った。普段の口調は穏やかであった孫文の語り、革命についての強い一語一語は重く梅屋庄吉の心に響いた。革命についての考え方、計画、理想、その全てに強く共感し、孫文に「君は兵を挙げよ、我は財をあげて支援す」と約束した。この日から、2人の交流が始まり、絆が結ばれる。梅屋は孫文への財政支援のため、多額の私財を投じた。生涯にわたり、妻トクとともに何の見返りも求めず真の友情で孫文を支援つづける。

梅屋庄吉の生い立ち

梅屋庄吉は、1868年11月26日、長崎に生を受けた。明治元年生まれである。新しい時の風に誘われるように、この世に登場した梅屋は後に、時代の先端を疾走し続け、時代の荒波をものともせず、実に多くの人びとと友情を育みながら、波乱万丈の人生を歩むことになる。梅屋は本田松五郎、ノイ夫妻の子であったが、生まれて間もなく、遠い親戚に当たる梅屋吉五郎、ノブ夫妻に子どもがなかったため、跡取り養子に迎えられた。吉五郎は、長崎の中心を流れる中島川の川端に「梅屋商店」の看板を掲げ、貿易業や精米業を営んでいた。場所は現在の長崎の長崎市浜町（西浜町）で江戸時代を通じて経済都市・長崎の賑わいを象徴する地域であった。

香椎トクの生い立ち

トクは、壱岐郡可須（かす）村（現・壱岐市勝本町）に明治8年（1875）5月8日生まれる。8人兄弟姉妹の三女として育ち、頭の回転の速い少女だった。士族の家柄だった香椎（かしい）家から明治24年（1891）に17歳のとき梅屋家の養女として迎えられた。20歳のとき、27歳の庄吉と結婚。当時の女性としては、大柄（165cm）で見た目も中身も、頼もしい女性だった。

一方、その頃の長崎、明治28年（1895）の情勢は、①長崎市長が北原雅長から横山寅一郎に交代した。②長崎市が風頭山上にごみ焼却場を新設する計画を立てたが、地元民の反対で断念する。③大浦25番に外人経営のセントラル・ホテル開業する。大浦異人街が最も、繁栄したのは、明治28年から同36年の日露戦争前までの間であった、外人の往来もこの間が最も頻繁で、こうした動きとあいまって高級ホテルが続々と登場した。④長崎市の戸数9,557戸、人口7万1,485人、貿易額1,061万5,000円（{対全国比4%} 輸出424万4,000円、輸入637万1,000円）、⑤日清戦争（1894～1895）が起こると地理的及び軍事的関係から内外船舶の出入りが頻繁となり、輸入貿易は大きく躍進し、戦後経済界の活況に刺激されて港勢は活気を呈した。入港商船隻数851（国内船106、外国船745）で、その後8年間は上昇景気で長崎潤う。

（川口政行）

参考資料

孫文・梅屋庄吉と長崎	2011(平成23)年	長崎県、長崎市、 長崎歴史文化博物館
日本の中の近代アジア史	2007年5月号	田中健之
旅する長崎学17	2011(平成23)年	長崎県
長崎市史年表		長崎市

◎ 孫文の略歴と長崎寄港の背景

中国革命の父と呼ばれる孫文は1866年マカオに隣接する広東省香山県（現中山県）に生まれた。

中国東南沿岸部の青年達の多くが海外に渡ったように孫文も1878年、13歳で兄の住んでいたホノルルに行き現地のイオラニ校で欧米式の教育を受けた。17歳で帰国、1892年香港西医書院で医学位を取る。しかしその間盟友の陳少白、陸皓東、鄭士良らと中国の現状を憂える情熱を共有し、中国改革を志すようになる。1893年天津で李鴻章に上書を出すが無視されると、1894年再びハワイに戻り革命結社興中会を結成して、華僑資本に頼って武装蜂起の準備を進める。

1895年に帰国すると香港に興中会本部を置いた。この年日清戦争の敗北を革命の好機ととらえ、広東で解散された軍隊、民団、会党を加えて10月広州蜂起を起こすが失敗する。陸皓東を失い、自分も指名手配となって鄭士良、陳少白と共に同年11月日本に亡命する。翌12月には陳少白を横浜に残しハワイ経由でアメリカ、ロンドンと次の蜂起に向けて革命援助獲得の旅に出るがロンドンで中国公使館に監禁される。この時イギリスの司法権無視の拘留が新聞に報道され孫文の名は一躍有名になった。解放されると孫文は大英博物館で猛勉強をして革命理論を学んだと言われている。

1897年8月再び日本へ入国、この亡命中に宮崎滔天と知り合って意気投合、宮崎の実家熊本まで出かけ、東京に戻る途中長崎（第1回）へ来て渡辺元を紹介されている。この後段々と平山周、犬養毅、山田良政、頭山満などと会って東京、横浜を中心に革命運動の足場を築いてゆく。1900年6月義和団事件を機に次の惠州蜂起の準備のため長崎経由（第2回）で香港へ出国。しかし英当局が上陸を許さず鄭士良に革命の指揮を任せ同年7月には神戸へ戻った。翌8月孫文は今度は上

海を目指して長崎経由（第3回）で出国。しかし上海は戒嚴令が厳しく、そのまま9月長崎港（第4回）へ戻っている。次に出かけたのは台湾、アモイの対岸にあり当時日本の植民地になっていた。孫文は総督児玉源太郎を訪れ武器援助を頼む。児玉はアモイ占領と引き換えに承諾したが、これはその後の政局の変化で協力は得られなかった。

同年10月の惠州蜂起は失敗し、11月孫文は横浜へ戻った。

1902年1月孫文は長崎経由（第5回）で香港に出港している。2月には横浜へ戻っており目的はわかっていない。日本では段々と数を増してきた中国人亡命者や留学生の反清活動が活発となり1902年には章炳麟ら留学生が開いた「中華亡国242年紀念会」が企画され孫文との連携も始まった。1903年孫文は2度目の欧州旅行に出かけ、そこでも欧留学生に興中会への参加を働きかけている。

1905年孫文が日本へ戻ってくると宮崎らが仲介して黄興や宗教仁の華興会、章炳麟の光復会等との大同団結を図り同年8月「中国革命同盟会」が結成された。孫文が総理となり、後には機関紙「民報」も発刊され、その中で孫文は革命理念として三民主義を提起している。

しかしそうした孫文等の日本での反清の動きは清朝を刺激して1907年3月孫文は日本政府から国外追放となり長崎港から（第6回）出港した。それからは1911年黄花崗蜂起まで広東とその周辺での8回の蜂起、1895年の第1回から合わせると10回の蜂起は全て失敗となった。この間長江流域や北京中央で革命を起こすべきという意見もあり、実際に次の武昌蜂起の成功は長江流域重視の宗教仁路線で現実となった。アメリカで革命成功の報を聞いた孫文は同年12月上海に戻り、1912年1月には南京で「中華民国建国宣言」がなされ孫文は臨時大總統に就任した。

しかし北京の袁世凱に列強の支持があり軍事力でも劣る孫文は条件付きで総統を袁世凱に譲る。その1つが清朝支配の終焉で、後に孫文が国父と呼ばれる所以である。1913年2月、3月の孫文の長崎寄港の

第7回、8回は晴れて中華民国の代表として国賓待遇での入出国となった。

しかし3月23日長崎出港の時には同志宗教仁が袁の刺客に殺された事を知らされる。すぐに第2革命となるが敗れて1913年8月孫文は又も日本に亡命、1914年東京で「中華革命党」を組織する。一方本国では袁の帝政への野望で第3革命も起こるが1916年袁は死亡、同年4月孫文は上海へ戻る。しかしその後、北の北京政府、孫文らの南の広東軍政府も内部の軍閥闘争に明け暮れ、一時の停戦、提携もならず、1922年孫文は陳炯明との政争で一命を失いかけると、上海で孫文への援助を約したソ連のヨッフエと「ヨッフエ-孫文宣言」をする。中華革命党は1919年には中国国民党と改組しており、これを更に中国共産党との「国共合作」に実現させた。1924年北の執政段祺瑞が時局收拾のため軍閥に依る善後会議の招集を広東軍政府の大元帥だった孫文に呼びかけ、同年11月直接北京を目指せなかった孫文は長崎（第9回）、神戸経由で北上することになった。孫文は共産党も提唱していた国民会議を呼びかける積りであったが、果たせなかった。1925年3月12日孫文は北京で肝臓癌のため59歳で死亡、最後の言葉は「革命はなお成功せず」だった。中国大陸との窓口であった長崎は孫文には目的地への通過のための短期滞在が多かったが、明治4年デンマークの大北電信会社が日本で初めて長崎―上海間に海底ケーブルを新設して国際電信による情報が得られる町であり、又明治20代には日本籍の外国航路の定期船も出入港してアクセスも良くなり、とりわけ孫文にとって長崎は横浜、神戸に並ぶ華僑の町で親近感があったと思われる。

（宮田一美）

参考資料

孫文と長崎

長崎が出会った近代中国

梅屋庄吉と孫文

長崎中国交流史協会編

横山宏章著

読売新聞西部本社編

人物中国の歴史10	尾崎秀樹著
孫文と中国革命	野沢豊著
孫文の革命運動と日本	俞辛京淳著
中国の歴史10	菊池秀明著
孫文と袁世凱	横山宏章著
近代国家への模索 1894～1925	川島真
国際通信の日本史	石原藤夫

● 梅屋トク

明治8年(1875)5月8日長崎県壱岐北部加須村(現在の壱岐市勝本町)の士族、香椎岩五郎の三女として生れる。香椎家は島の古い家柄で、平戸藩の鉄砲奉行も務めた武家だった。海に浮かぶ面積20km²の島で幕藩時代は平戸藩の支配した頃の浪人の島であった。トクはこの島の香椎村、香椎神社の神官の娘として生れる。トクは9人きょうだいの下から2番目で三女だった。長男、二男、三男、四男夭折したためトクの少女時代は兄二人、姉一人、弟一人きょうだいだった。



梅屋トク
小坂文乃氏所蔵

トクが梅屋家の養女、つまり戸籍上は庄吉の妹として迎えられるそもそものは庄吉自身の行状あった。庄吉は9歳の頃から度々家出し、梅屋家には殆ど居つかなかった。庄吉がビーエスペンドル号の遭難から奇跡的に生還した直後だった。梅屋家は絶えてしまうと案じ財産を継ぐものもないし、かといって男の子を養子にするのは庄吉でこりていた。それでは養女をと八方手を尽くしやっと捜し宛てたのがトクで

あった。当時は士族と平民的な扱いは厳しく差別されておりました。庄吉の父吉五郎が是非とも望んだがすんなり話はまとまりません。「平民でしかも、町人の家なんかに娘はやれん」とはねつけられた。トクの父岩五郎は亡くなるまで鬘を結び腰に刀をはさんでいた程の昔気質の人であった。だが士族という肩書はあってもこの頃の香椎家は零落しておりました。所有する数千坪に及ぶ土地をスルメや魚の干場に貸してその僅かな地代で大勢の子供達を育てたのですから大変ではあった。そのような事情と、また梅屋家の根気強い交渉にとうとう父母も折れた。

明治維新で武家の生活は様変わりし、子供が商家に嫁いだり、養子になる例も少なくなかった。三女トクと五男福蔵は商家の養子となる。梅屋家の養女になって以来トクは、庄吉の年老いた両親に代わり、梅屋商店を切り盛りした。庄吉と言えは16歳の頃から家出し、梅屋商店の仕事は手伝わず何度も家出するし事業は失敗するし、両親には借金は負わせるわで、家にはほとんどいなかった。そんなことで二人は顔を合わせることはなかった。

庄吉は香港から久しぶり長崎へ戻ってきた。長らく家を空けていた庄吉はトクから「あんた誰ですか」「ここは、私の家です、私はここん家の娘ですバイ」、「あんたどこの人」「オレはここん家の息子バイ。庄吉ゾー」トクは驚き、まじまじと庄吉を見つめた。

二人の背丈は1 m65cmほどでほぼ同じであった。庄吉は「なんと大きな女だろう」と思えば、トクは細面で整った顔立ちの庄吉を「まるでお人形さんみたい」と感じた。これが二人の初めての出会いの第一印象だった。父・吉五郎は持病が悪化し病床にあった。庄吉家に帰って来たのは虫の知らせか、吉五郎は早速庄吉とトクを枕元に呼び、「梅屋の家をお前たち二人で継いでくれ。二人が一緒なるのを見届けてあの世へ行きたい」といった。庄吉はいままでを負い目があるし思ある父へのせめてもの親孝行と、トクとの結婚を承諾する。早速枕元

に親族が呼ばれ祝詞が唱えられる。吉五郎は二人が夫婦になるのを見届けてから息引き取る。

庄吉27歳、トク20歳。明治27年（1894）の事だった。

結婚した後もトクに店を任せ又大陸へと出てしまう。庄吉は香港を拠点に南洋開発のことをしていたが、資金不足もあり頓挫した。トクは庄吉の母が他界するまで梅屋商店を懸命に守り続ける。外国人には身振り手振りで対応していたが、頭の良いトクは、英語フランス語、マレー語など簡単な日常の用を足せるようになる。トクは庄吉の母ノブをみとり明治36年（1894）、結婚後9年目にて初めて香港へ行き、庄吉との新婚生活を始めることとなる。後には庄吉の革命支援を支え、庄吉を頼ってきた日中両国の革命志士らの面倒をよく見た。お金を渡すだけでなく庄吉が見ずしらずの連れて来た捨て子も面倒見育てた。庄吉の友人のイギリス人からは香港の恋人の間に生まれた女の子を育ててくれと頼んできた。その子はまだ幼くトク自身育てた経験がなかったので、ベビーシッターの手を借りながら無我夢中で育てあげた。後に孫文の一等秘書戴季陶（たいきとう）も、日本女性と生れた子供を庄吉に世話してほしいと頼んだ。成長したその子供は蒋介石の養子となりと名乗った。後年、中華民国革命軍の将軍となる。戴季陶から庄吉宛ての書簡には、此の経緯と庄吉、トクへの感謝が綴じられていた。

梅屋トクは女傑いう外はない、男勝りの堂々とした女丈夫であった。曲がった事、悪いことに厳しい態度をとる、躰の厳しいトクであった。トイレ掃除などいい加減だと、外出から戻ったままの服装であっても、さっと襷をかけ、「こういう具合にするものです」と、模範を示していた。躰は厳しくとも、門下生は随分かわいがった。お小遣いから肌着身の周りの事、家庭、親類の心配至る迄細かく気を配っていた。庄吉を慕って家に入出入りする若者達らの面倒をよく見た。東京でも孤児、薄幸な子供を9人も育て、社会に送り出す。大久保百人町（現・百人

町)の隣に罪を犯した更生施設があったが、こから逃げて来る女性達をかくまったり、お手伝いとして住み込ませ、トクが教育係として更生もさせた。決して見返りを求めなかった庄吉とトクであった。犯罪者の肌着をトクは自らよく洗濯していた。たくさんの手伝いがいるのにとトクの娘千世子は不審に思った。

「人の愛を知らない心の曲がった人には、神のような心で接しないと真人間にはなりません。自ら肌着の汚れまで洗ってあげて愛を示してあげることが、人をよみがえらせることになるのですよ」トクは娘の千世子に話したそうです。

柳原白蓮、宮崎龍介(天の息子)の結婚に関してもトクの存在抜きには考えられないことだ。育った環境せいか白蓮は着物を整えることから入浴に至るまで全くできなかった。そんな白蓮に生活していくうえでのことを一から教えていたのがトクだった。勿論、針仕事から料理、着付けまで白蓮の別荘の生活は一ヵ月続いた。その後も大久保百人町梅屋邸にも遊びに来ていた。

孫文と宋慶齡結婚に関しても梅屋トクは尽力をつくした。孫文49歳宋慶齡22歳親子ほども違う二人「結婚できるなら明日死んでも悔いはない」と孫文、慶齡とは相思相愛とのこと、早速大久保の梅屋邸にて頭山満、犬養毅ら出席のもとに盛大な結婚式が行われた。

庄吉は香椎家を大切に、トクの兄弟達や甥を庄吉の写真館や映画館の経営に携わたり、梅屋家の書生になったりした。庄吉が設立した映画製作・配給会社「カシー商会」の社名は香椎姓を借りたものである。

(藤丸清子・長門ヤス子)

参考文献

- | | | |
|-----------------|------|------|
| ・革命をプロデュースした日本人 | 小坂文乃 | 講談社 |
| ・国父孫文と梅屋庄吉 | 車田譲治 | 六興出版 |



宮崎滔天(みやざきとうてん)—孫文を助け、革命に挺身した男—

宮崎滔天という人物

- ①明治3年(1870) 熊本の郷土宮崎長蔵・佐喜夫妻の八男として熊本県荒尾村に生まれる(本名:寅蔵)。宮崎家は50町歩(約50ヘクタール)を有する中地主であった。
- ②明治10年(1877) 熊本民権党の中心人物であった、長兄八郎が西南戦争で西郷軍に呼応し、26歳で戦死する。熊本民権党の中心人物として中央にも知られた英雄八郎の戦死は、家族への影響が極めて大きく「一生官に仕えてはならない」との考えを家族は抱く。



二男：八郎、
六男：民蔵、
七男：彌蔵、
八男：寅蔵(滔天)が
生まれ育った屋敷跡。
(長男、三男、四男、
五男は早世した)

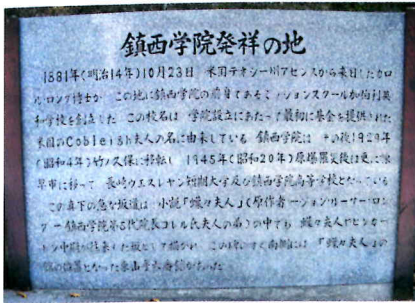
- ③明治17年(1884) 県立熊本中学校に入学する。明治18年(1885) 徳富蘇峰経営の大江義塾(熊本)に入学する。
明治19年(1886) 秋、東京専門学校(早稲田大学前身) 英語学科に入学。明治20年(1887) 春頃にキリスト教の洗礼を受ける。
秋、学資困窮のために荒尾に帰る。
明治21年(1888) 秋に長崎の東山手にあったカブリー英和学校(現・鎮西学院)に入学する。
- ④明治25年(1892) 長崎より上海に渡るが、旅費を騙し取られ、二ヶ月程で帰国する。前田槌と結婚し、長男龍介が誕生する。

- ⑤明治30年（1897）横浜で孫文（31歳）と初会見する。孫文を荒尾の生家に伴い二週間ほど滞在する。その後、孫文と共に長崎へ行き、渡辺元らを訪ねる。
- ⑥明治35年（1902）革命軍の武器調達で齟齬が起こり、革命仲間と不仲になり、浪曲師・桃中軒雲右衛門に入門して、桃中軒牛右衛門を名乗り浪花節を修業する。
- 明治36年（1903）雲右衛門一座九州初興行の案内役をつとめる。
- 以降、明治43年（1910）頃まで断続的に日本各地を巡業する。
- ⑦明治43年（1910）10年ぶりで中国に渡り香港で孫文・黄興と会見する。旅行中に初めて吐血し、帰国する。
- 同年に孫文が来日し、滔天宅に滞在するが政府の退去命令により、離日する。
- ⑧明治44年（1911）辛亥革命が起きる。滔天も上海入り、揚子江遡航を経て、孫文の香港着を迎える。
- 南京の各省代表者会議で孫文が臨時大総統に選出される。
- ⑨大正2年（1913）日本の鉄道視察に来日した孫文一行に随行し、熊本などを經由して長崎入りし、大歓迎を受ける（3日間）。
- ⑩大正10年（1921）孫文の招きを受け、最後となる中国へ渡航した。
- 翌大正11年（1922）、腎臓病に心臓・肝臓病併発、さらに尿毒症を併発して、12月6日に死去した。享年51歳。

長崎との関係

宮崎滔天は、生涯長崎に7回以上来ていると思われるが、主なものは次の通りである。

- ①明治21年（1888）9月頃、東山手6番地にあったカブリー英和学校（現・鎮西学院）に入学し、半年以上学んだ。
- 止宿地は東山手4番地にあった学校の奇宿舍であった。
- 当時18歳の若さであり、当時の長崎の地を多く巡り歩いたと思われる。



- ②明治30年(1897) 孫文と横浜で初会見の後、11月頃孫文・陳少白等と共に荒尾滞在後に長崎を訪れる。この時、渡辺元の案内で「某寺」で「白浪庵滔天」の号を贈られ、以降宮崎滔天と名乗るようになる。
- ③明治36年(1903) 8月頃及び明治40年(1907) 11月19日～26日に浪曲師桃中軒牛右衛門として長崎で巡業している。公演の場所は光源寺下の八幡座(現・八幡町教会)であった。
- ④大正2年(1913) 孫文が国賓待遇で来日し上京した帰路、荒尾經由で長崎入りした時に3日間とも同行した。

孫文との関係

宮崎滔天と孫文は、上記の「長崎との関係」以外でも10回以上会って支援している。

孫文の支援ネットワークの中心的人物として孫文と接した。



筆談する孫文と宮崎滔天。
中央の女性は、家主の宮崎民蔵夫人の宮崎ミイさん。

主なものは次の通りである。

- ①明治33年（1900）惠州拳兵のため、孫文・内田良平らと横浜から長崎経由で香港に向う。
- ②明治38年（1905）孫文・黄興・張継の初会合に同席するなど中国同盟会の創立に尽力した。
- ③明治43年（1910）孫文がアロハと変名して来日した時、自宅に滞在させるが、政府の退去命令により離日する。
- ④明治45年（1912）孫文の南京での臨時大統領就任式に上海より随行して式典に参列した。

まとめ

宮崎滔天は、21歳のときに兄の彌藏の説く中国革命主義に共鳴、以後生涯の大方針となる。朝鮮改革主義者の金玉均亡命中にはその協力者となる。中国革命への布石として中国や東南アジアに渡ること数度に亘る。

明治30年（1897）孫文と初会見し、以後日本における孫文の主要な協力者となり中国革命を援助する。難航する革命における自己の無力感を抱え、一時浪花節語りを生業とし、桃中軒牛右衛門を名乗るが明治44年（1911）の辛亥革命成就後も、孫文・黄興ら革命家との協力関係は続いた。

大正11年（1922）滔天の死に際しては上海で孫文ら主催の追悼会が開催され、「日本の大改革家」「中国革命に絶大の功績」との賛辞を受ける。
(吉野誠次)

参考文献

- | | |
|---------------|------------|
| 『三十三年の夢』 | 宮崎滔天著 岩波文庫 |
| 『龍のごとく－宮崎滔天伝』 | 上村希美雄著 葦書房 |
| 荒尾市宮崎兄弟資料館 | 展示資料 |

◎ 渡邊元

渡邊元 安政2年7月1日生 号 南岬、海村



深堀藩士・渡邊聞櫓（佐賀藩深堀領主鍋島孫六郎の家臣）の長男。父 聞櫓は深堀領の財政を預かり、高島、伊王島、香焼島の炭坑経営の責任者だったが、佐賀の乱の時、江藤新平を別荘に泊めことから謹慎処分となり、除族処分。長男元が家督を継いだ。深堀領が開発した高島炭坑だったが、将来性に目をつけた佐賀藩が取り上げ、グラバーと共同経営したが、外国資本の進出を恐れた明治政府は廃藩置県の折、グラバ

ーに40万ドルを払い佐賀藩に対しては藩有財産として官収した。佐賀の乱後、政府は後藤象二郎に払下げ、その後三菱に売却された。深堀領は佐賀藩出身の佐野常民（大蔵卿）の援助を受け、政府資金を借り香焼炭坑を売却し、中ノ島炭坑、端島炭坑の開発に全財産をつぎ込む事になるが、結局失敗。高島炭坑に続いて両坑とも三菱に帰した。

明治12年（1879）長崎県議会が開かれた。当時は佐賀県が、長崎県に併合されていて、議員も旧佐賀藩士が多かった。渡邊元は深堀領の未来が掛っている炭坑戦争における中ノ島決戦の最中、明治14年（1881）1月の補欠選挙で西彼杵郡から、当選する。県会の議員活動と同時に政党運動に参加し、西道仙らと長崎改進黨を結成した。議会では「長崎県議会史」の議事録や、「鎮西日報」の県会傍聴記事で発言の様子が分かる。機関紙として「西海日報」を発行しているが、現物が残っていない。もし残っていれば、もっとその言論活動が明らかになっただろう。佐賀藩海軍の縁故者が組織した結社「知新会」に大隈重信、

鍋島孫六郎、副島種臣らと共に明治17年（1884）入会している。特に副島とは親しく、明治22年（1889）長男 道の誕生のとき、命名してもらっている。議会活動の頃、端島、中ノ島炭坑の経営に従事していたが中ノ島炭坑の倒産、端島炭坑も経営が苦しくなった。坑主渡邊元と所有者鍋島孫六郎の関係も悪くなり、代理人解除された。結局高島炭坑同様三菱へ売却された。事業に失敗し、3年程勤めた議員職も、長崎県と佐賀県の分離に伴い辞職。と挫折を味わう。深堀士族の授産施設である深堀商会で深堀の遺産を守り、発展させることを希望していたが、炭坑のノウハウしか持たない。そして、たどり着いたのが西彼杵半島の西に浮かぶ松島炭坑。ここで炭坑経営者として成功し、明治14年（1881）甲申政変で日本へ亡命していた金玉均。孫文、宮崎滔天等の革命運動を陰から援助できた。明治15年（1882）鹿鳴館夜会服を作る我国最初のドレスメーカー青木たけの銀座の店「伊勢幸」の2階に寄寓。そこで、青木たけへ金玉均を紹介し、青木たけも金玉均を支援する。明治27年（1894）3月金玉均が長崎から上海へ渡った直後、暗殺される。日本でも葬儀が浅草本願寺で盛大に行われ、青山外国人墓地に葬られた。渡邊元と金玉均の12年間の友情が幕を閉じた。この頃は松島炭坑の経営も軌道に乗り、ようやく炭坑主としての地位も確立し始めており、金玉均が暗殺を免れていれば、もっと金銭的な援助ができただろう。その葬儀のとき、宮崎滔天と出会い、今度は中国からの亡命者孫文と知り合うことになる。滔天には2人の兄がおり、3人共大陸変革に夢を抱いていた。早速、渡邊を「伊勢幸」に訪ね、滔天はタイへ、兄の彌蔵は言語習得のため横浜商館への紹介や、そこで、病をえて、療養に深堀の別荘に逗留ほか滔天の妻へ石炭商の斡旋など、家族の世話もしている。滔天は渡邊を名著『三十三年の夢』で、「瓊浦市上に隠る、無名の英雄渡邊元翁なり」と紹介している。明治30年（1897）滔天は故郷熊本県荒尾へ孫文を案内する。それは九州の炭坑主たちと知り合い、支援者を確保したいと云う願いもあっただろう。

その時長崎へ向かい、渡邊元に孫文を紹介している。滔天の『亡友録・渡邊元君』に「彼は孫文、陳白を歓待し、彼の案内で付近の名刹や高僧の誉れのある禅師を訪れ、維摩經の教誨を受けた。その中の「白波滔天」の文句が酷く渡邊君の気に入り、以って私に贈られたので、滔天の号を用いるに至ったのだ」とある。当時は、渡邊の自宅は明治31年（1898）4月27日の消印のある滔天宛の手紙に長崎市下筑後町になっているから、付近の禅寺福濟寺か。または、当時名僧と云われていた金峰玉仙禅師は滔天と関係が深い鈴木天眠とも親しかったので、皓台寺（曹洞宗）かも知れない。しかし、滔天の兄彌蔵は深堀の渡邊別荘で療養したとあるので、深堀の曹洞宗の菩提寺で教誨を受けたのかも知れない。松島炭坑の事業は順調に拡大していたが、やがて資金繰りに苦しくなった。加えて坑夫暴動、坑道陥没事故、隣りの坑区との裁判などで一部を明治36年（1903）廃業。残り内浦炭坑も明治38年（1905）頃には廃業。経営失敗し、長崎の家も売り払って一時は本蓮寺の一角を借り、困窮生活を強られていた。滔天は渡邊を訪れたときの模様を次の様に語っている。「孫文は辛亥革命後、初代臨時大総統になったが、袁世凱に譲歩して、そのポストを譲った。袁世凱との妥協を遺憾なりとし、是とて畢意は兵糧不足に原因するとなし、それを自らの責任と感じて、幾度とない嘆声を漏らし、その後も屢々、その責任感を吐露して、我等を励まし、自らを励まして、雌伏するに至ったのである。」渡邊元は明治38年（1905）松島炭坑経営に失敗。その後の足取りはよくわからない。困窮生活で伊勢幸の援助を受けていたであろうが再度挑戦しようと長崎を離れ、東京の高見よね子所有の七谷鉦山の所長として新潟に移った。孫文が前の臨時大総統として、長崎を訪ずれた大正2年（1913）には長崎にいないので、それ以前と思われる。宮寄上地区の民家に犬養毅が渡邊元に宛てた揮毫依頼の返事の手紙が残っている。渡邊は土地の人でなく、地元の人に信用してもらった為にこの手紙を使ったと思われる。又、大変な子煩悩で集落の子供

達を可愛がり、幼少年向きの雑誌や本を買い込み子供達に贈っていたという。後年、視力減退し、毎日の新聞を近所の人に読んでもらっていた。単身で来たとも、夫婦で住んでいたとの説もある。滔天によれば、渡邊元の最後は「天下の事をするに鉱山業の他なし」として、鉱山専門でやり通されたのであるが、遂に成功を見ず、晩年越後の山中に一鉱山を発見して其処に雌伏自ら工夫を督して採炭に任じ、其事漸緒に就くに至って、



昨年の春、此の山中に没したのである。」越後の山中とは、新潟県中蒲原郡七谷村小乙（現加茂市）で無名の英雄は志を果せぬまま、大正7年（1918）4月17日波乱の人生の幕を閉じた。無念の死であった。渡邊の意志を継いで、大正7年（1918）に愛妾青木たけが、七谷鉱山の鉱業試掘権設定をしたとある。最後まで青木たけは渡邊元を支えていたのだ。

福濟寺にある墓石には、

「十代春風菴海村居士」大正7年4月7日 渡邊元 64才

「秋月庵清寿大姉」 大正7年12月27日 渡邊寿子

横には

「豊睡園渡邊開櫓居士」「翠竹軒秀峰操幹大姉」の墓石もある。

（西本浜路）

参考文献

『「草莽のヒーロー無名の英雄・渡邊元」と東アジアの革命家』

横山宏章著

『宮崎兄弟と新潟県』

田宮覚著

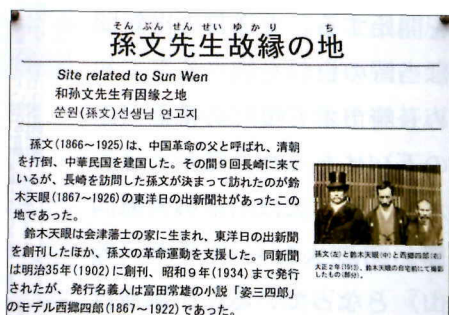
◎ 鈴木天眼 (すずきてんがん)

長崎市の繁華街・浜町アーケード南口から約20メートル行った所にあるレストラン「ツル茶ん」の前に「孫文先生故縁の地」の石碑がある。説明板には孫文と鈴木天眼、西郷四郎が並ぶ写真。孫文が天眼の支援にお礼のため訪れたときの写真の一部だ。孫文自身がわざわざ姿を見せて感謝の言葉を伝えるほど天眼は新聞紙面を通して孫文の革命運動を支えた。

鈴木は慶応3年（1867）7月8日に福島の本松に生まれた。本名は力（ちから）。父親は五百石取りの納戸頭だった会津藩士。幼いころから頭脳明晰（せき）で、藩校「日新館」を最優秀で卒業した秀才だったという。父の死後、14歳で上京し、同郷先輩の赤羽四郎や日下義雄宅に寄宿しながら大学予備門に入学した。だが、中途退学している。

明治20年（1887）第一著作の「独尊子」を発刊して尾崎行雄や犬養毅らに注目され、自由党機関誌「公論新報」で文筆をふるう。筆禍後、胸を侵され、当時、長崎県知事（県令）をしていた日下を頼って長崎を訪れる。静養のかたわら長崎について書いた「新々長崎土産」を発刊。やはり書かずにはおれない性格のようで、明治22年（1889）帰京すると、雑誌「活世界」を発行するなど再び言論界で健筆を発揮した。

明治27年（1894）朝鮮半島で甲午農民戦争が起こると、民間軍事組織「天佑侠」を組織して朝鮮に乗り込み、日本が介入できるよう混乱状態を作り出す。こののち日清戦争が起こる。



孫文と鈴木天眼、西郷四郎が並ぶ説明板の写真

明治31年（1898）12月14日、長崎で「九州日之出新聞」を創刊する。だがまもなく退社。明治35年（1902）1月1日、「東洋日之出新聞」を創刊し、社長兼主筆として新たな活動を開始する。東洋日之出新聞は当時の資料を調べると、初め長崎市本五嶋町49番地（岸の下）にあった。発行人は鈴木力、編集人は同郷の西郷四郎、印刷人は丹羽末廣（翰山）となっている。印刷所は本五嶋町29番地の境活版工場。

当初はタブロイド判4ページ建て。購読料は1部1銭、月20銭。その後は現在の新聞と同じサイズになる。

国際ニュースから国政、県政、市政、社会記事まで不偏不党を掲げ、不義不正を鋭く追及し続けたことで人気があった。日露戦争終結を巡っては、多くの新聞社が賠償金を取れないことなどからポーツマス講和条約反対を主張し国民をあおったが、天眼は条約賛成の論陣を張った。

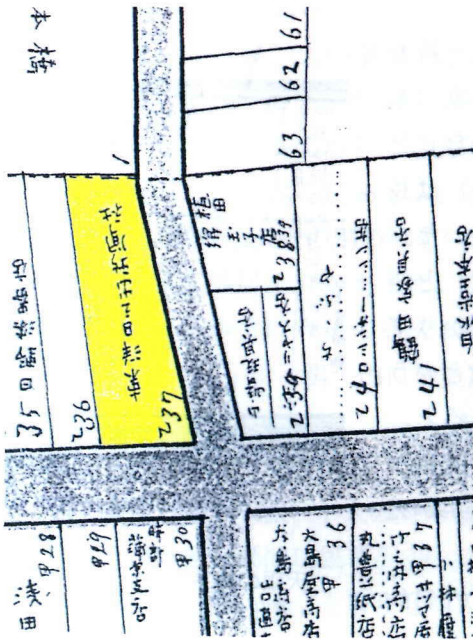
また孫文の支援者である佐世保出身の金子克己らと親交を深め、孫文の盟友・宮崎滔天を通して孫文紹介記事を数多く掲載した。明治44年（1911）10月、辛亥革命が起こると西郷四郎が現地に赴き、連載「武漢観戦通信」を約1か月半にわたって紙面に掲載するなど言論を通して孫文を支援した。



大正4年11月2日付けの東洋日之出新聞（県立長崎図書館所蔵）



東洋日の出新聞社があった油屋町通り



黄色い所が東洋日の出新聞社
(大正8年発行の長崎市番入分割図)

社屋は転々とする。大正8年（1919）発行の長崎市地番入分割図（県立長崎図書館所蔵）では、すでに長崎市鍛冶屋町乙37番地にあった。現在の油屋町にある「ツル茶ん」のところで。店主は「東洋日の出新聞の建物を初代が譲り受け喫茶店として創業した」という。同地番入分割図によると、当時の東洋日の出新聞は現在の「山陶」商店から「ツル茶ん」までの一角を占め相当広い土地だったことがうかがえる。大正2年（1913）、孫文は国賓として来日した。

支援のお礼で訪れた孫文をこの場所で迎え、格子戸を背景にして孫文を中央に天眼のタミ夫人（旧姓大河内）や西郷四郎、宮崎滔天、新聞社幹部らが勢ぞろいして写真に納まっている。これが説明板に載っている写真の基になっている写真だ。撮影場所は「自宅」とある。この社屋を自宅としても使っていたのではないかとの説もある。



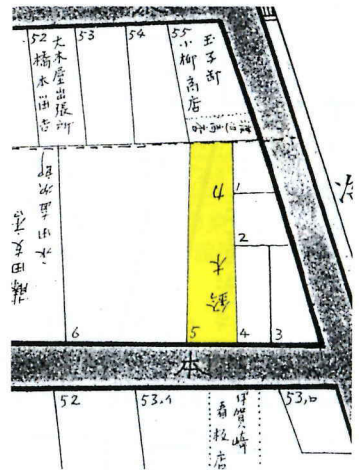
天眼の自宅があった辺り（現在の古川町）

同新聞社に呼んだ。聞一の次女・鈴木淑子さん（85）は「タミ夫人の家（本古川町）にはお使いで行っていた」と記憶をたどる。また「父（聞一）は長崎に来たくはなかったと言っていた。中央で仕事をしたかったようだ」と語る。だが、聞一は記者としてばかりでなく経営面でも兄を支えていたという。経営のため聞一が金を借りてくると、「人の金に頼るとは何事か」と天眼が怒ったという。天眼の人柄がうかがえる。

天眼が長崎にやってきた大きな目的は中央政界に乗り出すことだったようだ。そして明治41年（1908）長崎から衆議院議員に当選、念願の代議士となった。議場では痛烈なやじを飛ばすことで知られた。

天眼は大正15年（1926）12月10日死去した。子供がおらず、淑子さんが両親とともに供養している。淑子さんの自宅の位牌にある戒名は

また同地番入分割図によると、本古川町5番地に「鈴木力」とある。現在の古川町6番26号。今は駐車場になっているあたり。ここに天眼が住んでいた。その後、西郷四郎が住み、そして天眼が亡くなった後にもタミ夫人が住んでいたようだ。天眼は実弟の聞一も



天眼の自宅があった辺り（現在の古川町）



五島富江町の實相寺

「西光院殿力誉徹心天眼居士」。享年60。故郷の福島・二本松の台運寺に葬られている。

タミ夫人の出身地五島・富江町の實相寺にもタミ夫人が昭和9年に建立したと思われる墓碑がある。手入れが

行き届いた大河内家の広い墓所の中。苔むした墓石には「鈴木天眼碑」と刻まれ、真新しい花が供えられて手厚い供養がうかがえる。近くにある大河内家本家の過去帳には天眼の別の戒名「六通院誠譽徹照天眼居士」があった。二つの戒名がある事情は今後の研究課題である。（平山次男・山口篤史）



鈴木天眼碑

参考資料

- ・「辛亥革命と鈴木天眼—1人の対外強硬論者—」 栃木利夫著
- ・「鈴木天眼略歴」 潤間瑞雄著
- ・「長崎文化第69号 孫文を取り巻く人たち—鈴木天眼と西郷四郎—」 宮川雅一著
- ・ながさき会議所NEWS 長崎歴史散歩「鈴木天眼・西郷四郎の長崎の住所」 宮川雅一著
- ・長崎新聞120年の歩み「日清・日露戦争と新聞」

◎ 西郷四郎

会津に生まれ、士官学校を断念、講道館に入門する。

山嵐の荒技、師嘉納治五郎をして「其ノ得意ノ技ニ於テハ幾万ノ門下未ダ其ノ右ニ出ルモノナシ」と絶賛せしめた

西郷四郎は、幕末慶応2年（1866）2月4日、会津若松（現：福島県会津若松市）に会津藩士保田貞二郎の三男として生まれる。

戊辰会津戦争の戦火と混乱、家族は各地を移動し、新潟県下の旧津川町（現：東蒲原郡阿賀町）に定住した。小学校卒業後、一時母校のおりしも我国は、戊辰・西南の二大内戦を経て、政治、経済あらゆる分野において、国内整備と近代化を強力に推進、とりわけ国民皆兵による軍備の拡充は、明治政府の緊急の課題であり、若者は陸・海の軍人になることを将来の目標にかかげる時代風潮であった。四郎もいつの頃か「イクゲン大将になる」と周囲の人々に将来の夢を語るようになった。「イクゲン大将」とは、津川弁の訛で、陸軍大将のことである。陸軍士官学校に入学を目標に親友と一緒に上京するが、士官学校は学力と身体的条件をもクリアしなければ入学することが出来ない。身長150cm、体重53kgの四郎は士官学校をあきらめ、嘉納治五郎（1860～1938）が創設する講道館に入門し、めきめきと上達・昇段し、明治18年（1885）警視庁武術大会で小柄な体で、大男の照島太郎を「山嵐」で投げ飛ばし一躍有名になる。

富田常雄作「姿三四郎」のモデルとされているが、昭和28年津川の麒麟山に「西郷四郎の碑」が建った時、作者常雄は「姿三四郎は西郷四郎でない、二人は山嵐でつながっている」とモデル問題に答えてい



る。明治17年（1884）、旧会津藩家老で、大東流合気柔術の後継者保科近恵（西郷頼母：1830～1903）の養子となり、ついで明治21年（1888）西郷家を再興して、西郷四郎と名乗る。

大陸飛翔を夢見て講道館を出奔し、長崎に来る。

西郷四郎の生涯には、重要ないくつかの謎があるが、その中でもこの講道館出奔は最大の謎である。

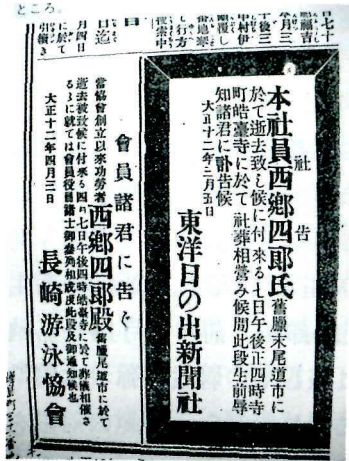
明治23年（1890）6月21日講道館四天王の1人で、嘉納門下生1,500人の実力第1人者と認められていた四郎が、前年9月13日嘉納師範（当時、学習院教頭・教授）の外遊に際して、岩波静弥・本田増次郎と共に後事を托された責任ある立場にありながら、師範の帰国を待たず、上2番町の留守宅に不義を詫びる一書と「支那渡航意見書」なる長文を遺し、丸8年間在籍した講道館を出奔した。

四郎は、その足で支那渡航に便利な長崎に赴いたといわれるが、それからの消息は分っていない。翌24年1月16日帰国した嘉納治五郎は、講道館、嘉納塾の規律の弛緩を取調べ、西郷四郎を「追放」処分した。これが各種柔道史書が伝える西郷四郎の講道館出奔のあらましであるが、史実に基づく出奔の動機は推測の域を出ない。

戸籍を長崎に移す。

明治24年（1891）12月17日付けで、戸籍を「青森県上北郡四和村大字伝法寺16番戸2号」から「長崎市東上町27番戸」（現：玉園町1番1号あたり）に移すが、長崎にはほとんど居らず各地を転々とする。翌25年12月郷里津川に帰省、武道場「講武館」を設立する。同27年、仙台第二高等学校（現在の東北大学）の柔道師範となる。同28年には、久留米の南築私学校の柔道師範として就任した。同29年9月頃に台湾に渡ったらしい。その後、同32年まで何をしていたのか、いつ帰国したのか不明である。

長崎の中の会津、北原雅長の甥を養子にする。



幕末・明治期、この長崎に“長崎の中の会津”とでもいふべき会津出身者たちの小さいが強力なグループが見受けられる。

明治19年（1886）初代長崎県知事に就任した日下義雄と同22年初代長崎市長になった北原雅長、二人の在任時期は6ヶ月ほど重なっており、一時期同じ会津人が知事と市長を勤めている。

会津御用商の足立仁十郎、医学遊学生の小松清治、北原の実兄神保修理も

慶応2年（1866）藩軍事奉行添役として来崎し、坂本龍馬、伊藤博文、大隈重信らと交流している。

鈴木天眼は、会津ではないが福島県人であり、日下を頼って長崎入りしている。北原の実弟神保巖之助も官吏として長崎に在り、その妻幾エは戸町出身であった。

四郎は明治33年（1900）秋頃より定住し、巖之助の四男孝之を養子とし、両家の交流は深かった。

さらに歴史の因縁をたどれば、四郎が養子となり再興した会津西郷家の系譜によれば「肥前国高来郡西郷」と記されており、この地は島原半島の北に位置し長崎の町から至近の距離にある。

「東洋日の出新聞」創刊され編集責任者となる。

「九州日の出新聞」を退社した鈴木天眼によって明治35年（1902）1月1日「東洋日の出新聞」が創刊されると、編集責任者として参加する。創刊号には「編輯人：西郷四郎」として、「発行人：鈴木力」「印刷人：丹羽末広」とともに名を連ねている。

東洋日の出新聞は他紙と異なり、官界の不正不義を一貫して鋭く追求したため、発禁処分、検閲による記事の削除など多くの試練・トラブルが発生している。その際、病弱の鈴木に代わって西郷が警察などへ出頭する役目を引き受けていたのである。

瓊浦游泳協会の設立、運営に尽力する。

柔道の西郷四郎は有名だが、その他弓道、槍術、棒術、合気術など武芸百般に通じていることは案外知られていない。

少年の頃、故郷津川で水に親しみ、水泳も得意であったことから、東洋日の出新聞の創刊記念行事として、青少年の心身の鍛錬を企図した、瓊浦（たまのうら）游泳協会の設立を発案、それに共鳴した鈴木天眼によって、新聞の宣伝を兼ねて全社を挙げて同事業に取り組むことになった。明治36年（1903）7月正式に協会が発足すると、西郷はその運営、指導に積極的に参画する。皇后島（ねずみ島）を会場に実施された夏季の3ヶ月間水泳訓練も想定した以上の参加者であり、ねずみ島、高銚島やねずみ島～深堀間の遠泳競争、さらには第一回九州競泳大会や西郷監督、田中直治師範の下に実施された有明海横断遠泳大会の成功など、協会の存在・評価は高まり、伝統ある市民スポーツとして今なお存続し活動している。

瓊浦游泳協会は、大正2年（1913）に長崎游泳協会と改称する。

「眉山夢物語」を創作し、武道所感を新聞に掲載する。

明治36年（1903）11月、日露が風雲急のなかを朝鮮に渡り、「鴨緑江岸の消息」を送信、帰国した同年暮に島原半島一周旅行を試み、その旅行見聞と武道の極意を綴った創作文「眉山夢物語」を翌年正月の新聞に掲載している。

辛亥革命を現地武漢で取材し記事を送る。

明治44年（1911）10月10日辛亥革命が勃発すると、西郷は45歳で神経痛の身を押し、19日長崎から上海に渡り、漢口を拠点にして、革命の現地取材・報道を送り続け、10月30日から12月19日までの50日間に16回にわたって、東洋日の出新聞の紙面を飾った。その全文は、およそ1万字にも及んだ。目と足でまとめた生々しい内容は、辛亥革命の記録として、極めて貴重なものである。この現地取材の途中から「西郷北洲」の署名を使い始める。当時、鈴木天眼は衆議院議員として東京滞在中であったため、同紙の発行人兼印刷人も西郷であった。

孫文を長崎に迎える。

大正2年（1913）3月22日午後、孫文一行と東洋日の出新聞同人たちと歴史的な記念写真を撮影した。場所は鈴木天眼の自宅を兼ねた市内本古川町の東洋日の出新聞社前である。孫文、鈴木夫妻を中心に、西郷は載天仇と天眼にはさまれ、写真に納まっている。この他、丹羽末広・福島熊次郎等東洋日の出新聞関係者総勢13名が写っている。

長崎の女性と結婚する。



長崎時代の四郎とその家族

右からチカ、四郎、幸子、キン、孝之、
1人おいて浜口嘉子、浜口ミネ

明治44年（1911）3月、四郎は中川チカと結婚。四郎46歳、明治4年（1871）4月生まれのチカは41歳、万屋町（当時は本古川町）にあった料亭「萬年喜」の経営者中川キンの一人娘であった。後に西郷が埋葬されるのも浄土真宗大谷山大光寺にある中川家の墓地である。

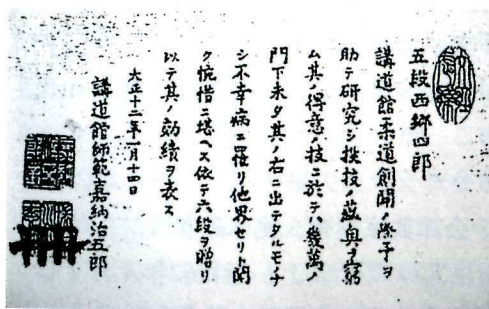
両者が知り合った時期といき

さつははっきりしないが、身内に伝わる話によると、四郎がチカを見そめて世帯を持ったとのことである。

このようにして、長崎を第二の故郷にした西郷の住所は「東上町27番戸」から始まり、大正3年(1914)3月「今籠町3番地」(現：鍛冶屋町5番82号・発心寺境内)、同年7月「本古川町5番地」(現：古川町6番26号)と移り、時期不明ながら「銀屋町19番地」(現：銀屋町3番19号)にも一時居住していたらしい。

尾道で病没し、長崎に葬られる。

大正8年(1919)6月に実母志田さだが病没。葬儀のため津川に行き、長崎に帰った後は床につくことが多くなり、神経痛に胃病も併発して療養のため、かねてより世話になっていた、義弟浜口嘉四郎のいた、温暖で風光明媚な尾道に転地する。そして約3年後の大正11年(1922)12月23日午前8時8分にその地で死亡する。56年10ヶ月の生涯であった。悲報は長崎に飛び、翌24日の東洋日の出新聞の一面トップに天眼の追悼記事が掲載された。



四郎の訃報に接した師の嘉納治五郎は、翌年1月14日の講道館の鏡開式席上において、追悼文と六段を追贈した。四郎の葬儀は翌年4月7日、長崎市寺町の曹洞宗海雲山皓臺禪寺において、東洋日の出新聞の社葬

として盛大に執り行われ、新聞社同人、游泳協会、柔道、弓道、武徳会等各界関係者が多数参列し、古武士西郷四郎の死を悼み別れを惜しんだ。戒名は星光院北洲達観居士。遺骨は近くの大光寺にある、妻チカの実家中川家墓地に埋葬されたが、地元柔道関係者がこの事実を知

ったのは戦後の事であった。

西郷四郎が眠る大光寺の墓地は、四郎の妻チカ（中川チカ）の妹浜口ミネ（養女：中川ミネ）の三女嘉奈子が嫁いだ山田家の子孫の方が大切に守って頂いていることを付記しておきたい。

姿三四郎に姿を変え復活する。

昭和9年（1934）東洋日の出新聞が廃刊となるが、この年講道館創立50周年記念祭において、西郷は創立功労者の1人として表彰される。

昭和17年（1942）9月には、富田常雄作の小説「姿三四郎」が発表され、その6ヶ月後には黒澤明監督の東宝映画「姿三四郎」（主役は藤田進）が封切り上映された。戦後になっても、たびたび映画やテレビに登場し、柔道の普及に大いに役立った。

昭和26年10月尾道に「西郷四郎逝去之地」碑が建立された。同28年には故郷津川の麒麟山に「西郷四郎之碑」が建った。長崎では、昭和44年10月10日に長崎県柔道協会が大光寺の墓地に墓碑を建て、市内立山一丁目長崎公園の武徳殿跡（現：長崎市立体育館）に顕彰碑を建立した。顕彰碑には、西郷四郎死亡直後に師の嘉納治五郎が贈った追悼文がそのまま彫り込れている。

（小嶺昭典・原口和代）

参考資料

- | | | | |
|------------|-------------|-------------|-------------|
| 『山嵐、西郷四郎』 | 発行 | 会津武家屋敷・高木厚保 | |
| | | | 昭和62年4月1日 |
| 『評伝 西郷四郎Ⅱ』 | 講道館出奔の謎をさぐる | | |
| | 著者 | 牧野 登 | 昭和54年3月 |
| 『史伝 西郷四郎』 | 著者 | 牧野 登 | 発行 株式会社島津書房 |

◎ 金玉均(キムオクキュン)と長崎

— 19世紀末の東アジア情勢と朝鮮開化派金玉均 —

清国の情勢

1885年、1895年と清は、清仏戦争につづいて日清戦争にもやぶれ、朝鮮・ベトナムの2つの朝貢国を失った。日清戦争の敗北により人々が清の政治に疑問を持ち、康有為は清の政治改革を始める。孫文は辛亥革命を指導する。共和制の中国を目指す人々が生まれてきた。1898年、戊戌の政変、列強の利権争奪の中、康有為の上書に感動した若い光緒帝は改革を決意し、6月『国是を定める詔』を發布し、変法派を登用する。この改革に対し混乱が起こった。9月、保守派はこの機をとらえ、西太后は光緒帝から実権を取り上げ、変法派は三ヶ月で失敗する。同年、中国人がキリスト教会を破壊する事件が各地で起こった。破壊したのは義和団で、彼らは弥勒菩薩を信ずれば世の中はよくなると考え、キリスト教の教えに反対した。この義和団が、辛くて苦しい生活の原因はヨーロッパの侵入と考え教会を襲撃したのが義和団事件である。教会に対する不満だけではなく、ヨーロッパ人に対して爆発した。ロシア・日本を中心とした軍隊が北京に侵入し鎮圧した。改革の一方、清朝を打倒する革命運動も盛り上った。

1894年 孫文は興中会を結成する。

1895年 孫文は広州で蜂起を試みるが失敗し亡命、その後、主に海外で運動に奔走する。



来崎時の金玉均
長崎新聞新書
〔「草莽のヒーロー」から転載〕

朝鮮の情勢

19世紀の半ばより欧米列強はその手を東アジアに伸ばしてきた。即ちイギリスは1840年アヘン戦争を中国に強いて1842年南京条約を結ばせ、1853年アメリカのペリー艦隊は浦賀に来航翌1854年強引に日米和親条約を押し付けた。その22年後、今度は日本が列強と同じやり方で江華島事件を足がかりに、翌1875年朝鮮に日朝修好条規を結ばせた。同じ頃、ロシアもシベリアから満洲、朝鮮を狙っていた。李氏朝鮮では、その始祖「太祖」(1392~1398)の時代から王族内部の争いが絶えなかった。現在日本のテレビでも放映されている「イ・サン」「トンイ」の世界である。官吏は「兩班」(ヤンバン)階級が独占し、汚職と税の不当徴収で農民は重い負担に苦しんだ。この時代、儒教は上流階級を守る手段であった。加えて秀吉の壬申倭乱(1592~98)で荒廃した耕作地はなかなか元に戻らず、人民は農地を離れて流浪した。以前から度々北東の国境を犯してきた満洲族は、清朝を樹立すると朝鮮に清の年号を採用させ王の子を人質にとって属国的地位に置いた。

19世紀初めより朝鮮沿岸に外国船が現れ始め政治的混乱は増してきた。国王の高宗(コジョン)は幼く、政治の実権は保守派であり親清派の父・大院君(テウオンゲン)が握っていたが、反対派は王妃の閔妃(ミンピ)を擁して1873年、彼を政権から追放した。1875年、江華島事件から日朝修好条規を経て、朝鮮は一步開国に向かい同時に国防を固める。軍隊の一部は近代化され日本の軍事教官が朝鮮で教育することになったが、民族主義集団の反発を生み1882年、軍事教官は殺され、ソウルの日本公使館は焼き払われた。閔妃一派は王宮を去り、大院君が再び政権に帰り咲いた。清国政府はこのような情勢に不安を感じ、大院君を清国に連行した(壬午軍乱)。閔妃一党が政界に復帰し日本への賠償を約束する済物浦(チェムルポ)条約を結んだが、欧米列強も朝鮮政府の弱腰に付け入って、アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリア、ロシア、フランス、オーストリア、ベルギー、デンマーク

と続々と国交を結び権益を獲得しようとした。この危機的状況に際して、金玉均（キムオクキュン）、朴泳孝（パクヨンヒョ）が指導する独立党（トンニプタン）（開化党（ケファダン））が1884年12月クーデターを起こし高宗を奉じて新政権を樹立し（甲申政変）、14カ条の新政綱を発表したが、清国の袁世凱は3日後にこれを制圧し保守派を政権につかせた。その間、仁川には諸外国が租界を作り、巨文島（コムンド）にはイギリスが海軍基地を作った。1894年東学の全璣準（チョンボンジュン）が全羅道で起こした反乱（甲午農民戦争）の鎮圧を朝鮮政府は清軍に頼み、居留民の生命・財産保護の名目で出兵した日本軍との間で戦いが起こった。日清戦争である。1895年下関条約で清国は朝鮮に対する宗主権を失い、朝鮮は「大韓帝国」となる。しかし日本は朝鮮半島での勢力をますます強め、この地域におけるロシアの進出を阻もうとするイギリスの後押しを受け日露戦争に突入することになる。

金玉均

1851年忠清南道公州に生まれた。本貫は安東、名門の出であるが父は零落し、書堂（ソダン）（寺子屋）で地元の子供たちに教えていた。6歳の時、父の従叔父で高官であった金炳基（キムビョンギ）の養子となり伝統的な学問をおさめることが出来、1872年科挙文科に状元で合格する。若手官僚として活躍を始めた彼は、開化派に属して朝鮮の改革を目指す。1881年5月、62人の「紳士遊覧団」が来日、軍事、政治、産業、教育、医療などの施設を視察、研究したが、この時金玉均は参加していない。彼が日本を訪問するのは翌1882年である。国王の命を受けて訪日視察団を組織し、3月19日長崎に着いた。長崎を離れたのは4月20日で長崎滞在は1ヵ月に及んだが、地方の政治、社会制度の現状を視察したかったのだろう。

「過日渡海し来たる朝鮮貴族金玉均外二名は裁判事務一見せんとて

当地両裁判所へ出願せしよしなれば本日は一見をゆるさる都合に立ち至るべしと云ふ又昨日は当区小学校中学校師範学校等巡検せしよし県庁よりは外務課雇大浦九馬作氏が通弁に付き廻られたり」（西海新聞明治15. 3. 25）。23日夜、船大工町の「桜湯」で入浴客の大阪の男の容貌が同国人に似ているとして朝鮮に来るよう誘ったり、風呂屋の主人が出してきた「岳飛」の書幅に興味を示し、表装代を与え、対幅とするよう一詩を書いている。（同紙3. 26）気さくな人柄が窺われる。

「本県令には本日馬町自由亭に於て彼の韓客金玉均並に繕工官姜士人辺燧の数氏を招待し饗宴を開かせらるよし」（同紙3. 29）

「一昨日の紙上に掲げし同日馬町自由亭に於て内海本県令より韓客金氏其他饗応の景況を聞くに県官は県令始め金井上村両書記官にて招待に応ぜし人々は金氏一行の外清国領事余瑞氏其他県会議長志波三九郎氏同副議長牛島秀一郎氏等にて各午後六七時より登亭せられ席定まるの後県令は招待の意を書面にて示され続いて清国領事及び志波氏等の演説あり又金瑞金玉均氏等の詩作もありて漸く一時頃散会せられたり」（同紙3. 31）宴は盛り上がったようである。

「右金玉均氏の一行は此の次の便船にて釜山より同国人七八名の来るを待ち共に上京せらるると云ふ又去る廿二日金氏は腰痛にて病院に行き「ボック」氏の療養を受けられ廿四日は各国領事を訪ひ各国の事情探尋ありしと廿六日には小島郷福屋にて清国領事の饗応を受けられたり」（同紙3. 29）自由亭も福屋も大変繁盛していたようである。

27日には県庁を通じて「長崎電信分局」を訪れ、「電気機械」「試験器」「電槽室」等を見学、隣の口馬電信会社へ寄って「電氣流通等細かに聞き、自国へも導入したいと希望を述べている。（同紙4. 2）

金玉均と渡辺元

金玉均の来日時深堀出身で炭鉱業に携わっていた渡辺元は県議二年目であった。二人は知人の紹介で会い、忽ち意気投合し義兄弟の契り

を結ぶことになる。上京した仏教徒でもある金は東本願寺派の人脈を通して日本の要人の中に知己・友人を作り、福沢諭吉の知遇を得る。後に金は渡辺に鉱業顧問を依頼し、渡辺は人を派遣して咸鏡道（ハムキョンド）の高山を調査しようとするが、現地人に抵抗されて果たせなかったという話がある（横山宏章「草莽のヒーロー」）。甲申政変に失敗した金は岩田周作として日本に亡命した。亡命は認められたものの、朝鮮からの刺客に付け狙われた。日本で殺されては政府の面子が潰れる。政府にとって厄介者になった金は小笠原、札幌、函館を転々とする。渡辺はこの金に援助を惜しまなかった。尤も陰に陽に実質的に援助したのは渡辺の東京妻、銀座一丁目に洋装店「伊勢幸」を営む青木だけであったようである。この間のたけの苦勞については「草莽のヒーロー」に記されている。金玉均は1894年3月、玄洋社の頭山満らの反対にも拘わらず李鴻章からの会談の申し出に応じて上海に赴き、閔妃の放った刺客洪鐘宇（ホンジョンウ）に射殺されてしまう。享年43歳。金は上海に向かう途次、渡辺の母を見舞っている。渡辺への手紙「昨夜無事着埼、同行も有之、船中に宿止、今朝上陸、御萱堂（けんどう）に謁し、如見我母、歎喜可言。母堂脳病も殆んど平癒、御安心被下度候。兄の近状も大略御話申上置候。弟、明日抜錨、帰期は来月にあり。先は御宅上安全御報のみ。忽々。」この時渡辺元の母モトは61歳。文面からも二人の親密の度が推し量られる。金玉均の遺体は清国北洋艦隊の軍艦で朝鮮に送られ、大衆の面前で四肢を寸断、頭と胴は「大悪不道金玉均の屍」のもとにさらし者にされた。「凌遲斬の刑」といい、儒教で最も重い刑だという。金玉均の暗殺は日本の世論を反朝鮮、反清国の感情に煽った。福沢諭吉もこの後「脱亜論」を唱えるようになる。5月、宮崎滔天らが中心となって浅草東本願寺別院で盛大な葬儀が営まれ近衛公、犬養毅ほか貴族院、衆議院議員数十名ほか一千人が参列、遺髪、服地の一部が青山外人墓地に葬られた。これとは別に甲斐軍治が持ち帰った遺髪と服地をおさめた墓が東京文

京区の真浄寺にある。



伊勢幸は銀座2丁目角にあった。
現在メルサ（2011年12月）。



文京区の真浄寺にある
金玉均の墓

参考文献

宮崎教四郎・秋葉幹人「これならわかる中国の歴史」（大月書店）
宇津木章監修・小田切英著「すぐわかる中国の歴史」（東京美術）
横山宏章「草莽のヒーロー」（長崎新聞新書）、
渡辺登「霊園から見た近代日本」弦書房、
李玉著・金容権訳「朝鮮史」（文庫クセジュ）白水社
「西海新聞」 明治15年3月、4月

（猿渡一美・今道穎治）

◎ マルク・マリー・ド・ロ(ド・ロ神父)

ド・ロ神父は1840年3月26日フランスの英仏海峡に近いヴォスロール村で、ノルマンディ貴族の流れを汲むド・ロ家の次男に生まれた。

神父がプチジャン司教に伴われ長崎へ到着したのは慶応4年(1868)浦上キリシタン総流罪の太政官布達が出された日のことである。

その後、ド・ロ神父は長崎、外海を中心に印刷、教育、医療、福祉、農業、建築、土木など多方面にわたる業績を残すが、ここでは建築関係だけを取り上げて述べることにする。

「旅立つ人の保護者なる聖母」の礼拝所

ド・ロ神父は東洋への布教を決意して、パリ外国宣教会へ入会する。パリ外国宣教会本部の広い裏庭の片隅に現存する「旅立つ人の保護者なる聖母」の礼拝所は、ド・ロ神父が中心になって建てたもので、壁には東洋で殉教した宣教師たちの名前が記されている。

「無原罪の御宿りの間」

日本渡来後、ド・ロ神父が最初に手掛けた建築は「無原罪の御宿りの間」と呼ばれた大浦天主堂司祭館の屋根裏の改造である。

当時、日本人はキリスト教の信仰が許されておらず、日本人神学生らは迫害の中、ここに隠れて神父になるための勉強をした。「浦上四番崩れ」のとき、彼等はマレーシアのピナンや香港に逃れて勉強した。

明治4年(1871)長崎から横浜に移ったド・ロ神父は、隠れて日本に戻った神学生らが潜伏して勉強できる様に、横浜天主堂の屋根裏改造にあたった。

「サンモール尼僧団の建物」

ド・ロ神父は、明治5年(1872)シンガポールから横浜へ来たサンモール尼僧団の建物を建てた。横須賀の兵器工廠のお雇いフランス人

技師の助力を得て、中国人労働者を指揮して建てたものである。

「旧羅典神学校」

明治6年（1873）キリシタン禁制が解かれた。プチジャン司教は横浜から長崎に帰ったド・ロ神父に神学校の設計・施工を命じた。

明治6年の末頃から建築に着手したが、建築中の明治7年（1874）長崎港外伊王島に赤痢が発生、その後蔭ノ尾島で天然痘が蔓延したので、ド・ロ神父らは薬箱を携えて救護にあたった。また夏には台風が相次いで襲来したため工事が遅れ、明治8年（1875）10月ようやく神学校が完成した。

内部は地下が応接室と食堂、1階が教授室と自習室、2階が教授室及び教室、屋根裏の3階は寝室で、学生の部屋は畳敷きであった。



大浦天主堂、旧羅典神学校、旧カトリック長崎司教館

「大浦天主堂の増改築」

キリシタン禁制の解除により、大浦天主堂に詣でる信徒が増え手狭になったので、明治11年（1878）天主堂の増築工事に着手した。

まず、創建時の天主堂の外壁を取り、前方へ柱間二つ分延長し、側部の両側も7尺余り拡張して、脇祭壇を置く祭室をならべた。聖所も奥の方へ12尺ほど延ばした。こうして、天主堂の広さは倍増した。特色ある丸天井（ヴォールト天井）は増築部分にも取り入れられ、創建時の正面中央の扉は現天主堂玄関の大扉として保存された。もっとも著しい変化は、聖所の部分を除き高窓をふさぎ、様式を内外ともにゴシック式に統一し、尖塔を一つにしたことである。

明治11年から12年にわたる改築工事のころ、長崎にいたのはポワリエ神父とド・ロ神父であり、建築に経験豊かなド・ロ師が改築に関与したのは当然であろう。

「出津教会」

明治15年（1882）ド・ロ神父の設計・指導・監督のもと出津教会が建設された。

創建当時、壁面は煉瓦造、内部漆喰塗、木造棧瓦葺、寄棟造り、三廊式平天井であった。



明治24年（1891）増築、祭壇部に塔を建て、屋根は祭壇部切妻造、玄関部は寄棟造りになった。明治42年（1909）玄関部を拡張し、鐘塔を付したので、祭壇側屋根上にあった装飾塔と共に、両端に双塔を有する珍しい外観となった。天井部の平天井は風当たりを考慮して、軒高・屋根高を低く抑えた結果と思われる。

創建から2回の増築まで一貫してド・ロ神父の設計施工によるものであり、鐘塔の上の聖母像は明治43年（1910）アンゼラスの鐘と共にド・ロ神父がフランスから取り寄せたものである。

「救助院」

救助院は海難事故で夫に先立たれ働き手を失った女性を救済するための授産場として明治12年（1879）設立された。

ド・ロ神父は旧庄屋の屋敷跡を自費で購入して出津救助院を建設、明治16年（1883）の年頭から本格的活動を行った。のち未婚の女性が集まり、さらに生涯独身で村人につくす女性も出て、今日の「お告げの MARIA 修道会」として発展する。

救助院の仕事は、染色や機織り、裁縫、製粉、さらにはパン、マカロニ、ソーメンの製造などであった。神父は開墾した農園で小麦を作り、その小麦の粉でパン、マカロニを作った。しかし、日本人の嗜好には合わなかったので、明治22年（1889）ソーメン作りを始めた。ソーメンは今日「ド・ロさまソーメン」の名で伝えられている。救助院は寄棟造棧瓦葺2階建てで、柱は木材、壁面は煉瓦と石壁で造られ、

窓と窓の間の壁はコンニャク煉瓦積みである。1階にはソーメン、パン、染め物などの工場があり、窓がなく薄暗い。2階は南北に大きな窓を持ち、糸紡ぎ、織物工場があり、多目的に使用可能な大きな部屋になっており、西側の奥には祭壇が設けられている。

「いわし網工場跡」(ド・ロ神父記念館)

いわし網工場は、貧困農家の副業の場として明治17年(1884)に救助院近くに建てられた赤煉瓦壁木造瓦葺平屋建ての建物である。救助院の漁網の評判はよかったが、製網技術が発達して手工業では引き合わなくなり廃止になった。

永年に亘り、いわし網工場、愛児園、青年教育所と多目的に使用されたので、部分的に改造が加えられている。

「牧野の水車小屋」

明治18年(1885)神父は出津川上流に水力を利用した製粉場を造った。水車が入っていた建物は現在、救助院の左手に移築されている。建物は2階建てで、急斜面に建っていて、今は2階の部分から出入りするようになっている。旧救助院のすぐ下には、製粉した小麦粉を利用したマカロニ工場の建物、救助院の隅にはパン焼き窯の跡がある。

「大平の倉庫」

明治17年(1884)ド・ロ神父の指導で農地の開墾が始まり、翌年には耕作が始まった。その拠点となったのが大平の倉庫である。建物は玄武岩や結晶片岩を積んで出来ており、壁の厚さは60センチもある。間仕切り、入り口、窓の位置は判断できるが、屋根や扉などは何も残ってない。南側には明治30年(1897)頃増築されたレンガ積みの部屋があるが、今は上部が崩れて全体の姿を想像することはできない。



「大野教会」

大野教会は、明治26年（1893）ド・ロ神父の設計・施工で建設された。部屋は祭壇と信徒席を兼ねていて、ひとつであった。近辺で産する玄武岩の自然石を乱積みにした50cmの壁が主構造となっていて極めて珍しい。



屋根は瓦葺、外壁窓上部半円は煉瓦のせり持で、ロマネスク風煉瓦造、内部は木造で、床板張り、天井は棹縁天井で珍しいが、列柱がないので、身廊・側廊の区別がない。

「旧カトリック長崎司教館」

明治44年（1911）ド・ロ神父は一時危篤に陥ったが、やがて快方に向かった。クザン司教はド・ロ神父を大浦天主堂に隠退させた。

天主堂創建時に建てられた司祭館は老朽化が進み、改築が計画されていた。ド・ロ神父は私費を投じてその工事にあたることになり、再び忙しい生活を始めた。

竣工を間近にひかえた大正3年（1914）11月6日、ド・ロ神父は持病の脱腸症が悪化、司教館の完成を見ることなく神に召された。

新司教館の施工は鉄川与助に引き継がれ、大正3年（1914）に完成した。新館は鉄骨煉瓦造3階建一部地階瓦葺切妻造で、1階と2階に中廊下をとり、どの部屋からもベランダに出られるように、南北にバルコニーがある。3階は講堂のように広い部屋があり、1・2階は事務室、集会室、図書室などに使えるように広い部屋を設けている。

（常川和宏）

- | | | |
|--------|------------------|-------|
| 主要参考文献 | 『ド・ロ神父黒革の日日録』 | 矢野道子 |
| | 『ある明治の福祉像』 | 片岡弥吉 |
| | 『長崎フランス物語』 | 富田仁 |
| | 『カトリック大浦教会百年の歩み』 | 中島政利編 |

◎ カロル・サマフィールド・ロング (Cafoll Summerfield Long)

C. S. ロング1850年1月3日、ウィリアム・エッチ・ロング牧師とサラ・エリザベス・ロング夫人の間に生まれた12人の子供の中の長男であった。彼は1875年6月に東テネシー・ウエスレヤン大学を卒業後牧師となった。そしてノースカロライナ州のアッシュビルにある教会に任命を受け、同時に、キャンドラー・カレッジ学長を兼任することになった。しかし、彼は以前から外国伝道の事業に召命を受けていると自ら感じていたので、メソジスト教団の外国宣教局が、アフリカに派遣する宣教師を求めている事を知り、1879年、その求めに応じました。ところが、1880年志願していたアフリカではなく日本への派遣が発表されました。

彼は日本への任命を受けた前年の6月3日、ニューヨーク州カントンのウィリアム・シー・スミス牧師とメリー・エリザベス・スミス夫人の令嬢フローラ・アイ・スミスと結婚していました。明治13年(1880)4月4日、妻フローラと一緒に、サンフランシスコからガエリック号に乗り、横浜を経て長崎に着いた。

すでに一年前、同じメソジスト派の婦人宣教部から派遣されたミス・ラッセルとミス・ギール両宣教師が女子教育のための活水学院を始めていた。ロング夫妻は男子のための学校を創設することになったのである。そして、さっそく、その手始めとして自宅の一室に、英語に興味を持つ数名の希望者を集めて家塾のような教育を始めた。それが、今の「鎮西学院」の芽生えである。

ロング夫妻は、その後、約1年半にわたる努力の結果一つの校舎を建設することができ、明治14年(1881)10月23日に落成式を挙行了た。この日が今の「鎮西学院」の創立記念日と定められている。ロング夫妻はその創設した学校を「カブリー・セミナリー」と命名した。

彼らがこう命名したのは、1880年1月テネシー州アセンズを出発する直前この若い夫婦のために東テネシー・ウエスレヤン大学の礼拝堂では、大学生や友人たちによつて送別の会が開催された。

そのとき、ネルソン・カブリー夫人が2ドルの銀貨をロング牧師にこの寄贈の金が、「カブリー・セミナリー」を建設する資金の核となり、東山手の高台に出来上がった時の喜びは非常なものであった。ロング博士は、その愛する学生たちに口癖のように「クリスチャンジェントルメンであれ」語りつづけていた。彼は、メソジスト派の流れに沿って、ジョン・ウエスレーを指揮者とするオックスホード大学の学生たちが強調した「聖霊による聖化」を信じ、彼の接する日本の青年たちが、品性の高潔なかつ信仰あるジェントルメンとなることを祈り、このことにその情熱を傾けたのである。ロング師はこの学校で、明治15年（1882）の終り頃、彼の事業を助けるためにもう一人の宣教師キチン牧師が到着するまで、ただ一人で教授に当たっていた。彼はまた出島にあった教会で説教もしていた。前から来日していた宣教師 W. C. デビソン夫妻が明治15年（1882）4月に長崎を去って米国に帰った後は長崎教区における伝道事業を管理する責任の地位に置かれることになった。

彼は、いろいろな事業のすべてに自らを献げていたのであるが、彼が特別に愛していたのは、この学校、すなわち「カブリー・セミナリー」であったことは明白である。彼は、この学校について語るとき、これこそは、私の成してきたことの中で最大のものであったと言っていた。彼ら夫妻には長崎で3人の娘が与えられた。メリー・エリザベスとフロラ・ホーテンスとポーリン・ハルであった。明治18年（1885）春、彼らは最初の休暇で5年ぶりにアメリカに帰ることになり、4月28日「東京号」に乗って横浜港を船出した。ロング夫人の日記によると、彼らは1年後に日本に帰ってくることを希望していたのであった。しかし、彼らの健康がそうすることを許さなかった。彼らは、日本に

来ていた他の同僚たちと同じように、気候の違いからくる困難を感じていたのであるが、特にマラリヤ病にはひどく悩まされた。合衆国に滞在していた2年間、ロング師はニューヨークやペンシルバニア州にある諸教会で宣教に務め、特にノースカロライナ州アッシュビルにおいては責任者とされていた。なお、この期間に、彼は古代ギリシャ哲学の研究を完成し、その試験に合格して、1886年哲学博士の学位を受けた。1887年11月、ふたたび日本に帰って来たが、このたび、ロング博士は、前任地の長崎でなく、新しく創められた名古屋教区に任命を受けたのであった。そこで、彼は明治21年（1888）1月から名古屋市における活動を始めた。この教区における短期間において彼の成したことの一つは、名古屋市に教会堂を建立したことであった。名古屋市在任中、第4番目の娘ジェラルディン・ミチがうまれた。ところがその頃になって、ロング夫人の健康が損なわれ、医者から、日本にとどまっていたは危険であると言われる状態にまで悪化したのであった。

そこで博士は妻と4人の娘たちを伴って帰国することとなり、滞日3年足らずで明治23年（1890）7月17日「ベルジック号」に乗船して横浜港を出航し、8月15日、テネシー州シャーマン・ハイツに着いた。

彼はそこに定住の家庭をこしらえてのち、単身で三たび日本に帰る計画を立てていた。しかるに、テネシー州に到着後、彼は休息する暇もなく祖国の各地で伝道に従事することとなった。そしてノースカロライナ州アッシュビルからあまり遠くないところにある小さな教会で病にかかり、不幸にも、10日後にはその教会で亡くなってしまったのである。それは1890年9月4日のことであり、そのとき、彼は40歳であった。

（白地成州）

参考文献

- ・鎮西学院九十年史 鮫島盛隆著 鎮西学院九十周年記念事業部
- ・鎮西学院物語 鎮西学院125年誌編 鎮西学院
- ・鎮西学院創立者の面影 鮫島盛隆著 鎮西学院ピースチャペル

● ラッセル (Elizabeth Russel)

地元長崎の者にとっては、「ラッセル先生」の呼び名の方がなじみのあるラッセルは、1936年10月9日、アメリカのオハイオ州ケージズ市に男四人、女二人の六人兄妹の長女として生まれた。

1857年にはペンシルベニア州ワシントン市のワシントン女学校に進み、卒業後は個人教師についてラテン語とドイツ語を学んだ。バージニア州内の公立学校や公立女学校の教師、家庭教師などを勤め、約20年間の教職とカンバーランドで短期学校の経営、公立大学の校長にも昇進し、学校経営にも携わった。

1873年に健康を害し、教師を辞めた者の野外伝道集会の誘いから再び教壇に立つことになった。

明治12(1879)年、「豊かな経験と、熟達した指導力を持つ二人の宣教師を直ちに長崎に派遣してもらいたい」とのJ・C・デヴィソン師(キリスタン禁教が解かれたばかりの年に牧師として妻メアリーと共に来日。出島メソジスト教会を設立する)から要請書を受け取ると、アメリカ・メソジスト監督教会の本部は、二人の宣教師を派遣した。

43歳のラッセル女史、33歳のマーガレット・ギア (Margaret Gheer) 女史であった。明治十二年十二月二十五日付の西海新聞には生徒募集の公告を載せたが、それには「私共は、このたび大浦切り通しの上の十三番地において、女学校を開設いたします殊に月謝など安くして英語と日本普通通学そのた西洋すべて女子手芸など一つとして違わず、音楽などに至るまで教授することが可能であり有志の女子のご入学が有りますことを希望いたします。その有志のお方は、六番地のデヒソン氏方え御来臨たまわれれば月謝および教授方法などことごとく申し知らせることが可能です。ロ(ラ)ッセル氏ギール(ア)氏」と書いてあった。

開校は、12月1日とされたが、11月末日まで生徒が一人も訪れていなかった。そんな中ラッセル女史は、「神様は必ず生徒を使わせて下さる」と高い信仰心を持ち、熱心な祈りが捧げていた。そして運命の12月1日、一人の女性がやってきた。官梅 能（かんばい よし）である。官梅家は、長崎の唐通事で有名な林道栄を祖先に持つ家柄である。能は、メイの母である。

教師2人生徒1人の学校が女子の大学が認められていなかった時代に最高の教育機関として東山手16番館に開校した。ところが、開校から一ヶ月経っても生徒は、全く増えない。長崎の人々に対する外国人や偏見に気づいた。そして大浦天主堂で有名な「信徒発見」が起こった時のことを知る。「ワレラノムネ、アナタノムネトオナジデス」52歳の杉本ゆりがプチジャン神父に信仰を告白したのである。拷問や流罪が行われていた時代であったが、浦上の人々は極秘で教理を学んで受洗者に恵まれたのである。

その一方で密告に怯える長崎の人々の姿があったのである。明治13年、ラッセル女史は、生徒数は5人になり（能に加えて鹿児島から3名、長崎から1名）授業のかたわら、日曜学校を始めた。生徒や使用人の参加を求めて聖書研究会や教理研究会を開いたのだが、その中から救われる魂が二名起こった。

そのような幸いなできごとに恵まれた年になった半面、創立から間もない活水学院に、同年3月試練が立ちはだかる。上記した長崎の少女に聖書と讚美歌を与えたところ「これはスタウトという人が作ったキリシタンの本ですけんが、返して来るようにって、うちの父さんに言われましたけん、お返しします」と言ってその少女は二度と姿を見せなかったのである。

1880年に9人、1882年に生徒は43人に増え、次第に学校も手狭となった。ラッセルは東山手13番地の丘陵を入手し、工事は8日遅れて落成した。その際、期限までに完成しなかったものの16ドルの違約金は

受け取らなかった。

1882年、ラッセルは43人の生徒たちとともに、この新校舎に移転した。生徒数に対して広すぎた校舎にラッセルらを非難する声も多く、「あの青い目の異人さんは、あんなに大きな家をたてて、若い娘たちを住ませているが、収容されている女生徒の生きざもをとって乾燥し外国に売るのでろうか、それとも油を絞って売るための収容所なんじゃないか」などの妙な噂も流れた。

しかし、ラッセルは小事にこだわらぬ太っ腹な女性で「そのうち、この校舎も狭くなって建て直さねばならぬ時が必ず来ます」と笑っていた。当初、活水学院の学科として、初等科・三年（高等学校程度）、中学科・三年（専門学校程度）、高等科・二年（大学レベル）神学科・四年（専門学校程度）、音楽科・五年（専門学校程度）、技芸部があった。のち、美術科などがあったが現在は、中高大学のみ存在する。

明治21（1888）年、神学科の第一回卒業生五名を出すのが、忍び寄る戦争の影が立ち塞がった。活水学院は、戦時中の弾圧ミッション校として再び歩み出すのである。

活水学院という名前は、ヨハネによる福音書4章10節から14節「さらば汝に活ける水を与えしものを」からきている。

1880年9～6月の間に、ヨハネによる福音書4章10節の中の生命力あふれるイエスの言葉から、学校名は「活水」と命名された。新築の校舎に移り喜んでいたら、生徒の中に脚気になる者が続出し、ラッセルは転地療養用に時津村に一家を借り受け、生徒全員を数十台の人力車に乗せて移動した。その夜、宿舎に盗人がはいりラッセルの金時計を盗んで逃げたので、ラッセルは大切な生徒にもしものことがあつてはならぬと、翌日再び人力車で学校に戻った。厳格なしつけをする厳しいラッセルも、その反面母のように慈悲深く、やさしいあわれみのある先生であった。

ラッセルは社会福祉事業にも貢献し、1893年島原地震の際津波に襲

われた熊本側の沿岸で、家を失い孤児となって路頭に迷っている15人の女の孤児を引き受けた。収容所を熊本に設け、衣食住の世話をし、読み書きや算術などの教育を授けたのが、活水女園の起りであった。

1896年、福岡市外古賀村に土地が寄付され、施設が落成した。2年後、移転する際、活水女学校の近くにと土地を探し、長崎県大村玖島郷に700余坪の土地を得た。大村活水女園といわれ、古賀村にあった建物を取り壊し、22両の貨車で運んで再建し、孤児や貧困の家庭の女児の世話をした。経営は苦しく、ラッセルは自分の給料のすべてを孤児たちのために使うこともあり、帰りの汽車代は駅長に事情を話して借りて返ることもあった。

外国船の乗組員のためには大浦にシーメンズ・ホームというビリヤード場などの健全な娯楽施設をもうけ、日曜日には集まって礼拝するなど、ラッセル自ら監督の任務に当たるなど、社会事業にも強い指導力を発揮した。1898年3月、校長を辞任したラッセルは2代目ヤング校長にその任を譲ったものの、教師としての仕事は続け、欠勤した教師の授業にはラッセルが行き代わりを勤めた。ラッセルの口ぐせの、「If you could it, you would find the girlhood of Japan, written on my heart.」（もし私の心を見ることができれば、日本の娘と書いてあるだろう）は、創立60周年に作られたレリーフにも刻まれている。

1919年、82歳で帰国するまで活水のために尽力したラッセルは、5月28日、養女のメイとともに、数百の教え子たちに見送られながら、春洋丸に乗船し、長崎港を離れた。生徒たちの中には、校舎の上からシーツを振って名残を惜しんだ者もいた。帰国後は、アメリカのオハイオ州で閉寂な日を過ごし、養女のメイは結核に罹り没した、大正13（1924）年39歳であった。養女メイに先立たれた後は、姪のところを二、三移り住み、最後には一老婦人と共に住んだ。ラッセルは、病床にあること一週間ほどで、何の苦痛もなく、1928年9月6日92歳で永眠した。最後の言葉は「収穫は多いが、働き手が少ない」であった。

活水の卒業生には、東京の学習院の校医となった「井上トモ」、日本初の女性大臣となった「中山マサ」がおり、1981年には4年制大学を開学し、新戸町キャンパスもつくられ、活水学院の教育の場は広がり続けている。

1926年、アメリカ人ヴォーゲルの設計で建てられた鉄筋コンクリート造4階建の六角堂に、現在も女子学生が集い学んでいる。時が流れてもラッセル先生も立たれていた同じ地で、今も創立者であるラッセルの思いが生き続けている。ただ当時のまま残っていた中・高校の旧校舎が、今年老朽化の為やむなく建て壊されることとなったのは大変残念である。
(北浦由美子・白地弘奈)

参考文献

- | | |
|-------------------------|------------------|
| 長崎の女たち | 長崎女性史研究会編（長崎文献社） |
| 活水学院五十年史 | 活水学院 |
| 活水学院百年史 | 活水学院百年史編集委員会 |
| エリザベス・ラッセル女子の略伝 | 吉村ハルエ氏稿 |
| 長崎女人伝 | 深瀧久著 |
| 長崎 活水の娘たちよ | 彩流社 |
| 活水学院創立者 エリザベス・ラッセル女史の生涯 | 活水学院 |

● 岩崎弥之助(いわさき やのすけ)

はじめに

明治18年（1851）2月16日、岩崎弥之助は兄・弥太郎の後を継いで三菱の2代目総帥となった。共同運輸会社との壮絶なビジネス戦争の真っ只中で弥太郎は、胃癌により惜死したが、あとを継いだ弥之助は、政府から要請が出ていた郵便汽船三菱会社と共同運輸会社との合併を容れ、この不毛の戦いの終結を図った。三菱の原点である九十九商会の発足から15年後のことである。

活動の場を海から陸に転じて多角的に事業を展開していった弥之助の先見の明は日本の近代化と軌を一にしたもので、まさに今日の三菱グループの骨格を形作ったと言ってよい。

生い立ち・修学時代

岩崎弥之助は、嘉永4（1851）年1月8日、土佐国安芸郡井ノ口村（現在の高知県安芸市井ノ口）に、地下浪人岩崎弥次郎・美和夫婦の三男（次男は夭折しており、三男の弥之助が戸籍上は次男となっている）として生まれた。兄弥太郎とは16歳の違いである。母・美和の手記によれば、弥太郎は以前から男兄弟のないのを寂しがっており、生まれしてきた弥之助を格別に可愛がったという。

その弥太郎に「これからの日本は変革する。これに対処するには学を修めておくことが重要…」と、学問の大切さを説かれた弥之助は16歳（慶応3年〔1867〕）で高知の致道館に入学する。致道館は、吉田東洋の教育改革の献策により藩校・教授館に代わって文武館として開設されたものである。明治2年（1869）、18歳になった弥之助は、土佐藩開成館の長崎出張所から大阪出張所に移っていた弥太郎を頼って大阪へ出た。そして、漢学者重野安繹の私塾・成達書院に入学、重野を終生の師と慕うようになる。

明治4年（1871）11月、岩倉具視、木戸孝允らの遣米欧使節が日本を出発した。これを知った弥太郎は、弥之助に「これからは世界が相手だ。お前も行け…」とアメリカ留学を命じる。長崎以来の取引相手であったウォルシュ兄弟に渡航手続き一切を依頼する。

翌年4月、弥之助は、横浜からサンフランシスコに渡り、完成して間もない大陸横断鉄道でニューヨークへ向かった。ウォルシュ&ホール商会に渡航手続き、学費の送金などの世話を受け、コネチカット州のエリントン村の全寮制の学校に入学する。学校の名をホール・ファミリー・スクールといった。言語修得の一番の早道である24時間英語の世界で英語を学び、ピューリタン精神を学び、民主主義の何たるかを学んでいた最中、弥太郎から父弥次郎が死去したことにより帰国を促す手紙が届いた。渡米して1年5ヶ月のことである。

海運会社の副社長時代

米国留学から戻った弥之助は、弥太郎の傘下で海運三菱の陣頭に立つ。弥太郎の率いる海運会社は、出世魚のように名前を変えながら、東京の荷積み問屋と独占契約を結ぶなど東京⇄大阪間の貨客輸送にしっかり食い込み、競争相手の日本国郵便蒸気船会社を凌駕していった。

明治7年（1874）、三菱商会は、本社を大阪から東京に移し「三菱蒸気船会社」と名乗った。同年、政府は台湾への出兵を決定。欧米各国は、日本・清国間の紛争に介入するのを避け局外中立を宣言し日本への輸送船貸与を拒絶した。政府は新興の三菱に協力を要請、「国にあっての三菱」という信念を持っている弥太郎は、喜んで引き受けた。政府は、新たに10隻（その後、3隻追加）の大型外国船を購入して三菱に運航を委託し、三菱は、政府の期待に十分応える働きをした。

台湾出兵時の三菱の運航を高く評価した政府は、保護を与える一方でこれを育成し管理することを目的として、明治8年（1875）命令書を交付した。その内容は、

①政府がすでに三菱に委託している政府所有の船舶13隻を三菱に無

償で下付し運航助成金を給付すること、

②三菱は会計を明確にして政府の検査を受けること、

③官物・郵便物の輸送、航路開拓、船員養成にあたること、

④海運以外の営業をしないこと、

⑤政府は必要ある時はいつでも船舶を優先的に使用しうること、

などであった。三菱は、これを期に社名を「郵便汽船三菱会社」と改称した。同年、政府は、上海定期航路の開設を三菱会社に命じた。三菱は、東京丸など新鋭船4隻を就航させ、第一船には弥之助が社長代理として乗り込んだ。上海ではフランス租界に支社を開設し、英語の出来る弥之助が各国の商館に航路の紹介をして回った。

共同運輸会社との競争

政商三菱の海運業は、10年余で急速な成長を遂げたが、政権内部の抗争の影響をこうむり、創業以来の危機に直面する。

国家的見地から海運事業の重要性を認識し三菱の保護育成を強力に推進してきた大久保利通（49歳）が、西南戦争のあと石川県の不平士族らによって暗殺された。明治11年（1878）5月14日のことである。その3年後には北海道官有物資払い下げ事件をきっかけに大隈重信らが失脚し、政府の主導権は、伊藤博文、井上馨ら薩長なかんずく長州閥に握られた。新政府は三菱の海運独占に対する批判を高める。井上馨、品川弥次郎らは、益田孝（三井物産）、渋沢栄一に働きかけ、反三菱連合ともいうべき「共同運輸会社」を設立させ多大な助成金を支給する。三菱と共同運輸の2ヶ年におよぶ採算度外視の熾烈な戦いが始まり、両社は総力戦の中で疲弊していったが、あくまでも徹底抗戦を譲らなかった直情径行の弥太郎が病死する。

後を引き継いだ弥之助は「…従来の宿志を達せんとの私情をもって政府の公儀にもとり候いては、それがため終にわが国海運全体をして瓦解に至らしめりの不幸に陥り申すべく…国家の不幸、実にこれより大なるはなし。…この際、断然私情を棄て公儀に服従するほか、他に

致し方もこれあるまじく…ひとえに国家のために尽力して、不屈不撓…ますます隆盛の域に進ましめ候ことに決心いたされたく、この段心得のため申し述べ候なり」(『岩崎弥之助小伝』)と、三菱創業以来の幹部である川田小一郎、豊川良平や新進気鋭の荘田平五郎らに決意を述べ、政府から要請が出ていた郵便汽船三菱会社と共同運輸会社との合併を受託した。そして三菱は海から陸に転じて多角的に事業を展開して行ったのである。

高島炭坑の買収

副社長時代の弥之助は、三菱の後継者として重要な役割を果たすことが多かった。その最たるものが、明治14年(1881)の高島炭坑の買取りである。これは後に弥之助が三菱を引継ぎ、三菱の多角化路線を展開する際の重要な布石となる(『岩崎弥太郎物語「三菱」を築いたサムライたち』)。

後藤象二郎が経営する高島炭坑を三菱へ斡旋したのが福沢諭吉であったことはよく知られている。福沢は、後藤の政治家としての手腕・資質を惜しみ、経営破綻寸前の高島から救出しようとした。福沢自身の日記によれば、斡旋は明治11年(1878)の秋頃から開始されている。

福沢は先ず岩崎弥太郎の懐刀と言われた荘田平五郎(福沢の門下生)ほか三菱幹部にこの案を持ちかけて地固めをし、外堀を埋めていく。そして正式に後藤の女婿である弥之助を説得し、弥之助から兄弥太郎へ折衝をさせたのである。

弥太郎は、福沢の文明開化・実業立国の思想に共鳴していたものの、高島炭坑の買取りについてはなかなか「うん」とは言わなかった。後藤の二枚舌には、これまで何度も煮え湯を飲まされていたからである。弥之助は高島炭坑の推定埋蔵量、出炭予想、収支予想、既存施設の資産価値、三菱の船腹を利用することの意味、石炭販売の利ざやなどを総合的に評価、「これは買収すべし」と弥太郎を執拗に説得する。

一方、福沢はさらに参議の大隈重信をも動かし、ついに明治14(1881)

年3月、譲渡契約の締結となる。

弥之助の冷静沈着な判断で、三菱のさらなる事業への拡張基盤を固めていくことができたことの意義は極めて大きい。高島炭鉱のことを「三菱発祥の地」・「三菱のドル箱」と言われる所以は、まさに弥之助が捨て身で弥太郎を説得した賜物であろう。

第2代社長を襲名した弥之助は明治19年（1886）3月、郵便汽船三菱会社を「三菱社」と社名を変更した。このとき経営事業として挙げた主要なものは炭坑・鉱山と造船業で、特に炭坑はその冒頭に掲げられ、明治21（1888）11月の本社職制の改正にあたって、本社に鉱山・会計・庶務の3課を設けたことから見ても、三菱再興の方途を鉱業（炭坑・鉱山）に重きを置いたことが窺える（『三菱鉱業社史』）。

造船所の建設

明治20年（1887）4月、弥之助は、大蔵大臣伯爵松方正義に長崎造船所（長崎造船局を改称）の払下げを申請し、同年6月代金45万9千円で許可を受け、名実ともに三菱社の所有に帰したのである。（『三菱重工業㈱長崎造船所資料館』）。

同年、当所最初の鉄製貨客船夕顔丸（206 t）、翌明治21年（1888）には大阪商船会社より600 t級の筑後川丸、木曾川丸、信濃川丸の3隻を受注、さらに27年（1894）に日本郵船会社向の須磨丸（1,592 t）を造って実績を積む一方、飽の浦地区から西側周辺の5万坪の土地を買収するとともに約4万坪の海面を埋め立て、立神第一ドックの拡張、さらに向島第二ドックの新設工事など大々的な工場設備の拡張が行われ建造能力を高めて行く。そしてついに、昭和31年（1956）に進水量世界一となる。その後も57年と61年に続き、65年からは11年連続で世界一を達成したのである。

三菱合資会社の設立

明治26年（1893）弥之助は、三菱社を廃して三菱合資会社を組織した。資本金は500万円とし、弥之助・久弥（弥太郎の長男）の250万円

ずつの出資。三菱は多数の株主によって経営判断が揺れることのないよう株主限定の合資会社を選び、弥太郎以来の伝統である岩崎家の確固たる経営権を明確にしたのである。この合資会社発足とともに弥之助は第一線を退き、社長の座を久弥に譲り、監務という現在でいう会長ないし相談役的な立場になって若い久弥を支えた。

弥太郎が死の間際に発した、「岩崎家は古来嫡統を尊ぶ家ゆえ、久弥を嫡統とし、弥之助はこれを補佐せよ…、弥之助、わしの志を継ぎ、事業をしっかりと頼むぞ…」の言葉を忠実に守ったのである。

日銀総裁として

明治29年（1896）松方正義首相は、弥之助を日銀総裁として推挙した。最初は固辞したが、結局は受託して第4代日銀総裁に就任する。弥之助はまず、渋沢栄一を訪ねて「余ハ今ヨリ公共的精神ヲモッテ（総裁に）臨マント欲ス」と協力を求めている（『東京日日新聞』）。三菱の前総帥という大物総裁であったにも拘らず、弥之助はすこぶる謙虚に立ち振る舞うとともに人の意見を真摯に受け止めた。このために日銀関係者の信頼は極めて厚くかつ意気も揚がったという。

文化支援・趣味

第一線を退いた弥之助は、なおも多忙ではあったが、趣味にも没頭したと言われる。それほど好奇心が旺盛だったということなのだが、古典籍収集、建築、園芸、東洋文化、美術品、漢学など、その収集品に関する数は計り知れず、収集した貴重な品々を保護・収納する美術館まで作らせる徹底ぶりであった。

現在、東京都世田谷区にある静嘉堂文庫がそれである。昭和59年（1954）12月に三菱商事(株)が発行した、（『静嘉堂百選』）の冒頭には、「…静嘉堂はご承知のように三菱第2代社長岩崎弥之助氏および第4代社長岩崎小弥太氏が当時の西洋文化偏重の中で東洋固有の文化を愛惜し、その散亡を惧れて父子2代にわたって収集された貴重なコレクションとして内外に知られています…」と記されているように、単な

る趣味ではなかったのである。

現在では、その数多くの収集品が国宝、重要文化財となるなどしており、弥之助父子の功績は広く認められているところである。

おわりに

三菱財閥2代目総帥として事業の多角化をはかり、三菱の確固たる基礎を築き上げた弥之助を評して、大隈重信は「三菱の基礎を開拓したるは弥太郎の力なることは相違なき事実なるも、その基礎を不拔の地位に築きたる守成の功は全く弥之助である」(『岩崎弥之助小伝』)と言った。さらに渋沢栄一は「三菱の事業は兄弥太郎の画策よろしきを得たるものありには相違なきも、内に弥之助男爵のあるありて、これを補いこれを輔くるなくんば、成功あるいは必ずべからざるものありしならん」(『岩崎弥之助小伝』)と言って、高く評価していた。

その弥之助は、明治41(1908)年3月25日、享年57の若さで惜死したのである。(福田哲也)

参考資料

- 『三菱鉱業社史』 発行 三菱鉱業セメント株式会社
編集 総務部 社史編纂室
- 『高島炭鉱史』 発行 三菱鉱業セメント株式会社
編集 高島炭鉱史編纂委員会
- 『静嘉堂百選』 発行 三菱商事株式会社 広報室
- 『資料館』 発行 三菱重工業株式会社 長崎造船所
- 『岩崎弥之助小伝』 発行 財団法人三菱経済研究所 三菱資料館
- 『岩崎弥太郎物語「三菱」を築いたサムライたち』 著者 成田誠一
(三菱史アナリスト)



西道仙(賜琴石齋西道仙と名乗る)

道仙は、天保7年（1836）1月1日、現在の熊本県天草郡五和町御領の医家の2男として生まれた。父は西元良、母はノシ（島原半島北有馬村折木庄林田重太夫の娘）である。道仙は、大正2年（1913）7月10日、78才で長崎市本興善町33番戸の自宅にて逝去した。御領で私塾玉壺堂を開いていた柏木辰五郎に学ぶ。嘉永5年（1852）17才で豊後の儒者帆足万里に儒医を学ぶ。18才の時熊本の池田宗度に医術を学ぶ。

各地を遊学の後、熊本の漢方医塾村井雲来館（村井珍寿）に入塾する。文久3年（1863）秋月藩医戸原外橘と太宰府遷居の七卿に仕えようと筑前筑後を奔走していたが、母病氣危篤の報により、戸原に澤宣嘉卿あての「中興策」数編を託して帰郷したという。同年28才で長崎酒屋町35番戸1号眼鏡橋側の現長崎大神宮の隣接地辺りに来住し、医院兼私塾を開いた。曾祖父道俊（長崎御用医師）が寛政5年（1793）天草に隠れてから70年振りの長崎帰還であった。明治元年（1868）2月15日澤宣嘉卿が九州鎮撫総督兼長崎裁判所総督として長崎統治のため



に着任（明治2年4月11日東京へ去る、長崎在任期間は1年余り）。澤総督は道仙が長崎にいることを知って長崎府奥詰文書役（県庁秘書課長）に採用しようとしたが、道仙は在野での活動を希望し澤総督に多くの献策を行った（身分によって姓氏

がないのはおかしいので万民に苗字を公称させること、また医師及び薬剤師開業の免許制度創設などを建白した）。これらにより道仙は澤総督から褒賞として賞金の代わりに道仙が所望した鳴滝1丁目14番

(かつての地名は中川郷字谷) 県立鳴滝高校の裏山の巨石を賜った。賞状には「王制維新前後追々建言し且つ著書を為し、報国尽力神妙の到、賞金を辞退致し候に付き、望みに任せ官有地に有る石を遣わし賞金に代えるものである」と道仙の功績を称えた。石は縦約1.2m、横約1.3m、長さ約3mの長方形で、表面に琴の線のように数本の筋がある。以後、道仙は、賜琴石斎西道仙と名乗るようになる。鳴滝の琴石の側に「嘯月碑」と称する「琴石西先生紀念碑」がある。海雲山霖玉仙(皓台寺27代住持金峰玉仙)による撰文が次のように刻まれてある。「初澤卿知長崎 嘉先生之功 賞以金 先生謝曰 金則敢辞 郭北有奇石 面現白条 状類琴 願得賜之」(道仙は賞金を辞退して郭北にある琴の形をした奇石を所望して賜った)、「遂号其斎曰琴石 有栖川熾仁親王為書琴石二大字賜之」(有栖川熾仁親王から琴石二文字の書を賜り遂には賜琴石斎と号するようになった)。道仙はなぜ鳴滝にある琴の形をした巨石を所望したのだろうか。長崎市立博物館「長崎の史跡(南部編)」によれば、当時の鳴滝には諏訪神社宮司青木家の別荘(現シーボルト宅跡)など別荘が多かったが、特に医師伊沢蘭軒が訪ねた彭城家の7代仁左衛門の別荘(現県立鳴滝高校の地)や異書万卷を左右に陳列していたという游龍梅泉の梅泉荘などは有名であった。「春は桃花水に流れて錦繡を洗うが如し」などと詠まれ長崎十二景の一つに数えられた名勝の地「鳴滝浣花」であったという。また長島俊一「西道仙」によれば、鳴滝は、現在では家が建てこんで随分変わっているが、琴石のところまで上ると今でも往年の鳴滝溪谷の雰囲気が残っている。前面に長崎港が広がり、その奥には稲佐山がそびえ、右手には諏訪神社の社殿があり、左手には風頭山系の東端にある瓊浦高校が望まれ、長崎の一大パノラマが一望できる景勝の地であるという。道仙が鳴滝の琴石を所望した理由は判らなかつたが、琴という楽器の形をした奇石が谷の中にある鳴滝の自然は、風流を楽しむ知識人を魅きつけてやまないものがあつたのではないだろうか。

明治5年(1872)寺町の長照寺で自由会という会合を開いたとき、生徒数十人の席で「山呼萬歳声」の五文字を書いて床の間に掲げ万歳を唱えた。これを契機として明治12年4月1日大政官布告第168号「万歳三唱令」が施行された。明治6年(1873)私学校「瓊林学館」を桶屋町の光永寺に創設し自ら督学となった。漢学者谷口中秋を館長、英人デントを英語教授に招く。ほどなくして西山の崇福寺末庵大悲庵に移転する。同年、本木昌造が創設した週刊新聞「長崎新聞」の発行に参画し、以後、新聞事業に係わり、4年後九州最初の日刊新聞「長崎自由新聞」を創刊して社長となる。西南の役のニュースを売物とし、西郷隆盛を支援した。明治22年「長崎新報」(今日の長崎新聞の前身)が創刊され常議員となる。明治11年(1878)初めての公選により長崎区戸長(今の町村長、一日出勤して辞任した)となり、政治に顔を出す。明治15年長崎区会議員に当選し議長となる。同年同志会(肥前改進黨長崎支部)を結成し、幹事となる。明治14年(1881)長崎区常置委員会の委嘱によって、常置委員である漢学者の道仙が眼鏡橋外中島川の橋に名をつける。橋柱の橋名も能書家であった道仙の筆であるといわれている。明治16年長崎衛生会を創設し幹事、同18年長崎医会が結成され副会長、同21年赤十字社正社員、同23年長崎県医学会の副議長、同36年長崎看護婦養成所長となる。明治22年(1889)長崎市制最初の市会議員選挙に当選し、コレラ発生など衛生問題があったので「長崎水道論」を著し、水道の必要性を訴える。諏訪神社境内の旧諏訪荘建物玄関前に「五厘金之碑」がある。道仙らの働きにより明治24年竣工した長崎市の水道施設工事費に五厘金積立金残6万640円全額が投入され、水道工事の市民負担軽減に役立った。明治25年(1892)長崎文庫の創立委員となり幹事に就任。古文書を収集保存し市民の閲覧に供した。長崎歴史学会の創始者であった。2年後長崎古文書出版会を創設し長崎に関する資料を復刻した。毎月1回古文書を刊行し、長崎叢書と題し会員に配布した。その校閲は道仙と安中半三郎が行っ

た。明治35年（1902）長崎港改修工事を促進するため「大同団結」の会合を開き議長となる。よって工事は37年完成、大黒町や出島周辺など17万余坪の新しい埋立地に23町が生まれ、その多くの町名を道仙が命名したといわれている。道仙は明治維新後の長崎各界で大活躍した異才であった。しかし道仙を知る人は少ない。道仙の業績を評価・整備し、鳴滝の琴石などを長崎観光に役立てても良い時期だと思う。

（栗原眞高）

西道仙の活躍の足跡

琴石山	琴石と嘯月碑（鳴滝高校裏山）（鳴滝 1 丁目）
鳴滝塾舎跡	シーボルト宅址記碑（鳴滝 2 丁目）
長照寺別院	長崎祠記碑（桜馬場天満宮裏）（夫婦川町）
松森神社	蕉川笹山翁碑（本殿の裏左側）（上西山町）
元料亭迎陽亭	道仙書の唐船維繫石の門柱（玉園町）
大音寺	豊澤仙糸翁之碑（正門より直ぐ）（鍛冶屋町）
八坂神社	八坂神社記碑（本殿前）（鍛冶屋町）
大浦諏訪神社	諏訪神社記碑（鳥居の上）（相生町）
稲佐小学校	稲佐小学校記碑（道路から直ぐ）（稲佐町）
田上稲荷神社	報国碑（道路に面している）（田上 1 丁目）
祝捷山運動公園	祝捷山と彫られた大石（上小島 5 丁目）
諏訪神社	五厘金之碑（本殿右、諏訪荘建物前）（上西山町）
中島川石橋群	眼鏡橋など命名した
勸善寺後山	長崎御用医師西寿仙院 3 代の墓（玉園町）
大音寺後山	賜琴石齋西道仙の墓（鍛冶屋町）
長崎大神宮回り	文久 3 年来住して医院兼私塾を開いた（栄町）
光永寺	明治 6 年私学瓊林学館を創設した（桶屋町）
元大悲庵	瓊林学館の移転先（上西山町）
自治会館	長崎新聞創刊した新町活版所跡（興善町）
明治生命ビル	酒屋町から転居してきた屋敷跡（興善町）
長照寺	万歳の発祥地（山呼萬歳声）（寺町）

◎ 日下義雄と鄭濱子

明治18～19年頃長崎でコレラが大流行した。これが全国に広がり「長崎の町を焼き払ってしまえ・・・」という極論までも出たという。当時長崎の衛生設備は全くなっていなかった。

ちょうどその頃明治19年2月日下義雄が初代の長崎県知事となって赴任して来た。彼は在職4年間に水道の創設、下水道の整備、清国水兵暴動事件の処置、築港の計画、桜樹の植栽、火葬場の公定、女神検疫所・竹之久避病院の設置、稲佐製氷会社の設立など実にエネルギーな業績を残した。製氷会社の設立は悲しい出来事がキッカケでした。明治19年12月1日、各国の領事夫妻らが集まって舞踏会が開かれました。場所は現在県立図書館になっている交親館。日下の妻可明子はその場で倒れて再び意識が戻ることはなかった。何しろ熱が高く、島原の雲仙地獄に飛脚を走らせて囲い水を取り寄せたが、ちょうど使いが帰ったとき可明子は息を引き取ったという。(享年28)「もちろん水で冷やしたとて助からぬ命であったと思うが、この一事で長崎に製氷事業を発案した。」と日下はのちに親しい人にもらしている。明治19年といえば、清国水兵の暴動事件も忘れてはならぬ事件である。8月13日の夜寄合町の遊郭楽遊亭で手当たり次第の乱暴をはじめたのが事件の発端である。15日早朝から協定を守らず上陸した清国水兵は450人を超え、市中を徘徊、広馬場に集結して日本の警察官に暴行、梅香崎署を襲い船大工町、丸山町、寄合町など各所で警察と清国水兵が乱闘を展開。この事件で日本の巡查2人死亡、重軽傷29人、清国側8人死亡、重軽傷42人を出し、事件が解決したのは2年7ヶ月後である。双方から死傷者に弔慰金を贈り事件関係者はそれぞれ自分の国の法律で処理するという実に簡単な解決であった。これは当時の日清両国の力関係と日本の国際的地位の低さを見せつけられた問題でもあった。

竹野濱子から鄭濱子へ

この頃、竹野濱子という女性が再度長崎に戻って来た。再度というのは濱子の父竹野敏行が明治司法省に任官、長崎上等裁判所勤務となったため佐賀より家族ともども長崎に移り住む事になった。しかし、明治17、18年頃に仙台勤務を命じられ竹野一家は一時長崎を離れている。ところが再び長崎勤務を命じられ、長崎港を一望に見下ろす高台の上筑後町に戻って来たのであった。濱子は明治21年2月24日に設立された日本赤十字社長崎委員部（長は日下義雄、事務所は長崎県庁内で旧長崎奉行所立山役所にあった）で看護講習を受講した（中島医師の経営する産婆学校という説もある）。明治29年天津領事鄭永昌と結婚していた異母妹、喜美子の病状悪化の連絡が入った。濱子は看護のため単身天津へ向かった。しかし、看護のかいもなく喜美子は幼子2人を残し他界した（享年30）主婦に先立たれた鄭家は竹野家に対し濱子を後妻にと願い出る。濱子は妹が残した2人の子供達のため母となることを決意し永昌の後妻となった。鄭家は長崎の唐通事の家柄で本古川町20番地が本籍地のようにある。明治30年頃の住居は東京。鄭家の人々は維新後外務省の役人となり活躍していた。一般に「義和団の乱」とも「北清事変」とも呼ばれる明治33年1月から起こった清国内乱がある。当時の清国は、西太后の時代だった。華北各地で「義和団」がキリスト教会の破壊、教徒殺害、鉄道、電信の破壊、石油ランプ、マッチなどの外国製品焼却等列強の援助でキリスト教の特権を持つ者達に反抗、天津、北京に義和団員があふれ暴動が勃発したのをキッカケに清国政府が列国に宣戦した事件である。当然、天津領事館も砲弾の集中攻撃を受けている。その時、領事夫人となっていた濱子は、人種に関係なく昼夜をとわず救急看護活動にあたったといわれる。明治34年8月1日濱子は、天津における国際赤十字活動の功を認められて、女性としてはじめて勲六等宝冠章をもらっている。当時の新聞に大きく報道されたようであるが、濱子は勲章のことも、北清事件のこ

とも決して口にしなかったといわれる。濱子の人生は、良妻賢母として夫を助け世のため、人のために生きたのであった。

(松澤君代)

参考資料

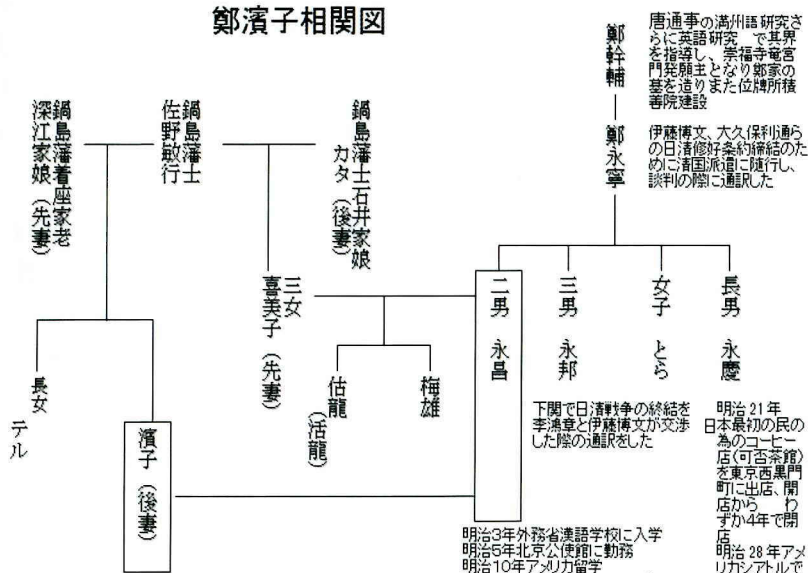
『長崎女人伝 (下)』

深瀧久

『長崎の女たち第2集』

長崎女性史研究会

鄭濱子相関図



濱子は、晩年夫永昌と共に社長夫人となっていた佐龍(長女)が住む名古屋に移り住み、静かな生活の中で生涯をおえる。昭和5年春、一家をあけて佐賀、長崎を訪れ先祖の供養をした。1年後、昭和6年11月3日永昌は77才で世界。濱子は夫の後を追うように昭和7年1月18日69才で没している。

◎ 日本初ダム式水道建設

明治中期の水事情

当時の生活用水は、寛文7年（1667）倉田次郎右衛門によって中島川上流の銭屋川に埋樋された倉田用水に依存していたが、水源が不潔なうえに施設が老朽化しており、飲料水としては、ほとんど使用できない状態にあった。

コレラの猛威

長崎は、鎖国時代から唐蘭船が来航し、海外の情報が得られ、幕末以降は多くの外国人が集まってきた。しかしそれと共に伝染病の流入も多かった。特にコレラは病原菌が発見されておらず、長崎から全国に広がって大流行した。明治を迎えるとコレラは一段と盛んになり、毎年のように流行した。当時の新聞には、毎日コレラの患者数や予防対策の記事で埋められていた。

衛生環境の改善はまず、下水溝の整備から

明治19年（1886）2月25日長崎県令（同年7月19日付で県令改め県知事となる）に任じられた日下義雄は、衛生環境の改良が急務であると考えた。手始めに市街の下水溝を整備することから着手した。

そこで、明治19年5月、市街下水幹線である6本の溝の改良（板石、瓦材で三面張りとし、天川で固める）に着手同8月に完成した。明治20年には、残る中、小溝の延長及び改良を区に命じ同年4月着手、9月末に完成した。この工事の完成によって、汚水が井戸に浸透するのを防ぎ改善された。長崎の衛生環境は著しく改善されたが生活用水の改善が大きな問題として残された。

上水道建設計画書作成へ

日下義男知事は金井俊行区長を官舎に招き話し合い、上水道建設が急務であることで二人の意見が一致、早急に実現させようと誓い合った。

一方、英国人でリンガー商会のフレデリック・リンガーは「長崎の生活用水が不潔だからコレラが流行するので早く水道を建設してほしい」と要求し、「もし、要求が通らなければ長崎に居る外国人は横浜や神戸へ総引き揚げを行う」と通告してきた。ちょうどその時期にリンガーの友人で英国人工師 J・W・ハートが長崎に立ち寄ることから、同技師に調査、設計を依頼したところ快く承諾した。ハートは明治19年7月に長崎に到着、知事の依属を受けて現地調査した結果「最適地は中島川上流、本河内郷の場所が良く、水圧も十分にとれる」との調査報告書を提出した。知事は、水道建設を思いついた時から水道技術者を探していたが県河川課牧野實技師から工部大学校(現東京大学)助教授工学士吉村長策の推薦があったので、長崎県五等技師に採用した。

吉村技師は明治19年5月に来任すると知事から水道建設設計を命じられた。彼は J・W・ハートとは別途に調査を進めたが、建設場所はハートと同じ中島川上流本河内郷が適地であり、給水に十分な水圧が得られることからこの地に決定し、計画書を作成した。

長崎区年間予算の7.5倍の事業費

吉村技師の設計予算額は30万円と見積った。だが、当時の長崎区の年間予算はわずか4万円たらずで、その7.5倍の巨費を区の予算でまかなうことは不可能で、知事は区長と協議し、私設水道会社を設立した方が実現が容易であろうと意見が一致した。しかし、資金を一般から募集することは困難であり、また日時を要すると思われとりあえずこの資金を全額政府から借受ける方針をたてた。

一方、知事は三菱炭鉱部長で長崎商工会会員でもある瓜生震を招き、水道会社の件を商工会に提案するよう要請した。瓜生はこれを承諾し直ちに水道会社の建議書を商工会会頭松田源五郎宛に提出した。建議書を受理した商工会は、臨時総会にかけて満場一致で議決された。商工会はこの議決に基づき水道会社設立請願書を知事宛提出した。

国庫補助金5万円の獲得

日下知事は、この政府融資30万円獲得するべく上京し、内務省に長崎の社会事情と水道敷設の必要を精力的に陳情した。

しかし、内務省では、市町村制の実施を目前に控え、市制施工後の新しい市で計画するべきでとして不賛成の態度を示した。知事はあきらめることなく日参し、内閣総理大臣、内務大臣に面会し水道敷設の急務を力説した。その結果30万円の融資は得られなかったが、特別に国庫補助金として5万円の獲得に成功した。明治21年礼月16日知事は区長及び水道会社発起人を招き、30万円の資本金に対して、政府補助金5万円差し引いた25万円は、民間から公募することとし、会社設立を具体的に推し進めた。

水道建設反対運動

商工会の水道会社設立が具体化すると水道問題にはわかにかに世間の関心を集め、区民の中に早くも反対を唱えるものが現れて、ついに寺町の延命寺で水道設置反対集会を開き、大いに氣勢を上げるなど、反対運動が各所に起こった。明治21年1月30日召集の長崎区会に、水道に関する議案が上程されると、反対運動の火の手は再燃した。反対する数百人が伊勢宮に集まり、水道建設絶対反対を唱えて氣勢をあげるなど、事態は不穏の様相を呈するに至った。

区会水道案を否決、修正案も空しく否決

そしていよいよ1月30日開会の臨時区会を迎えたが区長の事前説得工作にもかかわらず、水道議案は否決された。反対の理由は、市況不振のため区民が経済的に苦しんでいるのに更に水道関係の負担をすることは、二重の苦しみになるというのである。予期したこととはいえ、議会否決に金井区長は落胆した。事態の困難性を予想した区長は、前議案の賦課金額を減額し、更に区費の利子補給の件を全額削除して、4月3日の臨時区会に再提出したがまたも否決された。再度にわたる区会の否決に事態を憂慮した知事は、翌月の5月19日に区会議員を迎陽亭に招いて、水道の必要性や将来の影響など熱心に説明した。区会

議員の多くはもともと水道建設に関しては一応の理解をもっている
ので、知事の説得にたいして異議はなく、ここでやや好転のきざしがみ
えた。一方、区長は、以前から区政に協力していた区民27人を共楽亭
に招いて、水道計画推進に協力を求めたところ出席者の承諾を得た。
そこでこの27人に依頼して各町から水道委員二人を選び水道委員会を
発足させた。

各町から選出された水道委員は、6月11日から3日間にわたって委
員会を開き、水道問題を協議した。しかし、反対する委員が多く、し
かも低次元の論議ばかりで、業を煮やした区長が席を立って帰るとい
う一幕もあり、ついに折角の委員会も3回の会合だけで、何の効果も
あげず、自然解散となった。事態は白紙に戻り、水道建設の推進は暗
礁に乗り上げた。反対派は一段と力を得て、各所に集まり氣勢を上げ、
賛成派の集会が開かれるのを知ると、その参加者を道路に待ち伏せし
て、町印の提灯で威嚇するなどの行為に出た。

寝返る有力賛成派

最初は水道建設賛成派の有力者として行動していた人々が一斉に反
対を唱え始めた。これらの人々は水道の必要性を認めながらも、近く
に迫った長崎市制施行（明治22年4月）と同時に行われる第一回市議
会選挙を有利にしようとする政治的意図も含まれていたと考えられる。

これらの賛成派の有力者が反対に寝返ることは、当局と賛成派にと
って大きな打撃である。一方、反対派にとってはまさに百万の味方
を得たようなもので、これらの力を得た反対派はますます激化の一途を
たどった。

くんちも揉める賛否の対決

全区88カ町のうち54カ町が結束して「同盟町（反対派）」を結成し
て氣勢を揚げれば、一方賛成派も対抗して「連合町」を結成して結束
を固め両派の対立は日増しに激化していった。その結果、これまで、
なごやかに行われていた諏訪神社の大祭まで反対派と賛成派がいがみ

合い怪我人が出る有様であった。水道反対派の運動はますます激しくなり知事官舎に押し寄せ騒動を引き起こした。ついには「知事、区長を殺せ」とまで言い出すものまで現れ、知事官舎、区長宅には嚴重な警戒網が張られた。しかし知事は、このような険悪な情勢の中でも警察権をもって鎮圧するといった非常手段は避け、あくまで区民を平和的な手段によって説得することに努めた。

区立水道へ計画変更

知事は、その後も区長とたびたび協議を重ねて計画の推進に努めたが、依然として反対派の動きは激しくその最大の理由はやはり区民の負担が大きすぎるというものであった。そこで反対派の理由を見直してみると、公共的な事業を私立会社に経営させるのは問題であるという点があげられる。「思い切って私立会社から公共の区立水道に切り替えたほうが得策ではないか」と知事は考えた。そうすると公共事業にのみ使用できる「旧貿易五厘金」が流用ができる。この「旧貿易五厘金」の残高が6万円あるので、政府補助金5万円とあわせて11万円となり、不足金19万円を一般公募でまかなえば区民の負担も著しく軽減される。この案を区長に話したところ賛成がえられた。そこで、区長は関係者と協議し先に提出されていた水道会社設立の願書を水道会社の発起人に取り下げさせた。知事は区長、吉村技師らに区立水道予算草案を作成させた。この予算草案ができあがると、明治22年1月9日、知事は区会の議決をとり上申するよう指示した。

公営方式でやっとな可決

区長は1月21日招集した臨時区会に区立水道布設議案を上程した。再度にわたる否決の苦い経験から、開会に先だち吉村技師に内容を詳しく説明させた上で十分な質疑応答を行った等議会对策に慎重を期した結果、原案の一部に若干の修正を加えただけで翌22日に無事可決された。知事は、長崎水道建設費補助と水道布設に関する「特許条例」を内務大臣松方正義に上申した。水道建設は長崎区にとって未曾有の

大事業であるため区長は工事一切を県に委託することについて区会議員と協議し全員の賛成を得た。知事は、1月25日区長に対し水道布設に係る区会議決を認可する旨を通達した。明治22年1月26日知事は、「旧貿易五厘金」の中から6万円を水道費に流用するよう、それを管理していた貿易商組合に諮問した。これに対して貿易商組合では、1月27日西浜町精洋亭で会合を開き、協議の結果、多数をもって了承することに決定したので、翌28日、知事に通知した。

〔貿易五厘金とは〕

貿易五厘金とは、長崎の相対貿易商人らが、その貿易金高の1,000分の5を積みへ立てたもので、古くは慶長年間（1596～1614）に始まり、万延2年（1861）までの260年間続けられた。その金は、共同の費用として港内のさらえ・港湾・堤防・道路など、公共目的のために使われた。いわば開港以来、長崎独自の伝統を持った長崎住民共有の財産であった。明治になってもこの制度は残された。そして明治22年当時は、長崎貿易商組合が管理していた。このように区会の可決から1ヶ月あまりで中央省庁などの手続きが処理されたことは、知事と区長が水道建設にいかにか懸命であったかを物語っている。

日本最初の地方債

明治22年3月28日、臨時区会が招集され、水道事業費の公借金及び返還規則案が上程され、賛否の議論の中で、結局過半の賛成を得て可決されたので、即日その内容が公示された。これが日本の地方公共団体で行った最初の地方債となる。公借金の申し込みを開始すると、申込者は以外に多く、申込金額も締切日には予定の19万円をはるかに上回って、41万6,550円にも達した。

市制施行と水道

明治22年4月1日をもって、長崎区は長崎市として新たなスタートを切ることになった。そして他の一般事務とともに、水道の問題も新たに生まれる市に引き継がれることになるが水道反対派はこの機会に、

水道建設が白紙に戻るような宣伝をするので、3月31日金井区長は次のような最後の告諭をおこなった。水道事業は、規則に基づき区民が公選した代議人たる区会議員が議決したものであるから勝手に変更することはできない。

反対派が圧勝の市議選、市長も議長も反対派

明治22年4月1日市制が施行され第1回市議会議員選挙が4月21日から4月23日にかけて行われた。水道反対派、賛成派は猛烈な選挙戦を展開して、あたかも水道選挙の様相を呈した。開票の結果は賛成派12名、反対派24名が反対派圧勝に終わった。これに勢いを得た反対派は、政府に水道建設工事取消の陳情行方一方、同盟町56カ町の署名を取って水道建設取消請願書を区長あてに提出した。内容は請願書というより区長に対する詰問状ともいえる厳しいものであった。区長は、この件は既に元区会の議決を得ており、今になって取り消すことはできないと却下した。明治22年5月9日、市制施行第1回の市会が開かれ、まず議長・副議長を選出することとなったが、開会へき頭から水道反対派と賛成派が激しい舌戦を展開、次いで議長選挙に移り、27対5の大差で反対派の家永芳彦が賛成派の西道仙を破り初代議長、となった。なお、議長代理も反対派から選ばれた。更に5月18日、市長選挙が行われ賛成派が推す北原雅長が、賛成派の推す元区長金井俊行を23対9の圧倒的多数で押さえ当選した。6月8日北原雅長は初代長崎市長に就任した。市長、議長、議長代理等、市の重要ポストを水道反対派によって占められた。このような中において市役所の事務は、市制施行の際の区役所の事務をそのまま引き継いだ。水道建設工事水道建設工事は明治22年1月の区議会での決定を受け同年4月に着手された。日下知事と金井区長の会談から2年8ヶ月、吉村技師が水道工事計画書を作成してから約3年の歳月が流れていた。

工事の期間中の吉村技師の苦勞は、並大抵のものではなかった。日本で3番目の水道建設工事、西日本初の大工事である。当然として、

工事関係者は全員未経験。その指導もある上に、水道反対者への説得、用地買収交渉、工事説明、現場監督と毎日休む暇なく働いた。そのうち、本博多町の自宅と現場事務所を往復する時間さえ惜しくなり、12月頃には単身現場事務所で寝泊まりするようになった。

このように、現場もフロントも一体となって、この水道事業創設に邁進し、2年後の明治24年（1891）3月工事完成を迎えることになるのである。幾多の困難を乗り越えて完成したこの工事の経費は、総計で26万4,357円59銭6厘。当初の設計では工事費30万円と見積っていたが、労務に受刑者を使ったことなどで、3万5千円余りを減額できた（のべ人員人夫1万7,879人、受刑者1万9,000人）。受刑者たちは普通の人夫よりも収支まじめに熱心に作業に励んだので見事な工事ができた、と吉村技師も賞賛した。ときに、当時の労務賃金は人夫20銭、大工、石工、左官は30銭であったが、受刑者の日当は10銭であった。

日下知事が突然に免職

水道問題も一応の決着を見て、関係者一同工事着工の喜びから活気づいていた。ところが暮れも押し寄せた明治22年12月27日県庁に「知事非職」の電報が舞い込んだ。この非職の原因は明らかにされていないが、水道事業費の公借金募集の件で、内務省と大蔵省との間に認可の問題をめぐる紛糾が起これ、その板ばさみになったのが免官となった理由といわれている。知事は明治23年1月6日工事の完了を見ずに長崎を去った。長崎を去る前に水道工事費の足しにしてほしいと500円の寄付を申し出た。この記事が新聞に載り、市民はあらためて知事の偉大さを知った。工事完成・通水開始明治24年3月末、横浜・札幌に次いで日本で3番目の近代水道は完成した。横浜・函館とも河川取水であるから、貯水池（ダム）式では長崎が最初である。思えば明治19年秋、水道会社の設立の議が起こってから、実に5年の歳月が流れていた。その間、市民の水道建設に対する猛烈な反対運動、2度にわたる区会の否決、国庫補助金獲得、日本で最初の地方債発行問題

での日下知事の免官等これらの数々の障害を乗り越えてついに完成した。しかし、ここにいたってもなお、賛成反対派のいがみ合いは沈静化に向かうどころか、なお一層深刻の度を増していった。待望の通水開始を控え、市では盛大な通水式を挙行することを計画したがこの案は廃案になり淋しい通水式となった。なお、通水式を前にした5月9日に、水道施設の県から市への引継ぎを終えていた。

風味くさかの水道に長蛇の列

賛否両論ごうごうたる中で、水道工事は一応完成したが、これを受けとめる市民の心中は複雑で、その反応は様々であった。反対派は冷ややかな目で見えており。

水道の水を亭主が進めど
風味くさか(日下)と
家内(金井)逃げ出す

という落首が盛んに人の口にのぼった。鉄筋のコールタール臭で水道水は臭くてとても飲めたものではない、という悪評を大いに煽ったのである。市では市民が水道に慣れるのが第一と考えて、5月16日の給水開始から翌6月末までの期間を無料給水としたので、物珍しさと好奇心も手伝って共用栓には長蛇の列ができた。栓をひねると蛇口から、勢いよくしぶきをあげながら、きれいな水が出てくるのだから、反対派の市民も内心では驚きであった。

豪華な記念賞金井元区長は辞退

水道工事完成を記念し、市では知事以下の関係者に対して記念章を贈り謝意を表することを計画した。記念章は金製11.25g、直径21.2cmの円形。金色さん然たるもので、制作費が1個につき15円という超豪華品であった。これを知事のほか、市参事会・市議員等40人に贈る計画だったが、反対派議員から問題とされ、世論が騒ぎ出した。地元新聞も痛烈に非難した。結局、知事ほか8人に絞って贈呈することになった。贈呈式は8月18日市庁舎で行われた。しかし、金井元区長当日出席せず、記念章の受領も辞退した。

水道水の初手柄・初期消火に威力

明治24年5月29日午前1時ごろ、築町から出火、人家密集の場所なので大火になるとあやぶまれたが、消防隊が駆け付けて消火栓をホースにつないで放水、消化に努めたので2戸を焼失しただけで完全に鎮火した。同年7月1日の夜、今度は外浦町から出火。折からの南風にあおられて大火が心配された。一時は類焼は免れないとあきらめていた向い側の上野屋旅館（当時の市内で一流旅館）は消火栓のおかげで、軒先を焦がしただけですんだ。この旅館の主人が水道反対派の筆頭である上野弥平だったが、水道防火栓の威力を体験して、以後は水道賛成派となり、反対派の説得に努めた。

賛成派・反対派がめでたく手打ち

水道工事完成後も続く水道賛成派反対派のいがみ合いは鎮静するどころか、ますます深刻の度をふかめ、その現象は諏訪神事にも現れ、恒例のくunch踊りの交換も拒否し、踊り馬場でも、露骨に反目を示す態度に出るほどであった。一部心ある人々は大いに憂えていたが、給水開始直後の2度にわたる火災で消火栓が威力を発揮したこともあり、また、「もう出来てしもうたもんば、今更どうすんね」という気分も手伝って反対派は次第に態度を軟化させ、あるいは賛成派に転向する者も出てきた。しかし、従来の意地やメンツの問題もあって、簡単に和解とはならず、誰かがきっかけを作ってやる必要があった。

こうゆう状況の中にあって時の氏神を買って出だのが、神辺種穂という医師であった。給水開始から2年後の明治26年8月のことである。知事も市長もともに、このときを逸しては、と調停に乗り出し、これを受けた同盟町（反対派）は、9月23日に臨時総会を開いて協議した結果、51対4という絶対多数で和解することを決定した。これでこの年のくunchは、傘鋒や奉納踊を交換し、花を贈るなど、庭先回りも穏やかに行われて、5年振りの晴ればれとしたものとなり、まずはめでたし、めでたしであった。

（三ヶ島正彦）

◎ 長崎の中の会津

会津と長崎は今でも遠隔地であることに変わりはないが、幕末のころより会津藩御用達の商人であり、七百石で会津藩に召し抱えられた足立仁十郎の和人参の清国輸出によって、長崎と会津は深いつながりがあった。明治になっても、そのつながりはより深いものがあった。

明治のある時期に「長崎の中の会津」とでもいうべき会津藩出身者たちの集団があった。それは8代県令の名称変更で初代県知事・日下義雄、初代長崎市長・北原雅長の二人が共に旧会津藩士であり、二人の在任期間は6カ月ほど重なっており、一時期に同じ会津人が知事と市長を務めているのである。孫文ゆかりの鈴木天眼は二本松藩出身で会津藩ではないが、かねてより経済面で援助を仰いでいた日下を頼って長崎入りしたものと思われる。北原の実弟・巖之助も官吏として長崎に居り、当時の西彼戸町村より妻・幾エを迎えている。天眼と同じく孫文ゆかりの西郷四郎も北原を頼り来崎しており、巖之助の四男・孝之を養子に迎えている。



北原雅長（長崎市蔵）



浜松市西来院の墓所



人参御用の荷札（玉林寺蔵）

北原雅長（1842～1913）は、幕末に坂本龍馬が会いに行った神保修理の実弟である。会津藩家老・神保内蔵之助の次男に生まれ、北原家の養子となり、当時は北原半助といった。兄の陰に隠れ目立ったエピソード

ソードはないが京都で藩主・松平容保の側近として機密事項を担当。

戊辰戦争では、母成峠の戦いで幕臣・大鳥圭介らの隊で参謀を務めたのち、藩主のもとで籠城戦を指揮し降伏するまで戦った。藩主の身代わりの戦犯としての責任をとり切腹させられた萱野権兵衛の最後に立会い、兄・神保修理と同じ東京・芝の興禅寺に遺骸を埋葬した。弟・巖之助は戊辰戦争後、小倉・小笠原藩へ留学していた権兵衛の子・郡長正の最後に立ち会うなど、北原兄弟は萱野親子の最後を看取っている。その後、東京に監禁された北原は釈放されると工部省を皮切りに秋田県権大属、長崎県少書記官、対馬島司を歴任。明治22年の市町村制施行選挙において、水道建設反対派の擁立した候補として立候補し、賛成派の前区長・金井俊行を破り当選し、初代長崎市長となる。任命後は賛成派の金井や日下知事が進めてきた水道事業を引き継ぎ、反対ではなく二分した長崎市の融和に努める。近代的上水道として横浜・函館につぐ日本で3番目の本河内水源地を完成させた。工事の一部に貿易五厘金が使用され、6万640円が水道建設に投入されたので「五厘金の碑」が本河内水源地の方角に向かって建てられていたが、現在は移転している。碑文には北原市長の銘が刻まれている。木造二階建て本館と平屋建て別館を併せた市庁舎の新築や県内初の公共図書館「長崎文庫」や小学校令に伴い小学校の統廃合など、公共施設の充実に力を注ぎ、県とのパイプを通じ、竹の久保の県立避病院を長期無償で借り受けて市避病院として運営した。現在の長崎市立成人病センターである。また、第一期港湾改良工事を完成させるなど自治体としての基礎固めを行った。その後、上京し下谷区長などを務め、辞任後は仙台に移り、晩年は幼年唱歌「桃太郎」「春の野」の作詞で知られる娘婿・田辺友三郎のいた浜松市で歌人として「歌仏庵」と称する居を構え余生を送った。明治37年4月に文久2年(1862)の会津藩主・松平容保の京都守護職就任から、明治元年(1868)会津鶴ヶ城開城後の会津処分までの七年間の会津藩の動静を正確に記述し、それまでは薩摩・長

州などの勝者側のみから描かれた維新史を、初めて敗者の側から捉えた『七年史』を刊行した。この中で孝明天皇から極秘に賜った御宸翰の内容を初めて公表し、朝廷が会津藩をいかに信頼していたかの証しの勅書の存在を明らかにした。この件で不敬罪となり拘留される。『七年史』を編纂した時に詠んだ歌として「夢とのみ思いすてたるいにしえをうつつにかくそ悲しかりける」が残されており、忘れようと努めた事件を改めて見つめ直した、当時の北原のせつない思いが強く表れている。辞世の歌は「人の世を離れてすめる月影にさそわれていく西の山の端」墓所は徳川家康の正室・築山殿の廟所がある浜松市の曹洞宗高松山西来院にある。



日下義雄夫妻の墓所（東京谷中霊園）



足立仁十郎肖像画（玉林寺蔵）

日下義雄（1851～1923）は第8代県令、名称変更で初代長崎県知事である。会津藩侍医の石田龍玄の長男として生まれ、名は伍助。飯盛山で自刃した白虎隊士・石田和助の実兄である。藩校・日新館で学び、鳥羽伏見の戦いに従軍、会津戦争では大鳥圭介らと行動を共にし、落城前に会津を脱出し箱館戦争に加わり捕虜となる。東京謹慎時に石田義雄と名乗り、のちに赦免され会津出身を隠すために日下義雄と改名。

日下義雄と改名したのは長州藩・井上馨の書生をしていた時代といわれる。明治3年に長崎を訪れ足立仁十郎（当時は監物）を頼るが、当時の足立は井上馨の恫喝まがいの上納金を納めるために四苦八苦中で、力になれぬと同郷の医学游学生・小松済治を紹介する。小松の口利きで井上馨の書生となり大阪英語学校に入学する。井上に才能を認

められた日下は岩倉欧米使節団に同行しアメリカに留学し、その後はヨーロッパを視察、ロンドンで経済学を研究。帰国後は行政整理と登記法の専門家として認められ、井上の引きもあって内務権大書記官、農商務大書記官省、統計課長などを歴任。小松の仲人で可明子と結婚し、明治19年、第8代県令として赴任し、同年7月に名称変更で長崎県初代県知事となる。最年少の県知事である。「日下義雄傳」によると日下の一生涯で、この4年間で最も華々しく活躍した時代だったと書かれている。清国水兵暴動事件の談判委員となり解決。長崎港の整備や日本で3番目の近代的水道の創設や下水道の完備など公衆衛生に貢献した。中島川の上流の中川郷に吉野桜数千本を植えて夜桜の名所にした。かの名勝地中川カルルスである。また、保健衛生上の観点から長崎市および、その周辺の土葬を禁止し火葬場を作り、稲佐に製氷所を設立した。この製氷所の設立には可明子夫人の死という悲話がある。他に女神の検疫所、竹の久保に避病院を設置。上水道建設に当たっては港・長崎の発展と住民の健康を守るためには近代的上水道の建設が緊急方策であるとの見地から水道建設に日夜努力し工事費捻出のために政府に強力に働きかけた。その甲斐あって、日本初の国庫補助金を獲得する。奇しくも同時期に行われた長崎市長選挙では水道反対派の推す北原が当選する。しかし、前区長・金井らと根気強く説得にあたり水道建設に尽力するが、公債発行の件で内務省と大蔵省の板挟みとなり、藩閥政治による対立に巻き込まれ、明治22年、上水道の完成を待つことなく罷免となり、後を北原市長に託して長崎を去る。後に福島県出身者で初の福島県知事に就任。その後、海外経験をかわれて弁理大使となり、第一銀行など民間の役員を歴任。衆議院議員に2度当選。

彼らを中心に、足立仁十郎の会津藩への融資の物語を綴った「酒飲んで金借りる話」の『志ぐれ草紙』の筆者・小川渉も旧制長崎中学（現在の東・西高）の一等教諭として、新撰組三番隊隊長の斎藤一の

義弟・高木盛之輔も長崎裁判所検事正として来崎している。「長崎の中の会津」は確かに存在したのである。会津とは縁の深い松平容保の実弟・松平定敬の桑名藩の旧藩士・山脇正勝（料理評論家・バーバラ寺岡女史の曾祖父）は三菱長崎造船所の初代所長（当時は支配人）であり、箱館新撰組・大河内太郎の変名で日下と共に箱館で戦った同志である。会津と桑名の旧藩士が同時期に長崎の政財界で活躍していたことを思うと、会った時の会話がどのようなものであったか興味をそそられる。また、岩崎弥太郎は会津の船乗りたちを多数雇っている。明治8年9月、国策海運会社「日本国郵便蒸気船会社」を吸収して三菱汽船会社から「郵便汽船三菱会社」と改称し、この吸収合併によって岩崎弥太郎と旧会津藩子弟船乗りとの出会いが始まる。山脇が旧会津藩出身の船乗りたちと岩崎弥太郎との出会いを手助けしたことなど容易に想像できる。三菱商船学校の1期生（明治9年1月入校）で後に「雷鳴轟く」と謳われた日本郵船船長の郡寛四郎は大正2年、信濃丸・船長の時に辛亥革命に敗れて下野した孫文の日本亡命を手助けしている。郡は会津戦争で藩主の代わりに戦争責任を負い切腹し、北原が兄の神保修理と同じ寺に埋葬した萱野権兵衛の三男である。戊辰戦争から約20年の時を経て長崎において各人の胸中はいかばかりであったろうか。明治20年代前後に「長崎の中の会津」は確かに存在したのである。それは、長崎と会津をつなぐ絆となった会津藩の陰の恩人・足立の仁十郎の残してくれた賜物であると思いたいであり、そう信じたい。「賊には非ず、義は我にあり」「義に死すとも、不義に生きず」「ならぬものはならぬ」の会津士魂は、明治の長崎で北原兄弟、日下、西郷、小川、高木たちによって力強く息づいていたのである。（工藤新一）

参考文献 『会津藩士銘々伝』『日下義雄傳』『会津若松市史』『史伝・西郷四郎』『岩崎弥太郎を支えた「朝敵」会津の船乗りたち』（取材協力）兵庫県朝来市「玉林寺」「会津市史編纂室」「長崎県・長崎市広報広聴課」「白虎隊の会」

◎ 安中半三郎

長崎文庫の創設・長崎盲啞学校の設立に尽力

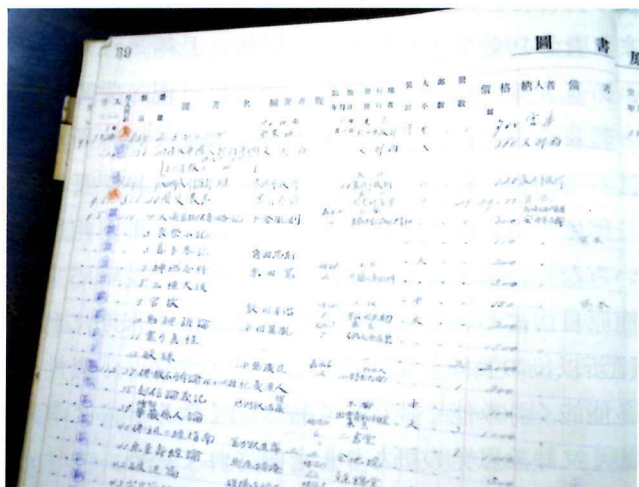
安中家の墓誌によれば、安中半三郎の祖父は、武州青梅（東京都青梅市）の人で、安永年間に長崎に来住した。父為俊はその第五子であった。為俊の母は万屋氏で、為俊は文政3年（1820）引地町（現・桜町）に生まれた。19歳で江戸に出て、以後、長崎・江戸間を頻繁に往来したが、万延元年（1860）帰崎し、酒屋町（現・栄町）で書籍・新聞・文具・雑貨商を営んだ。半三郎の母蝶は越後国（新潟県）の出身で19歳で江戸で為俊に嫁ぎ、五男一女を生み、34歳で長崎で没した。

安中半三郎は、嘉永6年（1853）11月29日江戸神田相生町に生まれた。諱（いみな）は東来。6歳の時、父に従って長崎に来住した。長川東州・池原日南について和漢学を学んだ。大正末期に刊行された著書『明治維新以後の長崎』に、そのひととなり、『資性剛健潤達にして多芸多能能く詠み能く談じ能く書き能く飲み酔ふて耳熟すれば詞藻湧くが如く又談論風発の概あり』と記されている。

住まいは酒屋町にあつて、その地で父からの家業である書籍・文具・新聞・雑貨等の商売を営んだ。「虎与号」の屋号がつけられていた。時には出版活動も行っていたようで、香月勲平著の『長崎地名考』（明治26年刊）は、安中書店の発行となっている。住まいの位置は、大正時代のマップによると、孫文が大正2年（1913）来崎した時に留学生に対して有名な演説を行った基督教青年会館に隣接していた。

北原雅長市長時代の明治22年（1889）から28年（1895）にかけて市会議員を務め、水道建設問題、九州鉄道長崎線敷設問題等に関わった。また、明治30年（1897）から35年（1902）にかけて、市の執行機関としての名誉職である参事会員（市会で選出）として、港湾改良工事問題等に関わった。長崎商工会議所の前身である長崎商業会議所の設立

にも発起人の一人として創立準備の段階から深く関わった。明治27年（1894）の商業会議所議員選挙から大正2年（1913）まで、約20年にわたって、商業会議所議員を務めた。その間、明治28～31年（1895～98）、明治34～36年（1901～03）、明治38～42年（1905～09）の三度にわたり、商業会議所の副会頭の要職を務め、松田源五郎、岩田清秋、永見寛二等歴代会頭をよく補佐した。



県立長崎図書館受入台帳 長崎文庫の寄贈記載

明治27年（1894）5月2日公共図書館の先駆ともいべき長崎文庫が長崎市新橋町（現・市立中央保育所所在地）で発足した。この長崎文庫は、明治30年（1897）に引地町に、その後長崎商品陳列所内（現・日本銀行長崎支店）に移転、明治45年（1912）に発足した県立長崎図書館に引き継がれた。大正4年（1915）に県立長崎図書館が移築され、その際立派な表紙の受け入れ台帳が作成されていて現存している。私は、以前県立長崎図書館に勤務していた関係で、その事を知っていたので、その台帳を閲覧させて頂いた。大正5年（1916）9月5日の日付の欄に長崎文庫（代表者安中半三郎）から県立長崎図書館への寄

贈本の一覧が10ページにわたり列挙されていた。項目にして342項目、冊数にして約400冊が記されている。ちなみにそれらの寄贈本の最初に記されている本は『天満宮御伝略記』で、編著者が戸倉胤則、出版年が嘉永4年（1851）、発行地・発行年が京都・勝村治右衛門である。また、明治27年～28年（1894～95）にかけて長崎古文書刊行会により刊行された『長崎叢書』は、西道仙とともに安中半三郎が校閲者として名前を連ねている。この叢書は『長崎港草』、『長崎夜話草』等の近世長崎史の基本的文献を収録したものである。

明治24年（1891）に愛知・岐阜県を中心とした震災が起きたときは、いち早く新大工町の舞鶴座において慈善音楽幻燈会を開き、金品を募り、被災者の支援を行った。明治26年（1893）には長崎慈善会が設立され、その発起人総代となり、会の事務所は安中宅に置かれた。長崎慈善会の活動の一環として、明治31年（1898）長崎盲啞院（私立）を設立した。盲啞学校としては全国で3番目に古く、しかも、先駆けた京都・東京の官立の盲啞学校と違って、安中半三郎を始めとする民間人の手により私立として設立されたことも特筆すべきことであった。当初、長崎市興善町の野村惣四郎宅の一部を仮校舎としたが、生徒数の増加により、同町の民家を借りて移り、名称も長崎盲啞学校と改称された。アメリカ人で電話の発明家グラハム・ベルは、ろう学校の教師でもあったが、明治31年（1898）に長崎盲啞学校を訪れている。明治41年（1908）には長崎市桜馬場に新校舎が建築された。半三郎は、大正4年（1915）11月、多年慈善事業に尽くした功績により、長崎県知事李家隆介より木杯一組を賜り、表彰された。長崎盲啞学校は、大正13年（1924）に盲学校と聾啞学校に分かれ、両校は昭和4年（1929）に県立に移管された。

半三郎は、狂句狂歌も嗜み、「素平連」（すべれん）という趣味の会を主宰して、『類題酔狂句集』を明治17年（1884）に出版した。その中から二句紹介する。（題 梅雨）「から梅雨に 農家涙の 雨ふらせ」



安中翁記念碑

(題 精霊舟)「極楽は おろ
か波止場で 沈没し」諏訪公
園の月見茶屋の近くには、判
読しにくくなっているが、
東来の諱で35首を詠んだ歌碑
が建立されている。その冒頭
と末尾の二首を次に示す。「千
金の 値の花も おしげなく
一輪つつを ちらす春風」「久
堅の 天にもやがて とどく
なり 動かぬ富士の 大和だ
ましひ」

半三郎は、大正10年(1921)
4月19日に69歳で亡くなった。
墓碑は、本蓮寺境内にあるが、
葬儀は神葬として執り行われた。

「酒飲めば 浮世をよそに 捨小舟 ただよふてこそ たのしかりけ
れ」という辞世の句を残している。翌年11月11日、慈善会の三十周年、
盲啞学校の二十五周年を記念して盲啞学校の校庭に「安中翁記念碑」
が建てられた。現在も移転した長崎県立盲学校(時津町西時津郷)の
玄関前に、この記念碑も移築されている。先日、盲学校を訪れたが、
校長室には歴代22代の校長先生の肖像写真の先頭に、「本校創立者」
として、ひときわ大きく安中半三郎の写真が掲げられていた。

妻は治宇といい、樺島種美の長女。安政3年(1860)築町に生まれ、
18歳で半三郎の妻になり、70歳で亡くなった。後継者の長男生逸は
台場町(現・大黒町)に住んで新聞販売・煙草商を営みつつ、慈善事
業にも携わっていたが、戦争末期の強制疎開と原爆で家財を失い、昭
和34年83歳で没した。

安中半三郎は、長崎の政治・経済界のリーダーとしての活躍に加えて、文化事業や社会福祉事業の先駆者としても活躍した。先見性を持ちつつ、その才能を公私見事なバランスで開花させた稀有な人物であった。

(日宇孝良)



県立盲学校校長室 右端が安中半三郎



安中半三郎夫妻の墓碑

参考文献

- ・ 安中半三郎—明治の長崎人(『ら・めーる』第37号～40号)
宮川雅一 平成10年～12年
- ・ 『明治維新以後の長崎』長崎市小学校職員会 名著出版
昭和48年復刻(大正14年刊)
- ・ 『長崎県立盲学校100年のあゆみ』長崎県立盲学校 平成10年

● 陳平順(ちんへいじゅん)

"ちゃんぽんの生みの親"

ちゃんぽんは、今や長崎だけのものではなく、日本中に広まり有名になり「長崎ちゃんぽん」という単一の料理名で看板があげられる時代になっています。ちゃんぽんの考案者は、明治32年(1899) 広馬場に「四海樓」を創業した陳平順である。店名とした「四海」とは、“四方の海に波が立たず静かである”ということから“天下がよく治まって泰天なこと”また“国の内外が、平和なこと”を表わしていること、樓は中国語で二階建て以上の建物のこといわれている。

陳平順は、明治12年(1879) 4月19日に中国の福建省の東部沿岸にある福清県で生まれた。父は陳諸騰(国鵬)(ちんしょとう)。母顧(こ)氏。当時福清県は、耕作できる平地が少なく、しかも干ばつ被害など、頻繁に起き作物はサツマイモや落花生ぐらいしか栽培できず、福建省の中でも最も貧しい地域であった。このような地域であるので国鵬の家も貧困で貧しく子どもを養うのも困難であった。そこで生まれたばかりの平順は、国鵬の叔父で息子がいながった道隆に養子として預けられ、家のために一生懸命畑仕事に働いたが、相変らずの痩せた土地と干ばつで、わずかな農作物がとれる程度で生計が立てられないほど貧しい暮らしが続いていた。働いても働いても貧困から脱け出せない厳しい現実のなかで、平順は家族の負担を減らすために自分から家を出て外で働くことを考えた。すなわち外国である。平順は19才になっていた。以前から、宣教師から聞いていた外界世界に関心があったし、外国で活躍する先達の成功した話も聞いていたと思われる。青年らしい冒険心も手伝って平順は国を出ることを決めたのであった。行き先は日本の長崎。明治25年(1892) 長崎に上陸した。しかし当時は、渡航してきた中国人はすぐに上陸できるわけではなく、厳しい制限



があった。まず上陸には身元を保証してくれる人か必要だった。

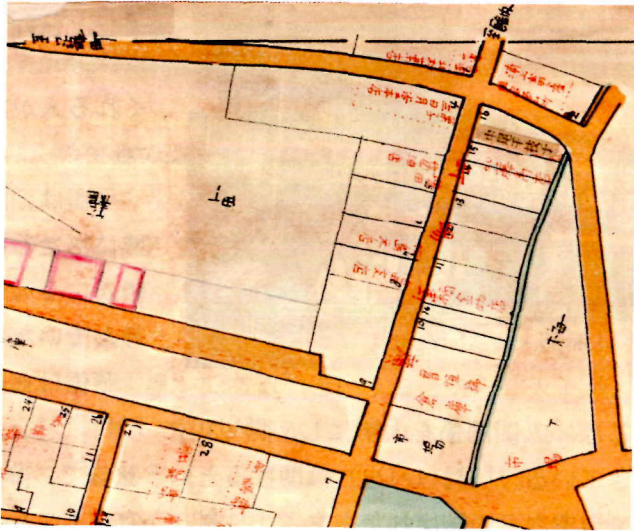
平順は、陳家の親戚にあたる益隆号の張氏に身元保証人を頼んでいた。

華僑は血縁、地縁

につながる深い人間関係を大切にし、世界中に「幫」（パン）という組織ができています。「幫」（パン）は助けるという意味で、華僑社会には出身地や職業などで結ばれたさまざま「幫」が存在しています。益隆号の張氏は、福建省出身で貿易を営んでいた。張氏は五人兄弟で張氏の五隆号と称されていた。五隆号は、益隆号・徳隆号・盛隆号・振隆号・茂隆号である。

益隆号を頼って海を渡ってきた平順であったが、当時の長崎では多い華僑の仕事であった“三刀の仕事”しかできなかった。三刀とは、料理（包丁）、理髪（剃刀）、裁縫（鋏）のことであり、料理店、理髪店、洋裁店の職業にたずさわる者が多かった。しかし、平順は益隆号から資金を借り反物の行商を始めた。反物をリヤカーに積んで大浦地区から遠く島原までの行商を7年間一生懸命に働いた。

先きに述べた明治32年（1899）平順は、広馬場に「四海樓」を開業した、当初建物は広東会館所有のものを借り受けていたが、やがて店舗の拡張とともに払い下げを受けた。当時の写真を見ると、大きな看板には横書きで「官許 大清国四海樓御旅館茶園酒館時點雅菜各国料理」と「四海樓清国御料理并御旅館」という文字があり、その横看板を照らすために、二階のベランダに二つの丸い電灯が設置されている。平順26才、華僑の意地と誇りを持って開いた渾身の店である。



明治35年（1902）平順は、青田家に奉公していた柴田ミツノと出会い、二人は結婚したのである。二人には2男3女の子に恵まれた。長女の玉姫、次女の清姫、三女の秀姫（二歳のとき病死）、長男の揚俊、次男の揚春である。当時の長崎に住んでいた華僑の生活は楽でなく、また留学生の暮らしはもっとひどいものであった。空腹の辛さを知っている平順は、華僑・留学生の人々にボリュームがあって、しかも安く、おいしい料理が提供できないかと考え、福建の郷土料理である「湯肉絲麵」をもとにして中国人向けの「支那饅飩」にひと工夫を凝らした。具材には長崎近海の魚介類、長崎もやし、辻田白菜、麵には唐灰汁（とうあく）を入れ、スープは鶏ガラと豚骨を入れ白濁し、コクのある深い味、長崎で生まれた「ちゃんぽん」をつくりあげたのである。この「ちゃんぽん」は、日本人の嗜好にあい、九州を始め次第に全国に広まっていったのである。

ちゃんぽんが商品として定着した頃、平順と次女の清姫とのあいだに次のような会話ががあった。「父さん、ちゃんぽんを四海楼のものとして特許をとったほうがいいんじゃないですか」と清姫が進言すると

父は耳を貸そうともしなかった。「いやいや、四海楼のお客さんが喜んでくれるには嬉しいが、華僑だけじゃなく日本中の人ที่ちゃんぽんをおいしく食べてくれたら、そのほうが嬉しいよ」と平順は特許申請をあっさり否定したのであった。そのとき、もし平順が娘清姫の意見通り、特許をとっていたとしたら、おそらく「ちゃんぽん」「皿うどん」は今日の繁盛を見ることはなかったのではないかと思われる。陳平順が長崎・日本の食文化に貢献した功績は大きいものがある。

大正2年(1913)「中国革命の父」孫文が長崎を公式訪問されたとき、華僑も孫文と深いかかわりがあったので、華僑主催の歓迎午餐会が福建会館で開催された。その時の料理は四海楼が担当した。平順は孫文来崎記念写真に写っていない。それは、四海楼の料理場で腕によりをかけて、孫文への料理をつくっていたからと思われる。孫文も四海楼の料理を味わったと思われる。

陳平順は、昭和14年(1939)67才の生涯を閉じた。平順は、華僑の生き方、「落地生根」を選び二度と故郷に戻ることなく、互いに助け合いながら長崎の地にしっかりと根をおろしたのである。日清戦争・満州事変・日中戦争と祖国との戦いの狭間に生きてきた華僑であり、もともと存在の大きい人を失ったのである。

陳平順が創業した四海楼は、二代目当主の揚俊、揚春兄弟、三代目当主の名治、四代目当主の優継と子孫が大切に守り続けている。

明治48年(1913)には、広馬場から松ヶ枝に移転拡大し、新しい四海楼として発展している。
(中島吉盛・松尾貞雄)

参考資料

ちゃんぽんと長崎華僑	陳 優継
四海楼物語	深淵 久
素麺の中華街	王 継
長崎人(季行)1997.7 VOL15	長崎人文社

栗原玉葉(くりはら ぎょくよう)

本名、栗原文子（あやこ）。大正ロマン日本画壇の花形美人画家。

玉葉は、明治16年（1883）4月19日に、長崎県南高来郡山田村馬場（現在の雲仙市吾妻町）に生まれた。父は酒造業を営む栗原宰（つかさ）、母はクマ、長兄破魔壽（はまじゅ）、次兄貞男、続いて源治、吉郎の兄がおり、玉葉は末子で唯一人の女子であった。

玉葉の実家は神道であったが、明治28年の春に、長崎の兄のもとから、長崎県尋常師範学校付属小学校（現、桜馬場中学校の地にあった）に通った。明治34年、長崎市東山手にあったミッションスクール梅香崎女学校に入学した。同39年に卒業後上京し、女子美術学校（現、女子美術大学）へ入学した。

梅香崎女学校在学中には、商工奨励館で開かれた「長崎美術展覧会」に「桜」を発表して、大久保玉珉らからその才能を認められ、絵画の道へ進むよう励ましを受ける。

特筆すべきは、美術学校在学中に、母校（梅香崎女学校）の教諭カウチ女史が、玉葉に学資の援助をしたことである。玉葉は、小学校の頃に父を亡くし、梅香崎女学校在学中には、自宅近くにあった寺の火事の類焼で家を失った。才能があり、勤勉で誰にも平等に優しく接する玉葉に対しての、カウチ女史の気持ちが表れたエピソードである。

玉葉は苦学したが、学業は優秀な成績で、その才能と人格は同窓生の尊敬の的となり、先輩諸先生の信望も得て、明治43年の春に同校を卒業した。その頃、長崎の母を東京に呼び同居をはじめ、寺崎廣業画伯に入門、研究を重ねるかたわら、母校（女子美術）で教鞭をとった。玉葉は、梅香崎女学校在学中に、梅香崎教会の瀬川牧師から洗礼を受け、熱心なキリスト教徒となっていた。

生活が苦しかった玉葉は、学費の足しにとライオン歯磨工場夜間徒

弟学校や、日曜学校幼稚科の教壇に立った。その時の経験が、子どもを描くのに役立っている。

大正2年、第7回「文展」に、幼くして郷里を出た思い出の作「さすらい」が入選した。また翌年は、「幼などち」「噂のぬし」の二作が続けて入選となるなど、玉葉の作品は世間の注目をあびた。

こうして、玉葉の作品が世の中に認められるようになった矢先の大正4年1月、玉葉の最愛の母が、病で亡くなった。

玉葉は、亡き母への想いを胸に同年4月帰郷した折、長崎に立ち寄っている。苦楽をともにし、様々な障害を母とともに乗り越えてきた玉葉は、その年の「文展」に、母を恋しと「お鶴」を描いて入選した。また、大正6年の第11回「文展」には、カトリックの尼僧を描いた「朝妻櫻」を出品し入選した。引き続き翌8年の2月には、恩師寺崎廣業を失った悲しみを乗り越えて、「葛の葉」を「平和博」に出品。また、第3回「帝展」に出品した「清姫物語」は、特別に選ばれて仏国サロンへの出品の光栄を賜った。玉葉が描く画は、観る人に純粹無垢で清らかな印象を与える。玉葉は精進し、画道一筋に生涯を捧げたが、大正11年（1922）9月9日、病気のため、39才の若さでこの世を去った。玉葉の絶筆となった「天国へ」を彫記した墓碑が、玉葉塾銀葉會の建碑にて東京谷中墓地にある。

※梅香崎女学校は、ヘンリー・スタウト夫人が自宅で始めた英学校が母体であり、紆余曲折の末に明治20年9月、「スタージス・セナリオ」という名称で発足し、明治22年に改称した。その後、大正3年4月からは「光城女学院」と合併し、下関に「梅光女学院」（現、梅光学院）として移転した。なお、跡地と校舎は裏手の高台にあった「活水女学校」（現、活水学院）が受け継いだそうである。

（石橋義孝・石橋久美子）

参考文献

- | | | |
|-------------|-----------|-------|
| 『長崎の女たち』 | 長崎女性史研究会編 | 長崎文献社 |
| 『長崎談叢第十八輯』 | 長崎史談会編 | 長崎史談会 |
| 『梅光女学院50年史』 | 梅光学院 | |

◎ 北原白秋

近代日本の詩聖、北原白秋は長崎を2回訪れている。1回目は早稲田大学生であった明治40年8月7日万才町の上野屋に1泊し、5名の詩人、歌人が九州各地に遊んだ旅。紀行文「五足の靴」で有名だ。

そして2回目は昭和10年5月22日、三菱長崎造船所の所歌・岡政の店歌を作るため招かれた。白秋の長崎滞在は6日間、その間、宿は大浦町平野屋、榎津町西川屋旅館、万才町深江氏宅と変わった。

白秋の長崎での足跡は大浦、三菱造船所、長崎図書館、諏訪公園、唐八景、伊王島、浦上天主堂、女神検疫所、迎陽亭、料亭菊本、精洋亭、材木町山口家などで、この章では2回目に来崎した足跡を追うことにした。「島内八郎めもあーる」を基に、特に白秋の最後発表となった伊王島の歌や三菱重工長崎造船所所歌を中心にエピソードなど記したい。白秋は昭和10年5月22日午前9時50分、神戸からの日華連絡船「長崎丸」で出島岸壁に到着した。三菱関係者の他に、郷土史家古賀十二郎、増田廉吉県立図書館長、島内八郎司書、長崎史談会、長崎文芸協会、多磨会員、それに白秋の甥で三菱兵器工場に勤める佐藤加賀生など多くの人々が埠頭に出迎えた。

当時の「長崎日日新聞」（5月22日夕刊）はこの時の光景を次のように報じている。オールバックの髪、太い眉、精力的な幅ったい赫（かく）顔に大きなロイド眼鏡、見るからに瀟洒（しょうしゃ）な服を着込んだ氏は好個の紳士だが、船中どこでやったか聊（いささ）か酒薫を帯びてご機嫌の態だ。良い男に撮ってくれ、白秋は色が白くて美男子だってサアハ・・・と笑って快くカメラに収まった。何しろ長崎はどこにいたって懐かしい香のする所だヨ。例の吉井勇君とは帽子を隠し



長崎県立図書館所蔵

て丸山あたりをブラブラ歩いたものだ。まだ、三菱造船所内は見えていないから、どんな歌が出来るか分かったもんじゃ無い、二三日滞在して雲仙へ登山する心算だ、まあ一つ巧い所を書いといて呉れ給へ。

押しかけた沢山の人に愉快地遊ばせて貰いに来ました。と挨拶し、門下生と一緒に大浦の平野屋旅館（現在の孔子廟の裏手、オランダ坂の入り口付近）に着き一服した。さしまわしのランチで三菱造船所を見学。この頃、造船界は「創業100年の長崎造船所」によれば、満州事変の勃発により、造船業界は不況のどん底から一転、船腹の増強、優秀船の建造で活気に満ちていた。立神船台で油槽船建造現場を案内した北岡伸夫氏は、“昼食を早目に占勝閣ですませて頂き、お供した。何様、小柄ながら足が速く、船底の支え盤木が無数に立ち並ぶ所へ、潜り込まれ一向にお出ましにならない。君！君！船底は平面だよ！大発見だと、夢中に両手で撫で回って船底から出ようとしな。余程の感激であり興奮であった…”（「あすなろ」45号昭和59年）また、こ



長崎造船所

の時当所幹部に「裃を着たような所歌は、末永く歌われることはないので、三味線にあわせて歌うような酒宴向きの所歌を作りましょうか」と提案したところ断られた、と言って

大笑していたそうです。（「長船よもやま話」平成19年6月）

帰京後、想を練ること数ヶ月にして所歌は完成、白秋時に51才であった。その後、山田耕筰の作曲を得て発表された。その歌詞は

- 1 海に噴き立つ積雲の 際涯（はたて）に遠く我呼ばん
皇道光高うして 時代は俟（ま）てりこの腕（かいな）
あげよ響を鏘々（そうそう）と 造船の業（わざ）ここにあり。

この歌詞の1番第3節「皇道光高うして」は終戦後戦時色のある字句は使用禁止となったため、白秋のご遺族の了解を得て昭和21年に「平和の光高うして」に改訂された。（長船よもやま話）



岡政・政どん

ちなみに、岡政デパート（前身は異国交易商「徳島屋」
として安政元年（1854）の創業その後岡政呉服店となり、
昭和9年（1934）長崎初の百貨店となる。昭和63年秋
から長崎大丸となり、平成23年7月廃業となる）の店
歌も白秋が昭和15年9月28日作詞したもの。

- 1 風にかがやく屋上旗 空あり見よやこのヲ・（かねヲ）
海港潮（うしお）あざやかに 日に日に栄もたらせば
時代の文化さきがけて 長崎今に人新（あら）た
柳に添えよ市（いち）の幸（さち） 商業報国我れ往（ゆ）かん

平成23年7月長崎大丸の廃業を前にこの店歌を「長崎新聞」は、1
番はリズムある流麗な詞から、美しい長崎の風景と活気に満ちた商店
街が目に見えかけてくる。戦争開始が翌年という時代状況を反映して、
全体に、勇ましい歌を心掛けた印象がある。それでも3番は白秋らしい
浪漫主義があふれる。まぎれもなく詩人、白秋の見事な作品である。

「商業報国」と言う言葉を戦後は「商業奉仕」に変えて、歌い継いで
きた。長崎の発展を願う白秋の熱い思いは時代を超えて長崎の人々を
励ましてきた。白秋の長崎へのエールに耳を澄ましながらか、「風にか
がやく旗」を守って前へ進み続けたいと。

三菱長崎造船見学後、三菱招宴の迎陽亭（上筑後町現玉園町の聖福
寺前に遺構が残る）で「多磨」の創刊号見本が到着。その第一ページ
に白秋は迎陽亭の愛娘杉山武良子（むらこ）さんの顔をペン書きで写
生、以下の数枚に創刊号掲載予定の自作歌「白昼牡丹苑」の一連を書
いたうえ、推稿のペンまで入れて武良子さんに贈呈した。

迎陽亭での歓迎宴で白秋お得意のかくし芸「線香花火」を出した。
これは自身が線香花火になりすまして突っ立っていると、後に立っ
ている人が、シュッと行って、マッチで頭に点火した真似をする。す
ると白秋花火は俄然活躍をはじめ、まず両手を脇の下から上方へシュツ、
シュツとゆるやかに出し、漸次早くなり、極度に激しくなり、次には

次第に元のゆるやかさに返り、結局両手で頭を抱いてごろりと倒れる。両手をシュッ、シュッと出すのは無論、火花の擬態であり、最後に頭を両手で抱え込んで倒れるのは線香花火の火の塊りが落ちるさまである。5月23日三菱兵器工場見学後、話に聞いていた料亭「菊本」（本古川町（現在の古川橋から伸通り入り口付近）で長崎市内有志招待歓迎会に臨んだ。そこで、芥川の河童屏風を見て、屏風付属の芳名録に一首毛筆で書いた。

春はまだつのがむ葦の間より あらはれいづる親の河童子河童
白秋

夜オール三菱のために講演。引き続き今町（現金屋町）の社宅（現在のKTNテレビの建物の所）にて三菱歌人等相寄って歓迎会の席上、またまた船底が平面説を言う。（「あすなる」45号）

5月24日、三菱でのすべての仕事を終えた白秋は全くフリーの身、この日は「地上巡礼」時代の門下生だった松本松五郎と会った。長崎市内見学、夜7時より西浜町精洋亭で長崎文芸協会主催 北原白秋座談会出席（会費50銭）。



馬込教会



園通寺

5月25日、税関の警務担当で俳人松尾丈大氏の案内で伊王島へ。税関の汽艇で沖ノ島馬込の小波止に上陸した。馬込教会では松岡神父さんたちの厚いもてなしを受け、十何世紀頃のシロモノとか云う葡萄酒を幾瓶も振舞って貰った。沖ノ島部落から船津部落に行き、狭い道を登り、俊寛の古文献があるという円通寺に詣でた際、近くの路上に四・五才の男の子が仰向いたまま大の字になって眠っていた。それから、長崎警護の円通寺庵台場跡を通り、俊寛碑のある丘の上に行った。その後7年



馬込の小波止場



大明寺教会

を過ぎ、この光景をふくむ伊王島一連の長歌が白秋最後の作となった。その長歌と反歌が発表されたのは、昭和17年10月号の「多磨」であり、翌月2日に白秋は世を去った。58歳で一代の詩業の幕を閉じたのである。この伊王島は、長崎港から西方に10キロ、高速船で20分、やすらぎのリゾートアイランドとして昨年3月香焼から大橋で繋がった。沖ノ島教会、円通寺、俊寛僧都の墓碑、北原白秋歌碑、大明寺教会、更に日本で初めての鉄造六角形の洋式灯台など歴史豊かな島である。伊王島公園には「白秋歌碑」が「俊寛僧都の墓」と並んで建っている。建立は昭和25年12月、発起人は長崎地方裁判所所長石田寿と村田修一郎村長。この事を知るのに二つの新聞がある。一つは「海睨む白秋の歌碑…」と題する長崎日日新聞と、「伊王島に白秋歌碑…」と題する長崎民友新聞そして、歌碑には



白秋歌碑

伊王島俊寛の遺蹟なりといふ

夏早き伊王島、家つづき石畳道、その下がり人気あらぬに、
仰ぎ寝る男童ひとり、何怒る両の腕拱み、将た傲る両の脚張り、
直に射すこの日の照りに、直に立つ潮の香唼(くら)ひ、
何睨むその面がまへ、将た募るそのいきどほり、離れ島この海中の、
空遠き果敢なき風に、口も結びて

反歌

いにしへの流され人もかくありてすゑいきどほり海を睨みき

碑の高さ1.2メートル、幅0.74メートル。高さ1.14メートルの台座の上に長崎側を向いて建つ。

この歌碑について「伊王島町郷土誌」は次のように記している。「この歌は北原白秋の絶歌ともいえるもので、この歌を最後としてこの世を去った白秋は日本の詩壇における国宝的人物として日本文学史上にその名をつらねている。その白秋がこの島に思いを馳せて詠んだ「俊寛追憶の歌」は永久に記念する歌碑と言うべきである」と。

長崎滞在中一番大きな足跡を残したのが伊王島であった。

白秋の歌碑は全国69箇所、長崎県に5箇所（長崎市2（伊王島町、万才町）佐世保市2、雲仙市1）ある。

伊王島見学の後は大浦天主堂に向かった。“教父の長服を奪って着、罌広の黒帽を冠って撮影。さながら邪宗門僧のごとし”（「多磨」南方旅行の話）とご機嫌な様子を記している。さらに唐八景に登り長崎を一望し、午後6時より南座（本石灰町37）の検番演習会见物、白秋を中心とした芸奴三勇士招待の稽古座談会に臨んだ。

26日、長崎滞在中、浦上天主堂、県立図書館、諏訪公園、前回来崎した思い出の所である。夜は山口晴耕の自宅（現在は築町で明治維新創業の紙問屋・祖先はオランダ通詞）で「長崎多磨会」の発会式。

27日、佐世保へ29日雲仙30日島原そして、白秋は大牟田、南関、柳川、福岡、小倉を経て四国の高松に立ち寄り、6月中旬ごろ帰京。

ところで、白秋はどの宿においても、あまり外出しないで酒ばかり飲み、ご飯は日にせいぜい二杯くらい。また、酒の他、敷島（20本入煙草）を一日平均8個喫んだ。もっとも、一口軽く吸ってポイと火鉢の灰に挿すと云うもったいなさ。白秋は長崎で一首、

静かにただに静かに過ぎにけりこの長崎の白南風の雲を

（三丸正紀）

参考文献

「島内八郎めもあーる」島内 八郎 著 長崎文献社 昭和52年発行

「ここは肥前の長崎か」堀田 武弘 著 あすなろ社

「創業100年の長崎造船所」三菱長崎造船（株） 昭和32年発行

「長船よもやま話」三菱重工（株）長崎造船所発行 平成19年6月

「あすなろ」短歌雑誌 昭和59年45号 昭和堂印刷（年4回発行）

「伊王島郷土誌」伊王島町発行 昭和25年版 昭和47年版

「長崎日日新聞」昭和10年5月22日 夕刊

「長崎新聞」平成23年7月29日「水や空」

◎ 吉井勇

歌人、劇作家、小説家。明治19年東京市生まれ。早稲田大学中退。祖父友実は薩摩の人で、西郷隆盛、大久保利通らと国事に奔走し、明治になって伯爵を受爵する。勇は15歳で作歌を開始し、20歳で新詩社に入社。雑誌『明星』に投稿するが、22歳のおり、新詩社を退社。翌明治41年（1908）「パンの会」を結成、耽美派の拠点となった。またその翌年石川啄木、平野万里とともに『スバル』を創刊。勇の文学的出発点となる。第一歌集『酒ほがひ』大正5年（1910）によって文壇的地歩を固める。歌風は、酒と情痴の世界を歌い、耽美頹唐の傾向が強い。そうした文学の隆盛に対して、大正5年（1910）「遊蕩文学撲滅論」が発表され、多大の痛手を蒙った。さらに、昭和8年（1933）妻の不行状が指弾されるに至り、社会的地位が問われ爵位を失う。失意のうちに歌行脚を重ね、土佐の片田舎に隠棲した。

その苦境の末、文学的転機を迎える。その後の歌風は、耽美頹唐は影を潜め、枯淡で人間的な滋味あふれる境地を展開する。

吉井勇は長崎にとっては最も親しまれた歌人の1人で、10数回も長崎へ足を運んだといわれている。長崎を詠んだ歌は200首にもおよぶ。長崎について最も多い詠歌を残しており、斉藤茂吉と並べて双璧と称すべき歌人である。

明治40年（1907）8月、「五足の靴」で与謝野寛、北原白秋らと初来崎。

市内を散策した後、長崎の旅館「上野屋」で1泊している。その時の様子を記述したものは残っていないが、「東京二六新報」紀行文には吉井勇が熊本で記した“…長崎、長崎、あの慕かしい土地を何故一日で離れたらう。顧みて云ひ知らず残り惜しい。…”という長崎印象も載っている。吉井勇自身も後年、随筆『老境なるかな』の中で、“新

詩社に入り『明星』に歌を出すやうになったが、さうなると私の歌に対する情熱は日毎高まり、明治40年九州へ旅行したとき以来、切支丹遺跡探訪から得た異国情緒に対する憧憬は、自由主義的外国文学の影響もあって、短歌の封建制を破ることに専念するやうになった。私がこの旅行によって歌領域を大きく広めたことはいなめない。…”と記している。吉井勇の生涯に忘れえぬ印象を与えた長崎への旅だった。

大正9年(1920)5月、永見徳太郎邸に10日近く寄寓、茂吉と一緒に市内を見物し、諏訪神社の月見茶屋での「歓迎歌会」に出席。この時歌集『夜の心 長崎紀行』に載る『長崎百首』を詠む。

昭和5年(1930)4月、小浜の旅館に2泊しその間に雲仙へ行き、その後長崎の旅館に宿泊。

昭和11年(1936)、勇は「歌行脚」と自称した旅に出かけ、7月に長崎に入り、1月近くも滞在「精霊流し」に感激した。

吉井勇の歌碑は全国で20数基あるが、それは主として九州と四国である。九州でも長崎県が一番多く8基あり、長崎市内に5基残っているが、個人依頼のものが多く、歌壇関係が建立したものはないといわれている。市内にある5の歌碑を巡りながら詠まれた歌の背景や状況などを考察した。

(1)昭和27年(1952)5月、『志やがたらお春碑』の除幕式に夫人同伴で出席。

長崎の鶯は鳴くいまもなほじゃがたら文のお春あはれと(写真①)
碑の建立者は若山牧水門下の歌人・上野初太郎で、彼が宝くじで当てた1等の賞金を使ってこの碑を建てた。この場所に建てたのはお春がこの辺り(旧筑後町)に住んでいたからである。なお、この歌はこの碑のための新作であった。表の題字は、広辞苑を編した言語学者の新村出である。

(2)この旅で勇は道ノ尾温泉にも足を伸ばした。そこの料亭の経営者重富きみに案内された料亭2階から満々と水をたたえている浦上水源

池を眺めて詠んだ一首が

とこしへに水きよかれと祈らまし蓬萊の池を見はるかしつつ (②)

『蓬萊の池碑』の除幕式は昭和29年(1954)初夏で、浦上水源池の一番奥にある湖畔の広場に重富きみによって建てられた。その後、昭和44年(1969)本蓮寺境内に移転された。

(3)薬効クリーム「黒龍」の発祥地を詠んだ

黒龍といふ名を石に刻ませて父をこそおもへ母をこそおもへ (③)

昭和27年(1952)11月、当時の黒龍社長宮崎雅志が父母の恩を碑に託して建てたもので長崎県勤労福祉会館横坂道側に建っている。

(4)昭和31年(1956)5月、古賀迎仙閣で歌碑除幕式が行われた歌

うつし世にやはらぎあれと今日もまた行仙嶽を見つつ祈りぬ (④)

この碑は九州パルプの社長井上米一郎によって建立された。歌は井上邸「迎仙閣」の座敷からの景色を詠ったものであるが、実際には行仙岳は前の山に隠れて見えない。除幕式の挨拶で吉井勇は“長崎には数多くの歌碑が立ち浅からぬ因縁があります。願わくば準市民として受け入れて欲しい。”と語り、これに応じて当時の田川長崎市長は、“準市民として長崎を見守っていただくことを、双手を挙げて歓迎します。”と述べている。

(5)勇にとって最後の長崎訪問の年となった昭和34年(1959)の3月12日に来崎、翌13日には稲佐山の歌碑建立場所の下見をした。同年12月5日、長崎市によって建立された稲佐山歌碑の除幕式が行われたが、当時の稲佐山はロープウェイが完成し長崎の新しい観光名所になったばかりだった。

おほらかに稲佐の嶽ゆ見はるかす海もはろばろ山もはろばろ (⑤)

勇も雄大な五島灘をバックに立つ歌碑に非常に満足げだった。

それぞれの歌碑の所在地

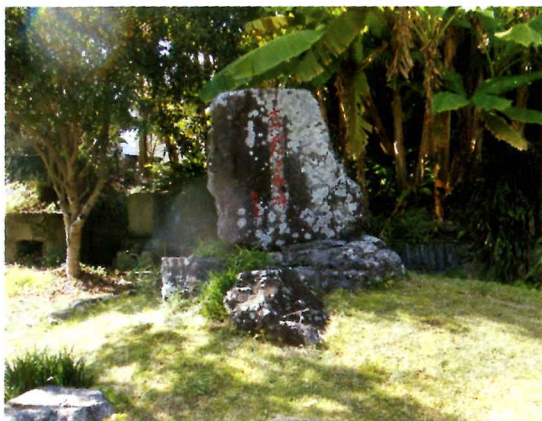
①玉園町3番77号 聖福寺境内

②筑後町2番 本蓮寺境内

③ 桜町6番地 長崎地区労働福祉会館敷地内

④ 松原町2520番地 迎仙閣内

⑤ 稲佐町364番地1号 稲佐山公園内



① 「志やがたらお春碑」



①の裏面



② 「蓬莱の池碑」



③ 「黒龍の碑」



④ 「行仙嶽の碑」



⑤ 「稻佐嶽の碑」

(坂本紘一)

◎ 永井荷風と長崎の交通事情

長崎は永井荷風が我が国で最も好む土地として伝えられている。長崎観光の長崎さるくのパンフレットの内容にもこのようなことが掲載されている。しかし長崎について書かれている荷風の作品は『海洋の旅』『十九の春』の紀行文のみである。しかも『海洋の旅』は10数ページ『十九の春』においては数行しか書かれていないが、この2つの作品を通じて当時の長崎の事情を垣間見ることができたので紹介してみたい。

『十九の春』は明治30年（1897）荷風が19歳の頃、荷風の父永井久一郎が日本郵船上海支店長として上海に赴任する際、家族とともに上海へ旅行した時の紀行文である。横浜から上海行き航路について、荷風は「……横浜から船に乗り……神戸の港で……船は積荷をするため二日二晩碇泊 翌朝、長崎に到着している。「その頃長崎には汽船が横づけになるような波止場はなかった」為、下船せず、船に乗ったまま1日を過ごした。その時、その船に父親を訪ねてきた「支那人が……サイパンと叫んで小船を呼んだ声をきき、身は既に異郷にあるが如き一種言いがたい快感を覚えた……」「朝の中長崎についた船はその日の夕方近くに纜を解き、次の日の午後には……上海の埠頭に着いた」と書いている。明治30年は大浦バンドの代表的な建物、長崎税関下り松派出所、ウォーカー商会、香港上海銀行、長崎ホテルなどはまだ建築されてなく、海岸にはサンパンがかなり多く浮き、外国船相手に商売を行っていた。

※上海航路は当初は安政6年（1859）イギリスの汽船会社が開設、その後、アメリカの汽船会社、日本の三菱会社も横浜―上海航路を開設、三菱会社に対し明治政府の後押しもあり、外国の汽船会社は撤退したが、明治政府はさらに共同運輸会社を開設し、三菱

との激しい価格競争が繰り広げられた。しかし、これ以上の競争は日本の船会社の共倒れとなることを恐れ、明治18年（1885）両社は合併、「日本郵船」が誕生した。その年、日本郵船長崎支店も開設された。前年の明治17年（1884）大阪商船長崎支店も開設され、北米・南米航路に従事し、東洋汽船は香港航路、外国汽船も香港航路など定期航路が開設し、長崎は九州隋一の国際海洋航路の港として活況を呈していた。

その後、荷風は明治44年8月長崎を旅行し、『海洋の旅』を書いている。この時も荷風は往復とも、上海航路を利用し、横浜から上海行きに乗り4日かけて8月17日長崎に到着、長崎行き出発に関して、出発2日前、慶應義塾大学の教授の職を紹介した森鷗外邸を訪問し「長崎に立つ」と告げたことが鷗外日記に記されている。

「長崎は……極めて綺麗な、物静かな都であった。石道と土堀と古寺と墓地と大木の多い街であった。……長崎は日本からも遠く、支那からも遠く、切支丹の本国からも遠い……」と長崎は日本であって日本でない街、独特の街であったと紹介している。「外国人向きの商店ばかり竝んだ一條の町を過ぎ、丸山に接する大徳寺といふ高臺の休茶屋から、暮れて行く港の眺めてゐたときであった。……二三箇所から……梵鐘の響きは、長崎の町と入海とを丁度圓形劇場のやうに圍む美しい丘陵に……」と旧大徳寺付近からの長崎の景色を褒めている。「長崎の古い寺々は蔦まつわる其の土堀と磨減った石段と傾いた樓門の形とに云ひ知れぬ懐かしさを示す……」寺町辺りを歩いていることが判る。また「山の手なる天主堂の壁にかけてある油繪が示してゐるやうな、悲壯なる宗教迫害史の……」と大浦天主堂内に掲げてある二十六聖人殉教の油繪が既に明治44年当時からあったことが窺われる。

荷風は長崎に到着したその日は福島屋旅館に宿泊、東京の知人に長崎茂木大崎海岸の絵葉書に「唯今長崎についた……長崎の町のはずれには寺と墓多し」と便りをしている。

※明治期には長崎に十数軒旅館が造られたが「福島屋」は長崎市大村町14（現在万才町3-16安田火災海上ビル）の場所にあった。この宿には大正2年（1913）孫文も宿泊している。その他当時長崎を代表する旅館としては与謝野寛等が「五足の靴」の旅行で宿泊した長崎市萬歳町12（現在万才町6-25長崎家庭裁判所）の場所にあった旅館「上野屋」、東郷平八郎、乃木希典、斉藤茂吉が宿泊した長崎市今町58（現在金屋町2-9小林産婦人科）に有った「みどりや旅館」などがあり、この3軒は長崎の一流旅館と呼ばれていた。その他、著名な旅館は、外国人向けのホテルは大浦町松が枝町など旧居留地に明治30年代、長崎ホテル、ジャパンホテルなど十数件あったが30年代後半になると逐次撤退していった。

翌日18日、荷風は茂木より小浜へ「こゝは人も知る通り、上海やマニラや浦鹽あたりから、日光箱根などへいくことの出来ない種類の西洋人が、日本の風景を唯一の慰藉として遊びに来る土地である。」荷風はここで2泊して茂木に戻っている。

※茂木、小浜、雲仙は長崎の外国人の避暑地、保養地として開かれていたが。特に茂木は長崎の近郊で景勝地であり、夏は海水浴場もあり、松ヶ枝の長崎ホテルの支店やモーリスホテルなどの外国人向けホテルがあった。明治39年には稲佐のお栄さんこと道永栄がビーチホテルを開業している。茂木はロシア艦隊が長崎に入港したときは軍楽隊を先頭に茂木街道を降り遊んだという話が残っている。

また、明治末期から大正にかけて茂木は天草（富岡、本渡を）経て三角行きの航路、口ノ津、加津佐を経て島原港行き、網場、タエ、有喜、千々石、を経て小浜行きの3航路があった。

「毎日一回入江を往復するちいさな蒸気船に乗って元來他港へ歸つた。……對岸なる茂木の港へ上がると、こゝにも外客の爲めに設けられてある小さな木造りのホテルに避暑の外人が込み合っている。ホテルの

車を雇つて、長崎に歸る……」このホテルは港近くにあるところから道永栄のビーチホテルではなかったかと推測される。

20日、荷風は長崎で1泊し、帰りも上海から出発した横浜行きの船で長崎から乗船し、横浜へ帰っている。この頃の横浜－上海航路は週1便の航路であったようである。では明治大正期の頃の長崎の他の交通事情についてもどうであったか触れてみたい。

※明治6年(1873)長崎市に人力車が出現、築町にあった対州屋敷が購入したのが始まりといわれている。その後人力車の営業が生まれ、人力車の運賃は4銭から9銭ぐらいであった。大浦海岸に外国船が入港すると大浦海岸一帯は人力車で埋め尽くされたという。しかし、明治40年代から外国定期船の入港が減少し、大正4年(1915)には市内路面電車の開設が大きく影響し人力車は大きく衰退していった。

明治30年代になると乗合馬車も出現、八坂町－茂木、長崎病院下－長崎駅前・大波止・出島を往復した。

明治36年(1903)年長崎－茂木に乗合自動車が発車開始し、同区間の定期乗合馬車に敗北したが、大正7年頃には長崎市内は自動車業者が増えていった。

鉄道については明治30年長崎(現浦上駅)－長与が開通し、長与－早岐は汽船で連絡していた。

明治31年早岐－大村、ついで大村－長与が開通し、長崎－門司が直通で結ばれた。

明治38年長崎港湾工事も完成し、現長崎駅に仮庁舎を建設し長崎駅が開設され、長崎－門司には1日1本急行列車が運転開始、従来の長崎駅は浦上駅に改めた。以降、鉄道は発展していく。

同じく明治39年には稲佐橋も開通、稲佐方面には小船で渡っていたが、歩いて渡ることができ大いに便利になった。

大正4年、長崎電気軌道株式会社が設立され、長崎病院下－築町

電車が開通し、その後は路線、距離も拡長、現在においても市民の足として活躍しているのは周知のとおりである。大正12年（1923）日本郵船が長崎－上海に定期航路を開設、最速26時間で結ばれ、週2回運行、翌年神戸まで航路が延長された。

大正15年（1925）日見トンネルが開通し、陸上交通も少しずつであるが、発展していった。

明治大正にかけて長崎の交通の近代化が図られていったが、天然の良港として育まれてきた港は、3方が山々に囲まれている為、陸上交通はトンネルを掘削せざるをえないという条件の悪さがあり、現在も他都市と比較すると非常に遅れが見受けられる。

（八木久雄）

参考文献

- | | | |
|------------|------|-------|
| 荷風全集第13巻 | | 岩波書店 |
| 考證 永井荷風 | 秋葉太郎 | 岩波書店 |
| 長崎市制五十年史 | | |
| 長崎市制六十五史 | | |
| 長崎異人街誌 | 浜崎国男 | 葦書房 |
| 長崎事典 風俗文化編 | | 長崎文献社 |
| 旅する長崎 17 | | 長崎文献社 |

◎ 齋藤茂吉 (さいとう もきち)

—医学専門学校教授として長崎赴任—

明治15年(1882)5月14日～昭和28年(1953)2月25日。山形県南村山郡金瓶村(現上山市)の上位農家守屋熊次郎三男として生まれ、血縁の齋藤紀一の養子として3歳で約束、14歳で同家の書生、23歳で次女てる子との婚姻による婿養子として齋藤を名乗り、青山脳病院を継ぐ。岳父齋藤紀一は、山形医学校を出、東京医学専門学校済生学舎にも学んだ。1900年、日本最初の精神病者監護法が公布された年、横



浜から独へ留学して精神病学を学び、仏・英を視察。帰国後3か月で青山病院を創設。1908年、二度目の外遊で米・仏・西・阿・英・独・墺・伊・瑞・丁・洪を回った。婿養子茂吉は、長崎医専教授の時、エジプト経由、英・仏・米・瑞・墺、後から仏と独が変更の留学辞令を受け渡欧した。

宮川雅一著 長崎散策 その2 「齋藤茂吉の歌碑・歌跡を訪ねて」に、大変詳しく長崎での行動は収録されている。大正6年12月3日渡米予定の長崎医専精神病担当教授石田昇の留学後任として話が持ち込まれ、11月7日～13日、下打ち合わせに初来崎。そして、同12月17日、東京駅発(33時間の旅程)同18日長崎駅着。みどりや旅館投宿、その後一応金屋町に落ち着いていた。同19日、長崎医学専門学校教授とし出勤・尾中守三校長の訓辞を受け、長崎病院精神科部長室に入る。同22日、県立長崎病院精神科部長の嘱託を受け、翌年1月から精神病学・法医学の講義を始める。同6月には「長崎に来て少し後悔の気味あり～云々」と書き送った手紙もあり、それから3年3か月余の腰掛けの長崎在住であるが、同7年10～11月及び同8年2～6月「緊急者ノえ



るごぐらむ二就キテ」の報告を行い「早発性痴呆ニ於ケル植物性神経系統ノ機能ニ就テ」の学会発表準備をしている。同3月29日上京、同4月2日、東京大学法医学教室において開催された第十八回日本神経学会総会の第八席として発表を行っている。それは、後のウィーンにおけるシュピーゲルとの動物実験による共同

研究「植物神経中枢のホルモンによる興奮性について」にも繋がるであろう。「長崎に来てよりあはれなる歌なきをわれにな問ひそ寂しきものを」ともあるが、彼は精神科医学博士と言う公職と共に歌人として有名であり、来崎1年前に生まれた長男茂太氏も離崎後6年後生まれた二男宗吉氏も精神科医学博士で作家であった。宮川氏は、地元紙今年11月13日郷土史岡目八目で、同10月24日亡くなられた北杜夫親子来崎に同行された時の写真をお載せで、一緒にお写りの茂吉先生直接出会いの黒岩二郎氏は公私共に大変真面目でご立派な作歌活動中である。家族の事に触れたついでに、25歳の彼の妻は、同8年11月、長男4歳の茂太を連れて来崎している。妻子安着の晩餐を、長崎最大の煉瓦建て建築・海の見える景勝の地の異国めいた色彩を漂わせる大浦松が枝町の海岸通り長崎ホテルで取る為、人力車を走らせた。第二歌集「あらたま」出版をもくろむ彼は、「四歳の茂太を連れて大浦の洋食食ひに今宵は来たり」と詠った。東中町の寓居は、長崎駅の近くで、諏訪ノ森や黄檗宗聖福寺・福濟寺が近く、木造二階建ての二軒長屋。玄関の格子戸をあけると、奥まで長い土間が続き、左に三畳・右に六畳八畳・台所に接して女中部屋・二階が六畳四畳半八畳と言う貸家だった。幾度か去来はしていた時に比べて、長逗留のつもりか多くの家具と長崎では珍しくない貸ピアノを借り出して据えると言う妻のモダンさだった。妻子が落ち着いた翌幕の内、流感に掛かった彼は、学校

も病院も休んで三～四日の間生死の境を彷徨った。それからは、様々な人の見舞いを受けながら療養を続けるが、「斎藤さんの奥さんちゅうのは、火事見物好きなさる奥さんですたい。」とか「娘のごと長い振袖着て、七三に分けた髪で、我が物顔に街を歩きよる奥さん」との評判も立った。彼にとっては気の冴えない二ヶ月寝込んで、三月半ば過ぎやっと病院や学校に出かけた。



その頃になると妻が外に出なくなり、自宅でピアノやヴァイオリンの練習に励んだ為に、近所からの苦情が渦巻いた。それに、

名流夫人令嬢十名近く集まってダンス会が開かれた。そこ辺りの夫婦間の問題をも苦悶しているうち、6月1日咯血に侵され、6月25日長崎内科に入院する事になり、やっと7月20日に退院した。それから間もなく、岳父の呼び寄せで、妻子は天洋丸と言う船旅で横浜を経て帰る事になり、妻子を門口迄見送った。その後、島木赤彦が見舞いに来崎、長崎でよく交流した土橋青村宅で「アララギ」の歌会も開かれた。「長崎の暑き日に君は来りけり涙しながらわがまなこより」とある。が、彼はあくまでも精神科の医者が本業で歌人は趣味の域であったのだが、長崎の日々は、交流も生活の主体も退嬰的退廃的であった。来客・島木赤彦を案内がてら、その後、主治医の旅行許可を得て小浜温泉經由雲仙温泉へ向かった。やっと翌10年2月、医学論文脱稿、同月末文部省在外研究員に命じられる。同10月27日には病癒え、健康な彼が郵船熱田丸で横浜から出航した。彼にとっての長崎は、留学前の一休みの時で、地元歌人等との交流はあったが、多くの日々が入院療養生活で過ぎた。山形生まれの彼が、長崎の地で経験した諸々の事は彼の神経



に深く記憶された事だろう。同12年12月30日、ミュンヘンにて「雪ふみて南方墓地にシーボルトの墓をたづねぬ雪ふりみだる」、翌年1月「長崎の精霊流しの囃もありてシーボルトむらむらとよみがえる」とある。呉秀三門下の彼が、石田前任教授と長崎でシーボルト宅跡を訪れた日々と繋がる。同15年3月上旬、一家あげて東京に引き上げた永見徳太郎宅にて、同8年5月、芥川龍之介は、菊池寛と茂

吉に初めて会って以後、8年間の交流があったようだが、芥川の神経衰弱の治療には功を奏さなかったようだ。長崎の地が、25箇所の出島や六ヶ町から生じ、小さな寒村が急激な経済革命によって統制経済特区として限定的発展現象を示していた幕末・明治初期からの時勢の変化を正しく学ばなければ、個人も地域も江戸時代には帰れない事が、この時期になれば既に明らかである。永見家等、幕末・維新时期近代日本を築いた大久保利通の征台の役の駆け引き等、多くの重要な人物の出会い・政治経済の重要な交流の場にもなっていた。茂吉在住中、長崎学の大家にも出会っているが、丸山通い等退嬰退廃的な出会いで何の価値創造にもなっていない。新たな時代に起業していくには、(奇しくも、今年是小島養生所開設150周年) 余りにも地域文化に哲学が無さ過ぎる。同10年3月16日、午後11時発の列車で離崎。(桜井蓉子)

参考文献 『精神病医 齊藤茂吉の生涯』岡田靖男著 思文閣出版
『齊藤茂吉と医学』加藤淑子著作集1 みすず書房
『長崎の茂吉』あららぎ物語 北村謙次郎 皆美社
『齋藤茂吉』新潮日本文学アルバム 新潮社版

この4冊、長崎大学精神神経科中根充文名誉教授にお教え頂き、『齋藤茂吉の歌碑・歌跡を訪ねて』長崎散策その2 宮川雅一著と長崎新聞11月13日号岡目八目の写真の2点、同先生にお借りした。感謝。

◎ 永見徳太郎文化人との交流

長崎市銅座町の素封家永見徳太郎は、大正時代、長崎を訪れた文化人を献身的に世話した人として知られている。また、自らも、美術や文芸をこよなく愛する人だった。

昭和63年7月と平成2年10月に相次いで発刊された故大谷利彦氏の著書『長崎南蛮余情』『続長崎南蛮余情』（長崎文献社発行）は、大変な労作であった。副題に「永見徳太郎の生涯」とあるように、永見徳太郎の伝記が綿密に述べられ、それに加えて、明治、大正、昭和期の長崎における文学や芸術の事情が色濃く描かれていて、とても参考になる書物であった。

以下の拙稿は、大谷利彦氏の著述を基本資料とし、それに私自身調査したことを加えて述べるものである。

永見徳太郎は明治23年8月5日、江戸時代以来の長崎の豪商永見一族の本家に出生、幼名は良一といった。数え年10歳の時に、父の4代目徳太郎が死去し、17歳の時（明治39年）、兄の5代目徳太郎が死去する。それがため、この年、良一は6代目永見徳太郎を襲名することになった。永見徳太郎（良一）は、明治38年3月、高等勝山小学校を卒業し、4月7日、私立海星商業学校英語科に編入する。翌39年4月6日、私立海星商業学校を家事の都合上（家業を継ぐためだったと思われる）、退学している。以上は海星学園所蔵の学籍簿による。また、海星学園所蔵の同窓会会報には、同窓生永見徳太郎の記事が散見され、会報15号（昭和3年3月発行）と26号（昭和10年8月発行）には、海星在学時代の思い出を綴った徳太郎の寄稿文が掲載されている。明治44年9月、22歳の徳太郎は東京府渋谷町出身の藤井銀子（18歳）と結婚する。銀子は美貌で献身的な妻だった。徳太郎は倉庫業、保険業などを経営する少壮の実業家であった。一方、夏汀と号し、写真や絵や

文芸に熱中する芸術愛好家であった。

大正6年12月、「アララギ」の歌人齋藤茂吉が長崎医専教授として赴任する。大正10年3月長崎を去るまでの間、茂吉は銅座町の永見邸をしばしば訪れ、銀子夫人の手料理の接待にあずかったという。

大正7年、徳太郎は数え年29歳であった。この年、8月末、画人竹久夢二が来崎し、永見邸に10日間ほど滞在する。永見邸洋間で、茂吉、夢二、徳太郎、それに、長崎在住の歌人松本松五郎、大庭耀、三浦達雄の6人が写った写真はこの時のものであり、松五郎の長女松本名那さん蔵である（大谷著 p 195掲載）。

竹久夢二は長崎の異国情緒への憧憬を多年持ち続けていた。大正4年頃から徳太郎と文通し、憧れの長崎来遊が実現したのだった。長崎では永見夫妻から厚いもてなしを受けた。夢二はそのお礼として、大正9年に「長崎十二景」を、大正10年に「女十題」を贈った。夢二の描く面長の美人画にはモデルがいたようだが、「長崎十二景」の中の女性に関しては、どことなく、銀子夫人の面ざしが反映しているように思える。

大正8年5月、芥川龍之介と菊池寛が来崎し、永見邸に数日滞在する。芥川、菊池、徳太郎、それに長崎高商教授武藤長蔵が永見邸の庭先で写った写真はよく知られている（大谷著 p 253掲載）。この短い滞在中、芥川と菊池は齋藤茂吉の勤務先の長崎病院を訪れ、茂吉と面談している。これが彼らの初対面であった。

大正9年2月下旬、歌人吉井勇が来遊し、永見邸に10日間ほど滞在する。吉井勇は明治40年「五足の靴」の旅以来13年ぶりの長崎であった。この滞在中、茂吉は毎日のように吉井勇と会っていた。

同9年晩秋、茂吉の歌友で日本画家の平福百穂が来遊し、永見邸に滞在している。この時、永見邸の庭での写真が大谷著248頁に掲載されている。前列に徳太郎、百穂、徳太郎の妻銀子が座し、徳太郎の長女トキは百穂の膝にもたれ、徳太郎の長男良は銀子に抱かれている。

後列に立っている人物は真ん中が茂吉、右が長崎在住の画人大久保玉珉、左の蝶ネクタイ姿は、徳太郎の先輩格の友人林源吉である。この写真は幼い子供たちと徳太郎夫妻を交えた文化人が写っている珍しい写真である。徳太郎の長女三宅トキさん蔵とのこと。

大正10年3月、斎藤茂吉は長崎を去る。その後、茂吉はドイツ留学を経て、東京の養家先の病院の再建に努める。永見徳太郎は大正15年3月、東京へ移住するが、東京でも茂吉と会っていたようだ。

例えば、昭和5年6月28日斎藤茂吉日記には「永見徳太郎と銀座フネフネで会飲」とある。徳太郎の後輩格の郷土史家渡辺庫輔は斎藤茂吉と芥川龍之介に師事したことで知られているが、徳太郎にとっても、いや、大正時代の長崎にとって、茂吉と芥川は忘れ難い文人であったに違いない。

大正11年5月、芥川龍之介が長崎に再遊する。渡辺庫輔の世話で本五島町の花廬家旅館に20日ほど滞在するが、1日に1食は必ず永見家でとっていた。永見夫婦は客好きである、とは芥川の言である。芥川には「奉教人の死」などキリシタンものの作品があり、長崎は彼の文学にとって大切な場所であった。芸者照菊に贈った「河童の銀屏風」は、永見徳太郎の所から大筆と唐墨を借りて描いたものだった。大正13年、徳太郎は戯曲集「愛染草」「月下の砂漠」創作集「恋の勇者」を、そして翌年戯曲集「阿蘭陀の花」を相次いで刊行する。芥川や菊地のように、文芸家として世に出ようという意気込みがあったのかも知れない。

大正14年冬、徳太郎は上京して芥川に会っている。東京転住のことを相談したようである。そして、大正15年3月、数え年37歳になっていたが、徳太郎は長崎の家を引き払い、妻子と共に、東京に移住する。長崎市銅座町の財産家として知られ、商工会議所議員や市議会議員も歴任した身でありながら、何故、東京に移住したのか。諸説あるが、徳太郎は先祖代々の家業を投げ捨てても、自分の好きな道、すなわち、

文筆の道を選んだのであろう。事実、東京移住後の徳太郎の文筆方面の活躍は目覚ましい。『中央美術』『新小説』『文藝春秋』といった雑誌に矢継ぎ早に長崎関連の随筆を発表している。また、ラジオ放送にもしばしば登場し、今日のタレントのような活動をしている。大正15年、「長崎版画集」「続長崎版画集」「南蛮長崎草」を刊行。翌昭和2年7月24日、芥川龍之介が睡眠薬自殺。その10日ほど前、徳太郎は小説「河童」の原稿や書をもらっている。11月「長崎の美術史」を刊行。昭和3年、「南蛮屏風大成」を刊行。長崎の美術、特に南蛮美術を世に広める活動をしていた徳太郎であったが、昭和6年12月、南蛮紅毛美術の蒐集品約250点を神戸の池長孟に譲渡する。譲渡価格5万円であった。徳太郎は収集家であるよりは、文筆活動の方に重点をおいたのであろうか。徳太郎の文筆活動は、長崎ものの随筆・読物類が主であり、長崎を紹介した功績は大であった。例えば、昭和6年に発表した文章には、「長崎時代の坂本龍馬」、「老妓長崎愛八」などがあり、興味深い。特に前者は3回連載の力作である。昭和17年7月6日、当時、『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』に小説「海援隊」を連載中だった作家浜本浩が長文の手紙を徳太郎に寄せているが、徳太郎から海援隊関係の資料を借りたことや助言を受けたことなどが記されている。徳太郎は海援隊関係の知識を持っていたようである。

昭和7年、8年は精力的な執筆活動を行っている。「文芸年鑑」によると、昭和7年、徳太郎の26篇の発表作品名が載っている（大谷著続篇p326）。昭和8年は32編である。そしてこの年、文芸家協会評議員25名の中に、新任者として選ばれている（大谷著続篇p333）。しかし、昭和9年、徳太郎数え年45歳の時であるが、急激に発表作品が減少する。大谷著では健康的な問題があったのではないかと推測されている。昭和11年、中風の発作で倒れたが、軽症で済んだ。昭和13年4月下旬から翌年の正月にかけて長崎に一時帰郷。4月30日、長崎放送局から「開国時代の流行歌」の題でラジオ放送をした。この頃の徳太

郎は舞台写真家として活躍していた。海星同窓会会報26号（昭和10年8月発行）の寄稿文「舞台写真と私」によると、歌舞伎役者坂東鶴之助、守田勘弥、女優水谷八重子、水之江滝子などの写真を撮っていたとある。この頃、歌舞伎座の舞台写真撮影をただひとり認められ、それによって収入を得ていた。しかし、時代は芸術家や文筆家にとって困難な時を迎えていた。昭和6年満州事変、昭和12年日中戦争となり、戦時色が強くなった。昭和15年9月、杉並区西高井戸の家を売却し、現在湯河原町になる吉浜海岸の借屋に転居。かつての資産家永見徳太郎にも経済的な困難が訪れていたのだろうか。

昭和19年4月、熱海市西山磯八荘に転居。近くに谷崎潤一郎が住んでいて、この頃の谷崎日記には永見氏来訪の記事が散見される。谷崎潤一郎は徳太郎がまだ長崎に住んでいた大正15年1月から2月にかけて、長崎丸で上海に行き帰りの途中、永見邸を訪れていて、旧知の間柄だった。戦中戦後の1年ほど、娘三宅トキ夫妻と孫捷彦それに銀子の実母松本てふも磯八荘に同居。終戦の年の9月から翌年にかけて永井荷風も熱海に住んでいて徳太郎と交流があったと考えられる。その後、徳太郎は熱海市内の場所を2回ほど転居し、熱海市上多賀742が永見徳太郎の最後の住所となった。

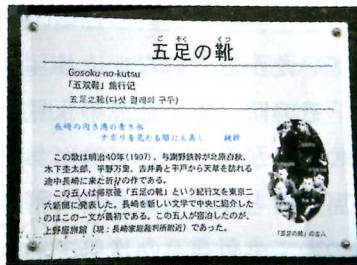
吉浜海岸や熱海に転居後も徳太郎は東京に列車で出て行くこともあった。また、美術の研究や和歌の制作などもしており、芸術への情熱は衰えていなかった。しかし、何らかの行き詰まりがあったのであろう。昭和25年11月20日、熱海市上多賀の家を出て帰らぬ人となった。数え年61歳、満60歳3カ月であった。

「夕月の、西へわたるは、ふるさとの、くんちの街を、照らさんがため」これは死の前年の10月3日、徳太郎が詠んだ望郷の歌である。「妻として永年をつくりただきし事は、霊の残る間感謝するでしょう。実に気の毒です。御わびします……」これは失踪した徳太郎が、妻銀子に郵送した遺書の文面である。孫文が国賓として長崎に立ち寄

った大正2年、永見徳太郎は数え年24歳の若さであったが、長崎の実業家であったので何らかの接触があったかも知れない。また、孫文死去の大正14年には、徳太郎は長崎市議員、十八銀行監査役、ブラジル国名誉領事などを務める長崎の知名士であったので、その存在は孫文にも知られていたかも知れない。梅屋庄吉の没年は昭和9年、数え年67歳である。その時、東京在住の永見徳太郎は数え年45歳。同じ長崎出身の両者の間になんらかの接触があっても不思議ではない。本塾は「孫文・梅屋庄吉と明治大正長崎事情塾」であるので、孫文と梅屋庄吉のことについても付言した次第である。 (新名規明)

◎「五足の靴」の足跡を訪ねて(長崎編)

「五足の靴」とは、与謝野寛(鉄幹35歳)が、まだ学生だった北原隆吉(白秋23歳)、太田正雄(木下杢太郎23歳)、吉井勇(22歳)、平野久保(萬里23歳)の四人を連



れて、当時珍しかった靴を履いて旅した記録、紀行文である。

明治40年(1907)7月下旬に東京を出発した4人は、福岡県柳川の実家にいた白秋と合流し九州の旅を始めた。平戸から佐世保を経由し、船で「東洋日の出新聞」の鈴木天眼を頼り長崎へ入った。

7月下旬から8月末にかけての旅行記は「東京二六新聞」に連載された。しかし、長崎の担当であった鉄幹は、なぜか投稿しなかった為長崎での行動は不明だが後に出版された鶴田文史著「五足の靴幻の長崎編・要の島原編」を参考に五人の長崎での足跡を辿ってみた。

明治40年(1907)8月7日午前11時頃大波止に着き、稲佐渡しの船でロシアとの友好関係で栄えた稲佐を訪れた。日口戦争後寂れていたが、看板のロシア語で繁栄していた当時の面影を残す遊郭で昼食をとったと思われる。

悟真寺、道永栄子(稲佐お栄)経営するホテルヴェスナを訪ねた後、人力車で浦上方面へ向かった。



道左・稲佐遊郭街付近

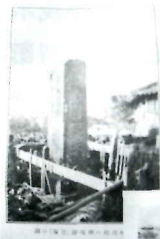


稲佐・悟真寺

⇒浦上天主堂



⇒西坂26聖人殉教の地



←首塚
↓殉教の丘



⇒長崎公園



⇒諏訪神社



⇒中島川の石橋群（桃溪橋～眼鏡橋）から寺町通りを抜け唐寺興福寺⇒皓台寺⇒大音寺⇒唐寺崇福寺⇒思案橋⇒宿舎上野屋で夕食を済ませ、異国の雰囲気味わいながら出島（オランダ）・新地（唐人）・本籠町（西洋人）を通り丸山へ足を運んだ。



丸山界限

8月8日、上野屋から乗合馬車を貸切り、八坂神社前、愛宕橋を渡り、田上峠で休憩し約2里の茂木へ向かって転石より旧道を下り、滑川、茂木の中心地へ出て、11時頃茂木港より天草へ渡った。



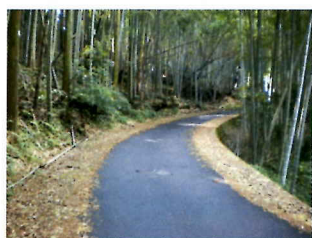
現在の愛宕橋



八坂神社前



田上茶屋



旧道



旧道入口



茂木港棧橋

長崎での滞在は24時間位であったがその時の島原・平戸・長崎・天草での体験は北原白秋の「邪宗門」木下杢太郎の戯曲「南蛮寺門前」により広く明治から大正にかけて文壇に「南蛮趣味」の流行をもたらした。

後に、吉井勇は、当時のことをこう歌っている。

師も弟子もみな年若く長崎に往きし
日遠し夢のごとくに
長崎の街を歩めば目にうかぶ
與謝野の大人の黒き背廣も
年経れどいまも目離れず白秋と
はじめて見たる長崎の街
白秋はつぶら眼をしてゐたりけり
諏訪山の上に海を見るとき
長崎の南蛮寺の鐘の音に心さそはれ
往きしもわれ

吉井勇

(中村麗子・深川文子・松本奈美)

参考文献

『西海の南蛮足文化靴探訪「五足の靴」幻の長崎編・要の島原編』

長崎文献社 鶴田文史 著

『鮮血遺書』 松崎 實 著

『信者発見100周年「100年のあゆみ」』 カトリック長崎大司教区

おわりに

塾顧問 宮川 雅一



この「孫文・梅屋庄吉と明治大正長崎事情塾」は、昨2011（平成23）年が孫文を指導者とする中国の辛亥革命が100周年を迎えだことにちなんで設立されたものと承知している。孫文には、日本にも犬養毅、頭山満、宮崎とう天など様々な理由でその運動を支援した人物がいたが、なかでも長崎生まれの梅屋庄吉は、純粋な友情から夫婦で孫文を物心両面にわたって応援したことで、中国の人々からも賞賛と感謝を受けている。また、明治の後半から大正にかけて長崎には、孫文に眼らず中国他の革命家たちや鈴木天眼、西郷四郎など言論界その他から革命を支援した日本人も多く滞在し出入りしていた。その背景には、それまでの濃厚な海外交流の歴史に加えて、幕末・明治維新時、産業革命を経た科学技術やフランス革命後の自由・平等・人権思想をいも早く取り入れて、在来の日本文化と融合・進化する、内外人を引付けて止まない活気と魅力にあふれる港町長崎の存在があった。入港する内外船舶は年間1千隻を越え、鉄道などの陸上交通機関も日を追って発達していたのである。

ところが、20世紀前半を主とするこの時代の長崎については、キリシタン文化時代（16世紀）、唐蘭貿易時代（主に17・18世紀）さらには幕末維新時代（主に19世紀）に比べると、地元にも全国的にも、この時代を研究する人は少数で、個々の分野・事件・人物などは別として、長崎全体が見渡せる書物に、筆者の勉強不足もあって、なかなか出会うことがなった。本報告書は、孫文・梅屋庄吉夫妻とともにその周辺ないし同時代に活躍した内外の人物が、政治経済から生活文化に至るまで幅広

三ヶ島正彦さんを悼む

松澤 君代



平成23年12月16日午前塾生の方より電話があり。

「新聞の死亡欄に、三ヶ島さんが亡くなったと載っていると家族が外出先で見た、塾のメンバーの方では?」「えっ!!? 奥様では?」一週間前『今日、女房が急に入院することになりましたので、塾定例会を欠席します。』と御本人から連絡を受けていた私は咄嗟に

云ってしまった。

でも、やはり御本人でした。彼は12月15日午前10時頃に、まちなか龍馬館の施設内で帰らぬ人となったのです。

その日は、ある団体主催の史蹟めぐりが行なわれ、長崎市浜の町鉄橋に午前10時集合の予定でした。「お一人まだ見えませんが、時間となりましたので、出発することにします。」と史蹟めぐりは出発しましたが、その一人とは、三ヶ島さんであったと後で知る事になりました。

三ヶ島さんの生前最後の姿を目撃し、緊急通報された方も、きしくも、私たち塾の仲間でした。

三ヶ島さんは、口数は少なかったが温和な人で、大きな目をクリアさせ、おすわりになっている姿が印象的でした。今回の調査レポート作成は誰よりも早く仕上げ削除するのが難しいとおっしゃっていた。

「67才とは早すぎるがあまり苦しむ事なく旅立たれだしとが、せめてもの慰め・・・」と、はからず御本人を発見通報された方はくやしげにいわれていました。この方は、塾の仲間だけではなく親交もあったとのことで、不思議な縁を感じます。

ここにあらためて心から三ヶ島さんの御冥福をお祈り致します。

孫文・梅屋庄吉と明治大正長崎事情塾 の調査報告書に登場した人物たち

- | | | |
|----------|--------------|------------|
| 1 愛八 | 26 岩崎美和 | 51 小川渉 |
| 2 青木たけ | 27 岩崎弥之助 | 52 尾中守三 |
| 3 赤羽四郎 | 28 岩崎弥太郎 | 53 甲斐軍治 |
| 4 アギナルド | 29 岩田清秋 | 54 カラチ |
| 5 芥川龍之介 | 30 岩波静弥 | 55 岳飛 |
| 6 足立仁十郎 | 31 ウエスレー | 56 香椎岩五郎 |
| 7 有栖川宮熾仁 | 32 上野初太郎 | 57 香椎福蔵 |
| 8 飯沼貞吉 | 33 上野弥平 | 58 柏水辰五郎 |
| 9 家永芳彦 | 34 ウォーカー | 59 勝村治右衛門 |
| 10 池田宗度 | 35 ヴォーゲル | 60 金井俊行 |
| 11 池永孟 | 36 ウォルシュ(兄弟) | 61 金子克己 |
| 12 池原日南 | 37 牛島秀一郎 | 62 嘉納治五郎 |
| 13 伊澤蘭軒 | 38 内田良平 | 63 樺島種美 |
| 14 石川啄木 | 39 内海忠勝 | 64 カブリー(N) |
| 15 石田寿 | 40 梅屋吉五郎 | 65 川田小一郎 |
| 16 石田昇 | 41 梅屋ノブ | 66 官梅能 |
| 17 伊藤博文 | 42 梅屋庄吉 | 67 官梅メイ |
| 18 犬養毅 | 43 梅屋トク | 68 菊池寛 |
| 19 井上馨 | 44 爪生震 | 69 北岡伸夫 |
| 20 井上モト | 45 袁世凱 | 70 北原白秋 |
| 21 井上米一郎 | 46 大浦九馬作 | 71 北原雅長 |
| 22 岩倉具視 | 47 大久保玉 | 72 北杜夫 |
| 23 岩崎小弥太 | 48 大隈重信 | (斉藤宗吉) |
| 24 岩崎久弥 | 49 大鳥圭介 | 73 木戸孝允 |
| 25 岩崎弥次郎 | 50 大庭耀 | |

74	木下奎太郎 (太田正雄)	99	西郷四郎	125	神保巖之助
75	金玉均 (キムオクキュン ・岩田周作)	100	西郷(中川)チカ	126	神保幾三
76	金炳基	101	西郷孝之	127	神保内蔵之助
77	ギール(ア)	102	西郷隆盛	128	神保修理
78	日下義雄	103	西郷頼母 (保科近憲)	129	新村出
79	可明子	104	斎藤紀一	130	菅野権兵衛
80	クザン(神父)	105	斎藤茂太	131	杉山武
81	倉田次郎右衛門	106	斎藤一	132	杉山良子
82	栗原玉葉(文子)	107	斎藤茂吉	133	鈴木力(天眼)
83	栗原宰	108	斎藤輝子 (てる)	134	鈴木(大村内) クミ
84	栗原クマ	109	坂本龍馬	135	鈴木淑子
85	栗原破魔寿	110	笹山蕉川	136	スタウト (H)夫人
86	栗原源治	111	佐野常民	137	スミス(W・C) ・(M・E)
87	栗原吉郎	112	澤宣嘉	138	シュピーゲル
88	黒澤明	113	重富きみ	139	西太后
89	黄興	114	重野安繹	140	瀬川(牧師)
90	光緒帝	115	志田貞二郎	141	宗教仁
91	洪鐘宇	116	志田さだ	142	宋慶麗
92	高宗(コジョン)	117	品川弥次郎	143	蒋介石
93	古賀十二郎	118	志波三九郎	144	章炳麟
94	児玉源太郎	119	シーボルト	145	孫文
95	後藤象二郎	120	島内八郎	146	戴季陶
96	近衛文麿	121	島木赤彦	147	高木隆之助
97	孝明天皇	122	じゃがたらお春	148	田川務
98	康有為	123	俊寛	149	竹野敏行
		124	荘田平五郎		

149	竹野敏行	176	デビソン	203	西道俊
150	竹久夢二		(J・C)・(M)	204	西道仙
151	田中直治	178	照菊	205	西元良
152	田辺友三郎	179	照島太郎	206	西ノシ
153	谷崎潤一郎	180	東郷平八郎	207	朴泳孝
154	樽井藤吉	181	挑中村雲右衛門		(パクヨンヒョ)
155	張益隆	182	頭山満	208	ハート
156	張徳隆	183	徳富蘇峰		(J. W)
157	張震隆	184	戸倉胤則	209	丹羽末広
158	張茂隆	185	戸原卯橘		(翰山)
159	チョンポンジュン	186	富田常雄	210	乃木希典
160	陳少白	187	豊川良平	211	野村惣二郎
161	陳平順	188	豊沢仙糸	212	バーバラ寺岡
162	陳(柴田)ミツノ	189	豊臣秀吉	213	浜口嘉四
163	陳玉姫	190	霖(金峰)玉泉	214	浜口(中川)
164	陳清姫	191	永井荷風		ミネ
165	陳秀姫	192	長井久一郎	215	林源吉
166	陳楊俊	193	長川東洲	216	坂東鶴之
167	陳楊春	194	中川キン	217	平野(久保)
168	陳名治	195	永見寛二		万里
169	陳優継	196	永見トキ	218	平福百穂
170	土橋青村	197	永見徳太郎	219	平山周
171	鄭士良		(良一)	220	福沢諭吉
172	鄭永昌	198	永見銀子	221	藤田進
173	鄭(竹野)喜美子	199	永見良	222	プチジャン
174	鄭(竹野)濱子	200	中山マサ	223	ペリー
175	大院君	201	鍋島孫六郎	224	ベル
	(テウオンゲン)	202	西田重助		(グラハム)

平成23年度 孫文・梅屋庄吉と明治大正長崎事情塾
塾生名簿

塾長	村崎春樹	喜多實規男
副塾長	石橋義孝	松尾貞雄
庶務	石橋久美子	猿渡一美
顧問	宮川雅一	細川敏明
顧問	原田博二	松本奈美
塾生	川口政行	深川文子
	今道穎治	中島吉盛
	中村麗子	三ヶ島正彦
	三丸正紀	栗原眞高
	吉野誠次	平山次男
	坂本紘一	宮田一美
	小嶺昭典	北浦由美子
	梶山定子	白地弘奈
	山口篤史	長門ヤス子
	小方みどり	桜井蓉子
	池田範由	松澤君代
	西本浜路	新名規明
	藤本芳子	福田哲也
	原口和代	藤丸清子
	白地成州	八木久雄
	日宇孝良	工藤新一

事務局員 長崎市 さるく観光課 坂口かおり

(敬称略)

孫文・梅屋庄吉と明治大正長崎事情 I

発行：平成24年3月20日

監修：長崎史談会 相談役 宮川 雅一
長崎史談会 会長 原田 博二

発行者：平成23年度 長崎伝習所
孫文・梅屋庄吉と明治大正長崎事情塾
塾長 村崎 春樹

連絡先：〒850-0022

長崎市馬町21番地1

長崎市市民活動センター内 長崎伝習所事務局

電話 095-829-1125

印刷所：〒850-0862 長崎市出島町5番11号

平和堂オフセット印刷(有)

正 誤 表

ページ	行	誤	正
11	13	宗教仁	宋教仁
11	22	宗教仁	宋教仁
15	18	となりと名乗った	となり 載緯国と名乗った
16	10	(天の息子)	(滔天の息子)
30		保田貞二郎	志田貞二郎
116	17	私立海星商業学校英語科	私立海星商業学校本科
126	6	宮崎とう天	宮崎滔天
126	9	賞賛	称赞
126	23	とがなかった	とがなかった
127	9	高原生まれ	島原生まれ
129	8	柏水辰五郎	柏木辰五郎
129	22	大久保玉	大久保玉珉
130	7	杉山武	杉山武良子
130	8	杉山良子	
130	10	鈴木(大村内)	鈴木(大河内)
130	20	宗教仁	宋教仁
130	21	宋慶麗	宋慶齡
131	1	竹野敏行	P130 28行と重複
131	14	浜口嘉四	浜口嘉四郎
131	18	坂東鶴之	坂東鶴之助
132	7	季鴻章	李鴻章
132	8	季家隆介	李家隆介
132	9	松尾大大	松尾丈大
132	24	山田耕作	山田耕伴
133	23		常川和宏